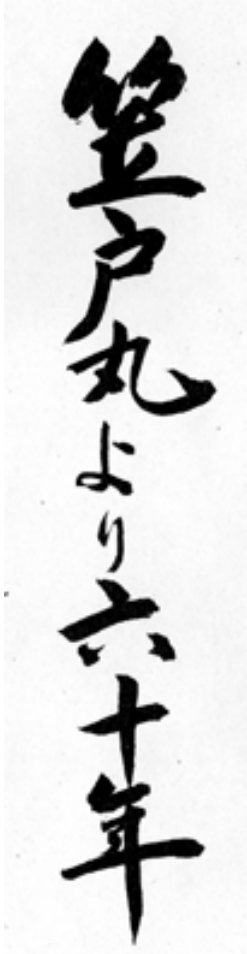
笠戸丸より６０年



目　次

祝　辞……内閣総理大臣　佐藤　栄作
〃　……外務大臣　三木　武夫
〃　……国務大臣・日本海外移住家族会連合会々長　田中　竜夫
〃　……駐伯日本国特命全権大使　千葉　皓
〃　……在サンパウロ日本国総領事　近藤　四郎

〃　……　海外移住事業団理事長　広岡　謙二
〃　……　日伯中央協会々長　沢田　節蔵
〃　……ブラジル日本文化協会々長　宮坂　国人
発刊のことば……在伯県人会連合会々長　中尾　熊喜

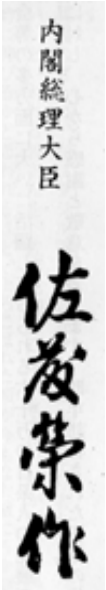
Ⅰ、開　拓
日系コロニアとカフェー……　宮本　邦弘　7
北パラナ開拓の初期……　上野　米蔵　17
沖縄初期移民の苦労……　屋比久孟清　21
移住者の結婚……和田周一郎　28
コンデ街の今昔……石原　桂造　33
初期移民たちの衣食住……半田　知雄　41
明治を旅する〈汗と感傷の歴史　63

Ⅱ、形　成
ブラジル情勢と日系人……　広川　郁三　65
コロニアとジャーナリズム……　藤井　卓治　69
六十年ぶり桜の故国（靖国神社）　永田氏夫妻　78
戦前戦後に於ける環境衛生……　細江　静男　79
地方診療の思い出……江刺家　勝　86
戦前戦後の陸上競技……　原　源造　96
日本の各中央新聞　103

Ⅲ、発　展　１０４
第一世より当伯国生れの第二世第三世に望むこと……中沢源一郎
祖母より孫へ……赤間みちへ　１０８
敬愛するおじいさんへ……山添　良一　１１５
Ⅳ、かさと丸日本へかえる　１２０
在伯県人会連合会と共に移住者援護の使命観…藤川　辰雄
かさと丸在者訪日壮行を祝す…　後藤　武夫　１２５
日本訪問に際して……渡辺七之助　１２８
かさと丸移民について……アンドウゼンパチ　１２９
母との対面……　永田　夫妻　１３１
かさと丸訪日団員略歴……　１３３
金城盛吉、中村たかの、島袋カマ、永田一、永田ノキ、湯ノ口田衣市、山口とも、林岩松、渡辺七之助、
在伯第一回かさと丸移民及かさと丸以前渡伯生存者名簿・琉球政府主席の祝電　１４７
在伯第一回かさと丸移民訪日日誌　１４８
―　付かさと丸及びかさと丸以前渡伯生存者調と叙勲―
輝ける栄光の日々
編集後記　２４４

序

内閣総理大臣



在伯第一回（かさと丸）移民訪日記念特集号発刊を祝し、偉大なブラジル国日系人六十万の先駆者である第一回移民の皆さんに対して、深甚なる敬意を表します。

あわせて海外在住者各位のご多幸を祈ります。

昭和四十三年十月三十日

（以下略）

発刊のことば

在伯県人会連合会

会長　中　尾　熊　喜

在伯県人会連合会は、一九〇八年（明治四十一年）第一回ブラジル移民として、渡伯した笠戸丸移民の中で、いまだ、母国訪問が出来ない人がいるので、この人達に、ぜひ一度母国訪問の途を開いてあげたい、という目的で、運動をすすめてまいりましたところ、幸いにして、日本海外移住家族会連合会、大阪商船三井船舶株式会社を始め、大方関係者諸氏の、ご賛同を得て、その念願がかなえられ、希望者九名、

付添五名、引率者一名よりなる、ブラジル第一回移民訪日団は、六十年間夢にも忘れ得なかった懐かしの母国の土をふむことが出来ました。

一行の感激は、想像にあまるものであったことでありましょうが、特に彼等老移民を感激させましたことは、皇太子殿下御夫妻のご歓待でありました。

この光栄に浴した時、初めて、あゝー、ブラジルに行っていてよかったと、つくづく幸福を感じたと申しております。

また、佐藤総理大臣から、勲六等瑞宝章を各々の胸につけていただいたことも、三木外務大臣より銀盃を授与されたことも、老移民達にとっては、生涯の最良の日々であったのであります。

その他、母国同胞の心からなる歓迎は、一行ばかりでなく、聞くわたくしども、在伯日系人一同を感激させたのであります。一、二の例を挙げますと、一行靖国神社や、明治神宮への参拝途上、テレビで顔を見知られたか、

「永い間、ブラジルで、ご苦労でした」

と、声をかける人があったと申します。また、岐阜県の一有志として、無名で、一万円ずつの餞別を送って来た人もあったと申します。

私共は、やがては、民族の移住という歴史の一コマとして、取りあげられるであろう現次の移民の記録が苦労と郷愁の物語としてのみ伝えられることなく、幸福感と光栄と、人間の厚意との記録としても伝えられることを希望するのであります。

本書は、第一回ブラジル移民の訪日を記念して、訪日当時の模様を伝えることが主な目的でありますが、この機を利用して、笠戸丸以後

六十年間の移瑞の生活、社会情態、などを織りこみ、笠戸丸から六十年という名前のもとに、これに添った記事を各専門家に依頼して一巻とすることを刊行委員会で決定され、その方法で編集を進めたのでありますが、頁数の限定もあり、本書のみに、ブラジル移民六十年の記録をおさめることは、到底出来ないことは明らかでありますが、将来ブラジル移民研究の一資料ともなれば幸いであります。終りに当り、国務御多忙の折柄、態々本書のために、御祝辞をお寄せ下さいました、佐藤総理大臣、三木外務大臣、田中国務大臣、千葉駐伯ブラジル国特命全権大使、近藤サンパウロ日本国総領事等の政府関係の皆様、ならびに、広岡海外移住事業団理事長、沢田日伯中央協会理事長、宮坂ブラジル日本文化協会々長の皆様に厚く御礼申し上げます。

また、本書のために、御執筆願った方々、編集と財務の委員の任に当って下さった皆様、特に祝賀広告を出して協力して下さいました各位に対して感謝の意を表します。

Ⅰ　開　拓

「かさと」丸、それは船名であって、船名ではない。この６０年間にブラジルに移り住んだ日本人、その日本人から生れた日系人にとって「かさと」丸はシンボルである。ブラシルにおける日系人の悠久の歴史は、「かさと」丸をゼロ地点として里程標が刻まれたからである。

ブラジルの移民史からみると、日本人は後輩であり、カスーラ（末子）的存在である。

ポルトガル人、スペイン人はもとより、イタリア人、ドイツ人、ポーランド人、シリア・レバノン人に続いてこの国に移住した。彼らは何れも程度の差こそあれ、ヨーロッパ文明を背景にもつ移住者であったが、ひとり日本人のみは東洋文明のにない手であった。ここに、言語習慣のちがいによる日本人の労苦があった。同化過程における苦悩があった。そして社会上昇における渋滞があった。

こんな条件を背負いながらも、日本人はヨーロッパ系諸国の移住者に伍して、この国の開拓に従事し、半世紀ののちに見事、信頼と繁栄の基礎をつくりあげた。国際人として鍛えられたブラジルの日系人は、日本のニッポン人にとっても誇り得る存在でなければならぬ。

日系コロニアとカフェー

このブラジルは、日系人六十余万が生産を営み、日本海外における日系人最大の集団地であります。

今年はこのブラジルに日本移民が移り来て、六十年になります。人

間で云えば還歴に当たりますので、コロニアで盛大な移民祭を行ないました。昨年五月には、私たちの母国日本より、天皇陛下のご名代として、皇太子殿下ご夫妻が伯国政府の招待によってご来伯のこともあって、日伯両国の親善に大きく貢献されました。また日系六十万に対し慰めと激励のお言葉を賜わりました。

コロニアは打って一丸となり両殿下を心から歓迎致しました。

コロニア六十年の苦労もとれによって報いられたのであります。あの日の感激は、皆様の胸の中に永遠に浮かぶことでありましょう。私は殿下の宿舎オットン・パーラセ、ホテルからお呼びがあり「ブラジルのカフェー」についてご進講を命ぜられましたが、このことは一生一度の最大の光栄と存じております。

大変おこがましく存じますが、ご進講の大意をご紹介いたします。

◎コーヒー園の造成

宮本　邦弘

コーヒーと云えばブラジル、ブラジルと云えばコーヒーと云う程に世界的に有名であります。もちろん、コーヒーによってこの国の政治、経済を支え、これこそ外貨獲得のドル箱であります。過去においては世界生産高の七割を占めていたので、ブラジル自体の政策で世界コーヒー市場を左右することが出来たのであります。しかしその後中南米諸国と、アフリカ、南洋ジャバ、スマトラ等の生産増加と進出によって、現在非常にその輸出市場は変ぼうしてきました。この点については後程申し上げることとし、まずコーヒーの育生から申し上げます。

コーヒー園を造成するには昔は四年契約、六年契約があり、その外に耕主が全部人夫を使って行なう方法がありました。最近は農村労働法が実施されつつあるので昔と違う点が生じております。まず四年契約から申し上げます。耕主は原始林の伐採から山焼き、そしてコーヒーの播種、契約者の住宅まで一切の準備をして、契約者に耕地を渡し、契約者はコーヒー園の手入れと、コーヒー樹の育成に努力します。コーヒーの種子が発生して、幼い間は強烈な日光に弱いので、コーバといって深さ二十サンチ×縦横四十サンチの穴の中に、種子十粒前後を播きます。

その穴の上に五十サンチ位に切った木片を数ケ並べて日蔭にしておきます。種子が発芽しますと、リンパ・コーバといって穴の中の枯葉や其他の物にて幼苗の発育に差支えるものを取り除きます。また苗の間引をして発育の揃った旺盛なもの六本位残します。幼苗の伸びに応じて穴の上に並べた木片も少しづつはずします。コーヒー園造成で一番肝心なことは、揃った苗を育て樹勢のあるコーヒー樹に育てることであり、耕地内に雑草の繁茂しないようにいつも除草して耕地をきれいにすることであります。

契約者は生活のための食料として又収入源として、コーヒー園内に米、トーモロコシ、豆、等を播きます。

初年度コーヒーの幼樹の間は、コーヒー株と株との間が三米～四米ありますから、間作物三条位は植付け、二年目には二条、三年目は一条となりますが、コーヒー樹に花がつき結実します

四年目には採収が出来ます。契約者は間作と四年目の収穫が全部収入となります。その上に耕主からコーヒー樹一本幾らと育成料を受け取

ります。従って四年契約が終った時にはかなりの資本が出来るのであります。

次に六年契約について説明申し上げます。これは耕主が土地即ち原始林を契約者に提供します。契約者は自己資本にて山の伐採から山焼き、コーヒー種子の購入、そして播種、自己の住宅、倉庫等一切を準備します。だからかなりの自己資本が必要でありました

そのかわり間作の収入から、コーヒー結実の四年、五年、六年と三ケ年間のコーヒー収入が全部自己の収入となります。六年契約の終った時には相当纏まった資本が出来るのであります。

今から六十年の昔、第一回移民が渡伯してから十年間の間に移住した移民の大部分は皆一様にブラジル人珈琲園コロノとして配耕され、除草と採収を目的に耕主に都合のよいように出来た労働契約によって働いたのであります。この労働契約をコロノ契約と云います。もちろんこの間にはあらゆる苦難がありましたが、日本移民は孤軍奮闘をつづけながら次の発展期に進みました。一九一六年に第一回移民の通訳五人男の一人、平野運平氏は、日本移民の前途を考え、時のサンパウロ総領事、松村貞雄氏と相談の上、ノロエステ線カフェランジャという処の大原始林の真只中に一大植民地建設を計画、同氏が監督をしていたグワタパラ耕地コロノの中から日本人有志八十家族をつれて入植致しましたが、不幸にしてマラリヤの発生により、非常に多くの犠牲を出しました。しかしこれがきっかけとなり、ノロエステ線の原始林の中に次から次ぎと日本人植民地が建設されました。土地を購入した日本移民は全力を尽して、珈琲を栽培し、又毎年渡伯する移民達は、契約農年の一ヶ年、或は二ヶ年の終るのを待って、ノロエステ線の日

本人耕主の許へ移転して、上述の珈琲四ヶ年契約、または六ヶ年契約をして独立資金を造りました。

日本移民はノロエステ線よりパウリスタ線、ソロカバナ線の新興地帯の、珈琲栽培地へと進出して大いに奥地開拓に貢献し亦自己の経済的地盤を築いて来ました。

移民全盛期には年間二万数千人が渡伯し、第二次大戦前までに約十八万人が移り来たのであります。

一八八八年の奴隷解放以後珈琲園労働力不足のため欧州移民の導入は約三百五十万と称せられております。これ等の移民たちは各地に植民地を建設して珈琲を栽培しましたので、一九二〇年代にはサンパウロ州はブラジル第一の珈琲生産州となりました。しかし生産過剰が年々つづき、ストックは山積し、その上粗悪品が多く輸出が振わず、ために経済的に大変行き詰り、一大恐慌時代の出現となり遂に一九三〇年革命が起こり、いわゆる、ゼツリオ・ヴァルガスの独裁政府が樹立せられたのであります。新政府は国の経済の原動力である珈琲政策に意を注ぎました。

第一に不良珈琲処理のため法令によりこれを焼却すべく、サンパウロ州内十数ヶ所に、大倉庫を建設、不良品を買い上げては毎日これを焼却いたしました。

第二に珈琲植付禁止令を発令致しました。これによってサンパウロ州はそれ以後、一本の新植も出来なくなったのであります。

その当時まではサンパウロ州内の珈琲園経営は殆ど無肥料栽培でありましたので、地力は減退し、珈琲樹は老朽化して、生産は落ち品質は粗悪となり、輸出はきかず、ストックは何千万俵と山積し、珈琲取

引は殆ど中止されましたので、多くの珈琲園耕主はコロノの労銀さえ仕払えぬ最悪の状態に落ち入ったのであります。採算の取れない珈琲園は牧場や、雑作や、棉作にと転向しました。また珈琲コロノ契約を終ったもの、或いは珈琲四年契約や六年契約を終り資本の出来たものは、サンパウロ州内の奥地植民地に土地を購入して、棉や、雑作に専念するの止むなきになったのであります。

しかしこれに反し、パラナ州は珈琲植付禁止令から除外せられましたので、珈琲栽培に希望を持つものは皆パラナへパラナへと転進しました。そこでパラナ州の珈琲について少し申し上げます。一九三〇年の革命まで珈琲生産はサンパウロ州が第一でありました。パラナ州の生産量は僅かに三十四万俵程度でありました。革命政府によりて新植が制限せられ珈琲栽培希望者はパラナ州へ進出する以外他に方法がありませんでした。またパラナ州はテーラ・ロシャと云って赤土の肥沃土であり、珈琲栽培に最適の土地であります。

サンパウロ州からパラナ州にはいる処にバルボーザ耕地と云う素晴らしい珈琲園がありました。その発育の良さ、生産量の多いこと、唯々驚くばかりで、珈琲栽培を希望するものでこの耕地を視察したものは殆どパラナ移転を決心したものであります。実はこの耕地は日本人には大変縁故のある耕地で、一九一五年頃より日本人コロノがモヂアナ線の旧耕地からここに移転して悪性のマラリア病と闘いながら、コロノ又は四年契約で大いに奮闘、資金を作り独立農として土地を購入珈琲を栽培し、発展の基礎を築いたのであります。

また母国において戦後海外引揚者が再度海外勇飛を希望してブラジル移住者が増加した折、これが受入耕地の必要を感じ、日系銀行の姉

妹会社がこの耕地を購入戦後移住者を多数受入れたこともあります。
かくて革命後の二十年間その生産量は十倍以上の四百二万五千俵となり、さらに一九五九年にはサンパウロ州をしのぐ、二千四十一万俵に達しました。
この年のブラジルにおける全生産高は世界の消費量とほぼ等しく、四千八十一万俵になり、大量生産によって生産過剰となって来ました。
政府は先に申述べましたように一九三一年から一九四四年までに、七千八百二十一万俵にのぼる余剰珈琲を焼却して、珈琲輸出価格の維持政策をとり、国際コーヒー市場の均衡をはかったのであります。
一九四五年生産と輸出の均衡がとれたので一九四六年三月政府はやっと珈琲焼却を中止したのであります。このようにして政府は価格維持につとめて来たところ、その後珈琲の高値によって、他の生産国に栽培熱が高まり、ことにアフリカ地方に生産が増加せられ、世界の消費量四千八百九十万俵の約三割に当る一千五百万俵の生産となり、ブラジルの強敵となって来たのであります。
特にアフリカ産珈琲は生産費が安いため国際市場価格も安く輸出面での競争に強くなりつつあります。大量輸入国北米でも年々購入増加の傾向にあります。現在ブラジル珈琲のストックは約五千万俵といわれ、さらに今年の余剰分を加算すると、七千万俵に達するのではないかといわれております。
これは世界消費量の一ヶ年半分に近いものであります。このように政府も余剰珈琲の始末に頭を痛めているのも事実であります。しかし珈琲輸出による外貨の収入は多くブラジル輸出総額十七億ドルの四四

%に当る七億強ドルであります。

国庫を支える大きな柱となっており、政府もおろそかに出来ない問題であります。

一九六五年八月ロンドンで開かれた国際珈琲協定会議によるブラジル輸出割当は、一千七百二十万俵でありました。今年八月これが更新の会議が開かれますので、ブラジル政府は外務大臣並に珈琲院総裁を出席させて大いに自国の権益を守り輸出量割当の増加を計ることと思います。また第二次産業として珈琲加工品即ちコーヒーソルーベルの輸出についいて大いに主張することでありましょう。

以上のような状態でありますので私達珈琲生産者は常によく現状を研究し、生産量の少く採算のとれない処はこれを捨てて他の農産物の生産へと移り、また機械化等により労力と人件費をはぶくようにして、生産費を切り下げると共に、優良品の生産に意を注ぎ、亦いつまでも第一次産業生産品としての珈琲豆の輸出に留まらず第二次産業生産品としての珈琲ソルーベルの輸出にこれから努力する積りであります。

次に日系コロニアについて少しばかり述べさして頂きます。

一九〇八年六月十八日、笠戸丸により第一回移民がサントスに上陸して丁度六十年、今日偉大なコロニア即ち六十有余万人の日系人がブラジル各地に活躍するというこの有様を、六十年前誰人が予想したでしょうか。

しかし日本移民が上陸した有様を当時のサンパウロの一ブラジル新聞は次の如く報じたと云われます。

「日本人は実に清潔である、夫は妻を絶対に信ずる、何れも体は小さいが頑丈である。農業経験者らしい頼母しいものである。しかも教育があり、文盲者は殆どいない、これ等の日本移民は将来サンパウロ州の産業に貢献するであろう」と。果せるかな、私達の先輩は過去六十年間、あらゆる苦難と闘い、今日の偉大なコロニアの繁栄の基礎を築いてくれたのであります。

第一回移民サントス上陸の有様を見てこれを称賛したブラジル新聞記者が今日の日系コロニアを見られたならば、快哉をさけんだことと思います。

去る一九六八年六月十八日サンパウロ日本文化センターで開催された日本移民六十年祭々典に出席されたブラジル政府代表　マガリャンエン・ピント外相は、

『日本人移住者がブラジル発展に尽した功績は大きい。この六十年間に果した役割、特に農業方面の功績は偉大である。

ブラジルそしてサンパウロを代表して感謝すると共に、日系コロニア今後一層の発展あることを祈ってやまない』

と述べられ、その後でコロニアの長老宮坂国人氏へ、ブラジル政府を代表して南十字星章を贈られました。アブレウ・ソドレー・サンパウロ州知事は笠戸丸以前の渡伯者、隈部五百女史等五名の方へ記念品を贈り、近藤四郎サンパウロ総領事は笠戸丸移住者ならびに移住に功績のあった人々への叙勲者氏名を公式に発表されました。更にリオより来聖された、千葉浩大使は、セ大寺院で催された朝の移民六十年記念ミサに出席、ロッジ枢機卿司式の下、参会者と共に先亡開拓者の霊を慰め、安らかな眠りを神に祈りました。

午後には、皇太子殿下御来伯記念講堂建設定礎式が行われ、その他数々の催しがサンパウロ文化協会始め各地において開催されました。

去る六月廿五日にはサンパウロ言論の雄「ヂアリオ・アソシアード紙」が特別号を発行して、日本移民六十年祭を祝福し日本移民の功績を称え、日系コロニアの実状を紹介しております

それによれば、伯国農産物生産に対する日系の生産比として、珈琲二〇％、卵九〇％、棉三五％、馬齢薯七五％、繭九〇％、茶一〇〇％、ハッカ一〇〇％、イチゴ九〇％、トマテ九〇％、野菜七〇％、バナナ五〇％、胡椒一〇〇％、亦大サンパウロ市六百万人口の野菜、果物の全消費量の七〇％は日系人が供給しているという。日系人がブラジルの農業に如何に貢献しているかを如実に物語っております。

またサンパウロ日本文化協会より、皇太子殿下へ献上のため編集した「ブラジル」によれば、ブラジル全土に居住する日系人は全人口の僅かに〇・七％でありながら全伯農産物の一〇％を生産する成果をあげ更にサンパウロ州居住日系人口は州人口の五％にもかかわらず州農業生産の三五％を占めるという事実は如何に農業生産面に大きな貢献をしているかが判明するでありましょう。

（ブラジル日本文化協会副会長　大分県人会々長）

◇　　◇　　◇

北パラナ開拓の初期

上野米蔵

目前に濃緑の原始林が迫りパネマ河は、緑の影を映して緩やかに流れていた。

私たちはバルサ（渡し舟）で河を渡った。そして、またカロッサ（荷馬車）で、鬱蒼と繁る暗い原始林の中の小径を、ガタゴトと揺られながら十数時間、やっと目的の耕地バルボーザに辿り着いた。

陽はとっぷりと暮れていた。私たちは当てがわれたコロニアに荷を下した。

一九一五年十月、北パラナ開拓の序曲である。

アントニオ・バルボーザ耕地は、一九〇〇年の開拓、すでに九〇万本のカフェーが、四、五メートルの高さに繁っていた。

サンパウロ州のアレイア（砂質）と違う真赤なテーラ・ロッシァ（赤粘土質）、みるからに肥沃な表土である。歩くとポカポカとボチーナ（労働靴）が埋まる。私たち（上野福太郎、保坂松三郎、矢野運平、良永繁太、野村貞造、北川忠雄、中野峯造、上野米蔵、その他約二十家族）より早く（一九一四年）リベロン・クラーロのモンテ・クラーロ耕地に加藤長広氏（アサイ・故人）が入耕、翌一五年久谷勇氏（アサイ、故人）がバルボーザ耕地で大工仕事をしていた。

翌日からカフェー四年契約にかかった。翌一六年、私は棉作二アルケールを試みた。恐らくパラナにおける最初の棉作であろう。棉はできたが、クルケレー害虫に葉を喰われて五十アローバしか採れなかった。

当時、棉作法を知らない私は、ベルデパリス（駆除薬）を買い、小麦粉にまぜて、袋に入てれ撒布した。噴霧器のない原始的栽培、神話に近い笑い話である。

当時、カンバラは、ランバリといい椰子小屋が四、五軒たっているに過ぎなかった。

少し遅れて同耕地に入耕した古賀文三、吉良米吉、江田栄一、田中喜四郎氏（いずれも故人）は、一九一八年、同郡内ビラ・ジャポネーザ（二五〇アルケール）植民地を建設した。入植者（三十家族）は山を伐り、掘立小屋を建てあった。植民地の人々が援けあって建てあう美しい隣人愛がみられた。昔の人々は善意に溢れていた。互にバリカンで散髪しあい、饅頭でも作ると隣り近所に分けあった。子供はみんなハダシ、よく破傷風にかからなかったものと、いま想えばゾッとする。

日本人のカミーザ（シャツ）はつぎ当てだらけ、そのつぎ当ての上に、またつぎあてして地がみえない。

朝早くから日の暮れまでみんな汗を流して真黒になって働いた。手はタコだらけ、働いて働いて疲れ切って寝る。ただそれだけの最低の生活の長い一日、長い歳月であった。この重労働に耐えぬけたのは〝故郷に錦を飾る〟という執念、悲願によって支えられていた。

折角飼った鶏は、ガンバ（袋鼠属）に盗られたこともある。町への買物は馬の背か足、何十キロという山道を歩いて行かなければならなかった。帰る夕暮れの山の中でオンサの鳴き声がする。

ビラ・ジャポネーザ植民地では、この頃日本人会を創立した北パラ

ナ最初の日会であり、最初の邦人植民地である。同植民地に五、六年遅れて、北巴植民地（森部政次郎、森部直七、森部文五郎、今津仁平、坂田忠太郎）また平和植民地（高橋順一郎、内田憲一、内田弥作、小野田初太郎）が創設された。

一九二三年、私はランバリーにでて、ささやかな雑貨商を始めた。同年ジャカレジンニョに高橋平氏（故人）が山を買って拓きだした。一九二三年東京会議所会頭山科礼蔵氏を主班とする南米視察団が北パを視察、コンゴニア河畔一万アルケールを購入南米土地会社を創立した。

これがピリアニット（現ウライ）である。

一九二四年、私はペー・デ・ボーデ（自動車）を買った。黒光りのガタガタ車が、当時、町での唯一の高級車であった。

私は得意になって乗り廻したものであった。それがいまは流線型高級車、激しい時の推移である。

一九二六年、野村合名海外事業部が、サン・コルネリオ地耕一三五〇アルケールを購入、開拓にかかった。

同年、北パラナ土地会社がマルコンデスの土地三十五万アルケールを購入、後に二十万アルケールを買い足して分譲準備に移った。

この年、管内在住邦人四、五百家族を数えた。カンバラでは北パラナ日本人会を創立、初代会長に臼井介仁氏（故人）、副会長に私が推された。

翌二七年、カンバラ奨学舎（日系コロニア第二番目）が建設され、初代舎監に尾関保助氏（故人）を迎えた。この奨学舎は後年幾多のコロニア人材を輩出した。次いで先歿開拓者碑が建立された。

一九二八年、後宮耕地開植、二九年ノーバ・イガラパーバ植民地（コルネリオ・プロコピオ）に西村市助（故人）、西村末吉、義家友之助氏が入植、肥沃なテーラ・ロッシャ地帯北パラナは、漸く邦人間に大きく、クローズ・アップされだした。

北パラナの夜明けである。

その頃、カンバラ・インガ（現アンジラ市）、バンデイランテス地方はマレッタ（マラリア）が猖獗をきわめ、アンジラのサルメント耕地では、マレッタで全滅の災厄に遭った。

平野植民地ではないが、一日に三、四人も死亡したため、葬儀屋の棺が品切れ、ためにペローバで棺を造り埋葬したほどであった。開拓当初の貧しい、不自由な生活にあって、人々は毎日パルダン注射を打ち、熱がさめると、畑にでて働くという悲惨な生活を送った。子供にはドーセ一つ買ってやれない、苦しい生計に、人々は幾夜男泣きしたことか―。

子供達もエンシャーダを手に、文字どおり、一家総動員であった。荒れた婦人の手が痛々しい。

その頃、鉄道工事は着々と進められていた。子供達は、鉄道工夫にミーリョ（玉蜀黍）を売って、小銭を手に、目を輝かして走ってくる。「このジネイロ（銭）で、町に行ってドーセ（お菓子）を買うんだ」という。子供達の言葉に泣けてくる―　そんな日もあった。

草創期の歴史は貧と労働の、苦斗のページでしかない。

一九三〇年、カンバラ＝インガ（アンジラ）間鉄道開通、三月、国際植民地が売りだされた。

この年、アルト・パルミッタール植民地（サンタ・マリアナ町）野

球チームと、後宮チームが試合を行った。パラナ最初の野球試合である。

アルト・パルミッタール・チームには全国中等学校野球甲子園大会で鳴らした前橋中学出の江原政義氏（ロンドリーナ）が名サードとして、キレイなプレーをみせた。

三二年五月、トレス・バラス移住地と、三六年ウライが開植して、北パラナは次第に奥へ奥へと拓かれて行った。

後進は先人が汗水流して拓いた道を、尊い開拓の犠牲となった白骨の道を踏みしめて、今日の基盤を築いた。ローマは一朝にしてならず――である。

その昔、五十三年前、古強者が拓いた北パラナ日系移民発祥の地カンバラは、いまは開拓の夢の跡、古戦場と化した。

往時のカフェーは老衰して抜きとられ、一望千里のカンナ（砂糖黍）の海、青葉が微風に開拓のエレジーを奏でている。

（在伯県人会連合会副会長、在伯福岡県人会長）

沖縄初期移民の苦労

尾此久孟清

〝かさと丸より六〇年〟という記念出版誌に沖縄初期移民の苦労と題して何か書けとの編集委員長からの依頼に背きがたく浅学非才の上に昭和期の移民である私はその適任者ではないと知りつつ筆を取ることにしました。

さてブラジルの日本移民の歴史もかさと丸の第一回移民以来六〇年の年月を経ることになりました。初期移民の苦労はかさと丸航海中の船中生活から、耕地生活、あげくの果ては耕地逃亡と、言語風俗の異なる当国で言語に絶する苦労の連続だった

ことはこれまで大方の人々が語り、かつ書き尽した通りで初期沖縄移民も全くその通りの苦労をして来たことに変りはなく、今更書くべき資料も少ないのであるが、孤島の中から大海に飛び出したこれらの移民にはそれに伴う苦労もあったようである。

第一回移民として渡伯し後には新聞社長もやったという（エライ）人が「沖縄人が日本人ならトンボ蝶々も鳥の中」とか言って異民族扱いや蔑視した態度は大きな苦痛だったと語っていた人もいる。成る程そう聞かされると筆者もそういう風な感を植民地で受けたことがあった。沖縄の人を呼ぶに「沖縄さん」というふうに呼ばれた時には決して良い感じはしないものだ。

言う人には蔑視を込めたわけでもなかろうが受け取る方の感じは違う。これは卑屈感や劣等感からでは決してなく言葉の持つニュアンスからであろう。私が宮崎さん、広島さん、東京さん、岩手さん等と呼んだらどう受け取るだろうと思ったことであった。昭和期にあっても間々そんな事があったのだから、初期移民当時はさもありなんと推察出来るような気もした。何げなく呼んだには違いないが、自分の非常識を暴露したようなものであるが当時の移民社会のお里が解るというものではなかろうか。

第一回かさと丸移民はその半数近い三二五名が、わが沖縄県出身者

で占められていたということに私は誇りを持ちたいような悲しいような感情におそわれる。移民会社の宣伝に乗り一攫千金の夢を見、出稼ぎ的な金儲けを考えてのことだったとしても文字通り未知の異国へ渡航することに踏み切ったということは、進取の気象が旺盛で自己の運命開拓に勇敢だったと思うし反面十四、五才の少年移民が多数加わっていたということは当時の沖縄が如何に貧困だったかを示すものと思われる。四、五年、否永くて十年で成功して錦衣帰郷の考えでの移民であったことは合点けるが、僅か十四、五才の少年を遠いブラジルがどんな国かという皆目見当もつかない時代に少年一人手放して渡航させた親達の気持ちから考えて、当時の沖縄の生活が如何に苦しいものであったかという事が察しられないものでもない。

外国に出て金儲けして来なければどうにもならない事情下での考え方は夫婦親戚で構成した家族は幸せだったろうが、家長が誰れか家族が丸切り知らない人がなっている渡航便宜の為にいつの間にか夫婦にされているというように乗船してから知ったそうで、この仮夫婦とか他人を加えての不自然な家族構成は着伯して耕地生活が日本での宣伝程金儲けにならないと知ると散り散りになったようである。そういうようなわけで、妻を呼寄せたいにも金はない、当地で娶ろうにも相手の女性が少ないというような事情で初期移民が嫁ももらえず終いで一生を終ったというような人々が相当数あるようである。当時の若者がどんなにか苦痛だったか想像出来るというものだ。

それで勢い現金を掴める仕事へと流れて行くのは当然であったろう。というのは郷里に一日も早く送金をしなければ親兄弟が困ることを充分知っていたからである。渡航のために借りて来た金の返済は自

分の義務だったというのだから。

耕地では食うものを節約しても現金にはならない。行き詰りつつある焦燥感は契約不履行という逃亡となって金になる鉄道敷設工夫やサントス港荷役人夫として働くことだったそうである。汽車に乗って行こうにも金はない、歩いてサントスまで行ったのが一番苦しかったと話してくれた人があった。

サントスの警察署長の取計いで荷役人夫に就働し、小柄の人々がある重労働に外国人に負けなかったそうだから、精神力が強かったからだというてもおどろきである。一方ノロエステ鉄道敷設工夫に就働した人々は週間毎に握る現金に週日の疲れも忘れて只有りがたかったそうだ。

噂はすぐ伝わる、われもわれもと友は友を呼び知人は知人を頼って集って来た。

以上のような訳で耕地に残留する者は殆どいなくなった為沖縄移民と鹿児島移民は成績不良ということで一時渡航中止になった。余剰労働力のハケ口と生活の苦しさということが移民という形で現われて来ることは昔も今も変りがないと思うが当時の沖縄は将にこれに当てはまる状態だったように考えられるので、移民会社としては農業移民の募集地としては最適地だったであろう。大正六、七年頃は一船一千人以上の沖縄県人が農業移民として新天地ブラジルに移住しているのを見ても合点が行くというものだ。しかしこれ等の人々も先輩の轍ちを踏んでいる。そうして先輩を頼ってサントス＝ジュキア線や麻州カンポ・グランデへ移っている。

そのために又々沖縄移民は中止になったようである。当時の人々は

比較的義務教育を受けた人が少なく、ために言葉から来るところの同胞間の交際も悪かったであろうし風俗習慣の違いから来るところのイザコザもあったであろう。その為同郷人が多く集っている地域に行きたい又金儲けが出来るという考えからであったようだ。

こういうようであっては沖縄のブラジル移民は絶えるということで大正九年に球陽協会が出来て沖縄移民は同会が責任を持って補導し逃亡させないと移民会社や領事館あたりと約束して再開になって以来、移民県としてどしどし移住している。

ペルーからの再移住者も合流した鉄道工夫就働者は敷設工事の進行につれて進み、そしてカンポグランデに定着するようになった。サントスに行った人々は小金が出来るとジュキア線に行って米作農を営む人々も出て来たとのことである。かくして郷党的な親愛感も手伝って沖縄移民の集団地となったようである。

同郷愛は相互扶助の精神を発揮し庶民金融としての頼母子が盛んになり事業を始めるという人には頼母子をやって資本にさせて仕事をさせる。郷里に借金がある人には頼母子をやって送金させる。事業に失敗した人々には頼母子をやって更生させるという風に頼母子を大いに活用したらしい。沖縄人の集団的傾向があるのは親しさの表現は沖縄語で話す外に頼母子という金融面の便宜さの為でもあるようだ。法的には何の保証もないこの頼母子が未だかって不払いとか踏み倒して加入者間に迷惑をかけたということを余り聞かないのは相互間の信頼と義理堅さから来ることであろう。このようにして一歩一歩生活の基盤を築いて来たように思われる。

旧移民に何が一番苦労でしたかと問うて見ると異口同音に「すべて

苦労でした」と初期移民は答える。成程そうだったであろうとうなずかざるを得ない。

凡ゆる苦難を乗り越えて来られた六十年組や五十年組の先輩移民に対して私は頭の下る思いで一杯だった。そして先輩移民のなめた苦労は決して無駄ではなかった。粘り強く運命開拓につくした努力はどしどし後輩移住者の渡航を奨め、実を結びつつある現状であるからである。

戦前戦後の移民を問わず沖縄のような狭い土地から雄飛して来て気候も沖縄とよく似ている当ブラジル国は沖縄県人にとって最適の永住国であると誰しも思っていることであろう。現在沖縄本島の面積と同じ位の面積の土地を在伯県人が所有して、農牧生産に従事しており、商工業にも大いに進出している。六万有余人の沖縄系の人々がそれ相応に各分野において活躍奮斗している事実はこれを裏付けている私は思う。

殊に教育熱心であることは今さら書くまでもないが、旧移民が無学なるが故に嘗めた苦労は可愛いわが子等にはさせてはならないという考えからのように思われる。よい反省であり立派な行為と思う。戦後都市集中化の傾向はその為ばかりとは言えないにしても一つの起因であるとは言えそうである。

一時代サントス＝ジュキア線やカンポグランデ市が沖縄県人の一大集団地だったがだんだん減って現在サンパウロ市やその近郊に殆ど在伯沖縄県人の半数が移り住んでいるのではないかと思われる程である。そしてそこで各自各様に生活の基盤を確立しつつあることは時代という流れを私はこれに見ている。

在伯日系人中人的資源に於ては筆頭ではないかと思われるが、これという大成功者もいないかわりに食いはぐれの落伍者も割合い少いようだ。

確かに移民としての資質は十分持っていると私は信じている。

それ故に過剰人口を抱えて四苦八苦している郷里から一人でも多く当国へ移住させるべく努力し又移住して来て世界の楽園ブラジルで大いに働いてもらいたいと願っている。

沖縄県人がブラジル国を第二の故郷と思うようになったのは日系コロニアという社会の一構成分子であるという自覚と世界中で一番住みよい国であると考えてのことであろうと思うし、当国の発展の為にあらゆる面で寄与しつつ根強く生活の向上を目指して頑張っているものと信じている。私は常に考えることだが、如何にしてスムーズに次代へバトンをタッチして行くかということである。

二世にすれば父母の国は異国であるし父母の心情を理解しているにしても一世が消えて行けば関心は薄くなることは当然であろう。むづかしい課題であるが私達はこれと取組まなければならないと考える。

ブラジル国の為にも母国の為にも亦われわれ自身のためにも　最後にブラジルの沖縄移民は初期移民の苦労を忘却することなくそれを生かして行くことによって感謝報恩につながることを念頭に刻んでおくべきであろう。（在伯沖縄協会々長）

移住者の結婚

和田　周一郎

移民六十年を迎えるに当り移住者の結婚今昔を書いてみるのも興味ある参考になると思う。

先ず移住者の結婚を第二世界大戦前と戦後との二つに大別して述べる事にする。戦前移住者の家族構成条件としては五十才以下の夫婦を中心として十五才以上の子弟があり一家の労働力が三人以上でなければならない事である。

ところが現在と違って昔のブラジル移民といえば、地球の裏側で、日本からいえば世界で一番遠い大蛇猛獣の棲む未知の世界であると考えられておった頃であるから、余程の勇気と一大決心が必要であった。

従って移民の大半は血気盛りの青年であり、一家を成していても三十台、四十台の家長で其の子弟が長男は、漸く十五才に達する位で、それ以下の子供しかない家族は前述の家族構成条件を備ある為、親族から十五才以上の子弟を迎えるとか、全く未知の青年で渡伯希望者を移民募集斡旋所の紹介で一時戸籍上だけの養子縁組をして、着伯してから何時でも離籍するという条件のもとに既に日本に於て離籍届の書薪を作成して持参、着伯後領事館を経て届出るという便法ケースが多かった。

又単独青年の移住出来るコースとしては、ブラジルに三親等内の親族が居住してその呼寄せに依るという事であった。

その後永田稠氏によって力行農園又は渡辺伯の渡辺農場の青年訓練所が設立され、これ等農場の責任に依って呼寄せられた独身青年が多数あった。

又は拙者のように個人農場を仮の指定農場として植民学校の卒業生の呼寄せを行ったケースも二、三あった。これ等青年達の結婚問題は直前の問題であり又家族構成或は父母と共に渡伯した子供達も五年十年経つと皆結婚適齢期に達する次第である。

当時の移民とは移住でなく出稼ぎで五年、十年で大金を儲けて錦を故郷に飾るという一旗組が九十九％で永住など考えた人は殆どなかった事は実情であった。

従って子弟の結婚問題は金を儲けて日本に帰ってからというので娘の婚期の過ぎるのもなんのその、金儲け一心に一切を犠牲にして昼夜働いたものである。

ところが、日本で考えたように金は儲からない、諦めて日本に帰り度くてもその旅費すら出来ない。その中に子弟は段々婚期が過ぎて行くのでぼつぼつ縁談にも耳を傾けるようになった。

ところが、前述のように構成家族で来た青年呼客に依る単独青年等その殆どが男子という事で既に婚期を逸した老青年も沢山いるという状態で、愈々女ひでりで娘一人に婿十人、そこで生れたのが、所謂娘三コントスの標語である。

女でさえあれば婚期を逸したオールドミスでも片眼、跛でも金の草鞋をはいて十度も足を運ばねばもらいださない。その上結納金を最低三コントス以上を持参しなければならない。でなければ娘の家に来て三、四年ただ働きをしなければという条件がつく。

今から、四五十年昔の三コントスは土地の二十アルケーレスも買えた大金で独身青年達には夢にも考えられない事であったから、有為の青年達がオールドボーイとなり町に出て一生を誤った例が、枚挙に暇がない。時には恋愛関係が出来、親の無理解の為親友達が示し合せて娘を盗み出し遠くへ逃した例も多々ある。

私は前述のように小さい個人農場であったが植民学校を卒業した青年達の渡伯の便法として指定農場として、一九二八年頃から三十四、五年頃までに六、七十人の独身青年を預かり、多くの青年達を結婚させた。何分誰一人身寄りのない一人者放媒酌人であると同時に親代りという事で、一から十まで御世話しなければならない。

殊に昔の移民は日本から持って来た習慣そのままで、一度や二度で話がまとまらない。

先ず平均五度、多いのは十度も足を運ばされた事もある。やると心に決っても二度や三度で返答すると安売りしたと考えるらしい。

忙しい身でこれには随分苦労したものである。

その後、年とともに段々前述の習慣も軽減されて来たが、戦前四十人近い者を媒酌人や親代りとして結解させた事になる。

これも一つは自家用車を持っている人が殆どなかった関係で、拙者を媒酌人に頼むと何度行っても又結婚式にも自動車賃の必要がないという打算的な考えもあってか、独身青年達とは別に植民地内の媒酌を一手に引受けたような形になった。

こんな事で年と共に多少様式も変ってきたが大同小異で大戦前まで約四十人位御世話し、古い習慣が続いてきたようである

世界第二大戦が始まって旅行もむずかしくなり集会もやかましく

なった関係か、多少結婚数も減少したようであった。

終戦後勝組、敗組の争いから折角家庭を成して子供までである仲を無理に引裂いた悲劇が出現した例もあり、又勝組、敗組は絶対に縁組をしないという状態が五、六年続いた。

終戦直後訪日から帰伯してサンパウロ市に移転してから暫らく休業状態であったが、日本の敗戦が確認されると共に凡ての人々が永住の決心がつき思想的にも大変化を来し、殆どが恋愛結婚でお互い交際し話が成立してからパドリンニオを依頼されるので戦前の媒酌と比較して全く楽になった次第である。

その後例の農拓協パラナ産業開発青年隊訓練所が設立されて約三百人め独身青年が渡伯して来たがコチア青年と同様結婚問題が最大の難関となっている。

戦前と違ってあり余る二世娘があり娘三コントスの問題は解消したが成長の環境と思想の相違もあり本人も親達も何等生活の保証のない新来青年へは余程の理解と希望が持てない限り、なかなか成立しない。

折角苦心して結婚させても思想の差からくるトラブルが起きて媒酌人、親代りとして非常な苦境に陥った例が二、三に止らない。しかし、そのうちに二世が産れると段々落着いて今ではほっとしている。一方最初からうまく運んで二世を抱いて挨拶に来てくれると自分の孫が産れたようにその喜びは何物にも代え難いものである。

最近、昔媒酌をした人々の子供達が成人して又その媒酌をやりつつあるが、現在まで色々のケースをとりまぜて六十組位の媒酌や親代りをやった事になる。かって三十六回目の媒酌人としての挨拶に付け加

えて、これで私達夫婦は一生の生活が保証された、今後不幸にして貧乏しても媒酌親代りとなった皆さんの家庭を訪問して十日づつご厄介になり次々へと駅伝していただくと一ヶ年が経つ。又次年もという事で一生食いはぐれはないと大笑いした次第である。

御蔭でまだ食いはぐれてはいないが、色々な所用で各地方によく出張するが何処に行っても一組や二組の人々がいて歓待してくれるので非常に心強い限りである。

右のように移民六十年の歴史と共に結婚の習慣や様式も変化しつつあるが大半は恋愛結婚であり、イグレージャで行なわれつつあるようである。その披露宴に於てはコロニア一般の非常な発展と共に大変派手になりつつあるがこの際大いに考えなければならない事ではないかと思う。

最後に申上げたい事は現在に於ても新来青年の結婚問題は非常にむつかしい事で、コチア青年の如く態々代表者を日本に派遣して渡伯希望の娘さん達を集め写真交換文通等で相当理解の上で花嫁移民として渡航して来るのであるが、毎船毎にトラブルがあり、私自身も最近二組のトラブルを経験させらかている。

戦前戦後沢山の青年達を預かった経験から申上げたい事は、移住希望の青年達は成るべく結婚して来るか或は渡伯前一応候補者を選び一足先に来て一、二年文通準備をしてから呼び寄せるか、そうでない場合一応見透しがついてから訪日して移住希望の女性と直接面談理解し合って結婚して来る事が最も理想と考えるのでお推めする。

今一つは昔の移民で現在成功者といわれる人々の家庭は、その奥さんが非常に立派であったという事である。夫たる人がどんなに立派で

非常な奮斗家であっても家に帰って妻から毎日不平を並べられ悲観されては如何なる堅い決心も希望も鈍り事業は失敗に帰する事となる。殊に無味乾燥な開拓前線に於ける妻の励ましと内助の功こそ何物にも代え難い成功の最大要素であるという事をつぎつぎに来る花嫁さん達が肝に銘じて不動の決心のもとに嫁いで来る事を切望する次第である。

（在伯奈良県人会々長、ブラジル文化協会営任理事）

コンデ街の今昔

石原　桂造

私がコンデ街の土を初めて踏んだのは一九一三年のことである。その頃のコンデ街は裏の方に竹藪があり雑草が生茂っていて夏の夜など蛍が飛び雨期ともなれば今のスダンの工場付近は大沼と化し悪童どもが素裸で遊泳していた時代である。

当時住んでいた日本人は僅か二十家族足らずで一年半余り田舎を巡って再び聖市に舞戻った時には既に百家族近くの邦人がコンデ街を中心に住んでいた。誰がコンデ街住人の第一号だか知る由もないが、藤崎商会の後藤さんが最初サンパウロ街二〇番に居を構え、其の後間崎三三一氏佐藤次郎氏等の先輩が住んでいたので、それを頼りに田舎から出た人達がお隣り街のコンデ街に住むようになったのだと思う。考えて見るとよい場所へ根をおろしたものだ。

コンデ街はあの急な坂こそあるがあれさえ登れば一足でプラッサ・

ダ・セに出られ、此処からはどの方面へも二〇〇レースの電車で乗替なしに行ける極めて便利な街であった。

それで此処に住む邦人は当時何を職業として生活していたか？　というと無論現在の様に商社や銀行に勤めるサラリーマンはなく何れも男は大工とピントール、妻君たちは下のサック会社へ女工として通い収入は日給三、四ミルの見習いから本職になると七、八ミル迄とれる。若いものは男女を問わず大抵は家庭奉公で、仕事はコペイロからラバデイラ、ジャルジネイロやコジネイロと種々雑多で給料は月三、四十ミルから七、八十ミル程度。後にファゼンデーロが自家用車を持つようにならてお抱え運転手になる者が現われ、この方は所謂技術者というので待遇もよく給料も百から百二、三十は取りおった。

日曜日ともなれば大工さんやピントールは朝から休み、家庭奉公のコペイロやラバデイラも午後から休暇が出るのでコンデ街ほ大賑い、夜になると薄暗いランプの明りで、コンデ街に電燈がついたのは（一九一五、六年頃）。ピンガやセルベージャを飲み乍らサノサやラッパ節など唄い破れ三味線をひいて一夜を楽しく過す。

何処の植民地にもある様にコンデ街にも賭博と喧嘩はたえたことなく四、五人集ると直ぐ花札やトランプ遊びが始まるし、一杯飲めば必ず喧嘩が起る。近沢ナポレオン、堀田某等という豪傑？　がいて相手代れど主代らずで喧嘩さえあれば大抵の場合一方の相手はこの内の一人であった。共に余り酒の上が良くなく酒乱だったろう。二人共余り飲み過ぎたせいか若死した。今頃はあの世とやらでなぐり合いでもしているであろう。

その頃もう一つの流行ものにジョーゴ・デ・ビッショがあり日本人

でビッショを賭けない者はないといわれた程盛んでお内儀さん達が毎朝顔を合せると、お早ようの次に出る会話を聞けば、A奥さん＝『昨夜は何かよか夢ば見ませんだったですか』B奥さん＝『ヨウはなあ昨夜大きな茄子を食べた夢は見ましたバイ』。これを聞いてそばのもう一人の婦人が『アラそりゃ奥さんよか夢ですたい。昔から一富士二鷹三茄子っていいましょうがな。今日はガランチード三番のブーロが出ますばい』といった調子で、寄ると障るとビッショの話。或る大工さんは夫婦共ビショ賭けが好きで大損した結果田舎へ夜逃げしたなどの悲劇もあれば、中にはビッショで大儲けして日本へ帰って行ったという好運児もいた。

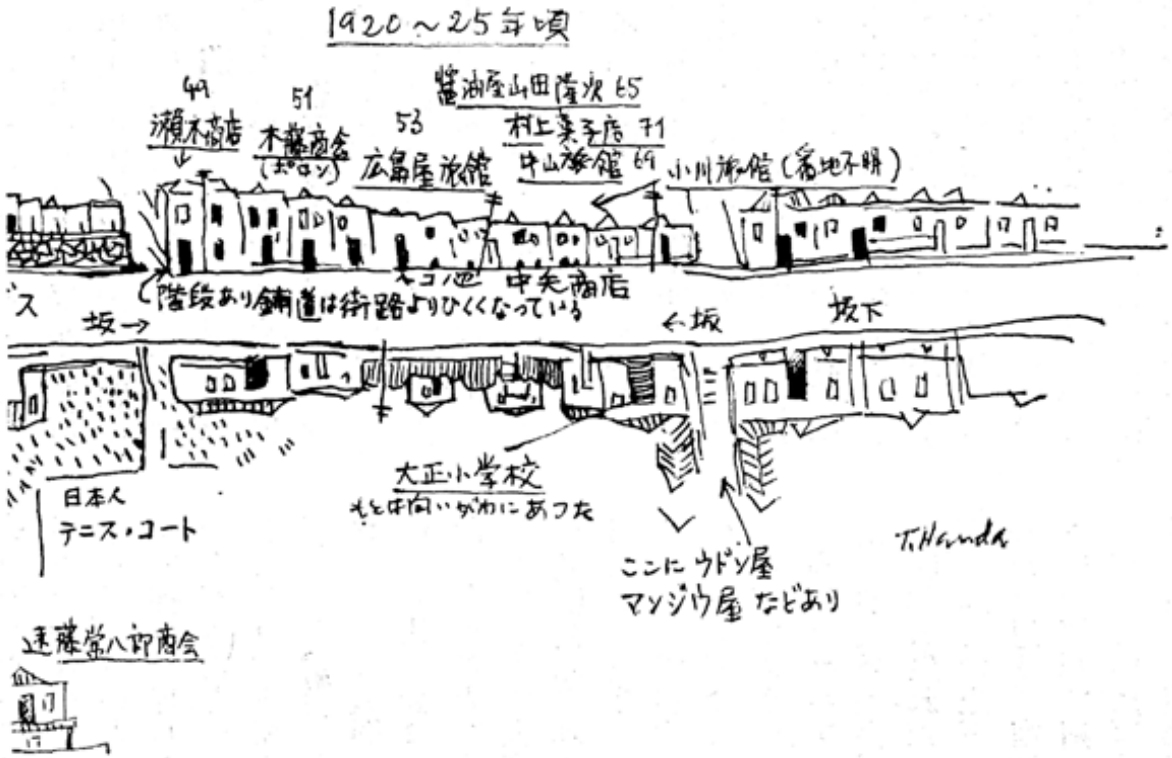
コンデ街で商売人の元祖に木藤磯右衛門と称する人がいた。彼は何年の渡伯か知ちないが渡伯の途中シンガポールで妻君に逃げられ単身渡伯してコンデ街の住人となった。この男極めて商魂逞しく、ろくに言葉も分らぬ内から行商を始め藤崎商会から日本製紙の玩具（折返しで末広形になる玩具）を仕入れ箱に入れて首からつるし、ヂレイタやキンゼ街をウントストン、ウントストン、カダウンがウントストンとふれ廻っていたが、余り芳しくないので止め、日本人のジョーゴ・デ・ビショに目をつけバンケーロを始めた迄はよかったが、タチの悪い男がいて、ある日シダーデでその日のレズルタードを見てから大急ぎで木藤君の処へ行き、当り番号を賭けた。彼氏時計の止まったのに気付かず昼寝をしていたのが千慮の一失、まんまとインチキに掛かって大損したというウソの様な本当の話。それで彼はビッショ屋をやめて日本品の種子物や中将湯など売っていた。この男また仲々のセンベルゴンニャで年頃の娘さえ見れば、僕と結婚して下さい

というので、モッサ連中から痴漢扱いされていたが一押し二押しと根強くやり、遂に自分より十二、三才年下のおさださんという美人を口説き落し結婚した。何でも結納金として三コント郷里へ送る条件だとか其の頃コンデ雀の間で大評判になり、娘三コントの語源もこれから生れた。それ以前からコンデの日本人間に青年会があり撞球台を置いて青年達が遊んでいたが此の会は永続きせず同じ家に大正小学校を開校したのも此の頃のことで十四、五人の生徒が通学しており校長は宮崎信三という人で大変よく教え児童の面倒を見て呉れたが、此の先生其頃公認されていたフロントン通いをしていた。独身で真面目なよい先生であったが惜しい事に早死した。大正小学校後援会が出来て初代校長に鮫島直哉氏が選ばれた。この人はコンデ街の住人ではないが建築請負業でコンデ街の大工さんと関係があるのでよくコンデ街に現われたコロニアの有力者であった。

当時コロニアの催し事、例えば天長節祝賀会等は毎年この大正小学校後援会が主体となって行い同志会やミカド倶楽部などの団体も生れたが後の話し。旅館の元祖は上地弥蔵氏でコンデ街四九番の上下を借りて開業したのが多分一九一六年か七年だったと思う。宿泊料が食事付三ミルで浪人者や地方から来る人々には便利で病人の世話などもしていた。

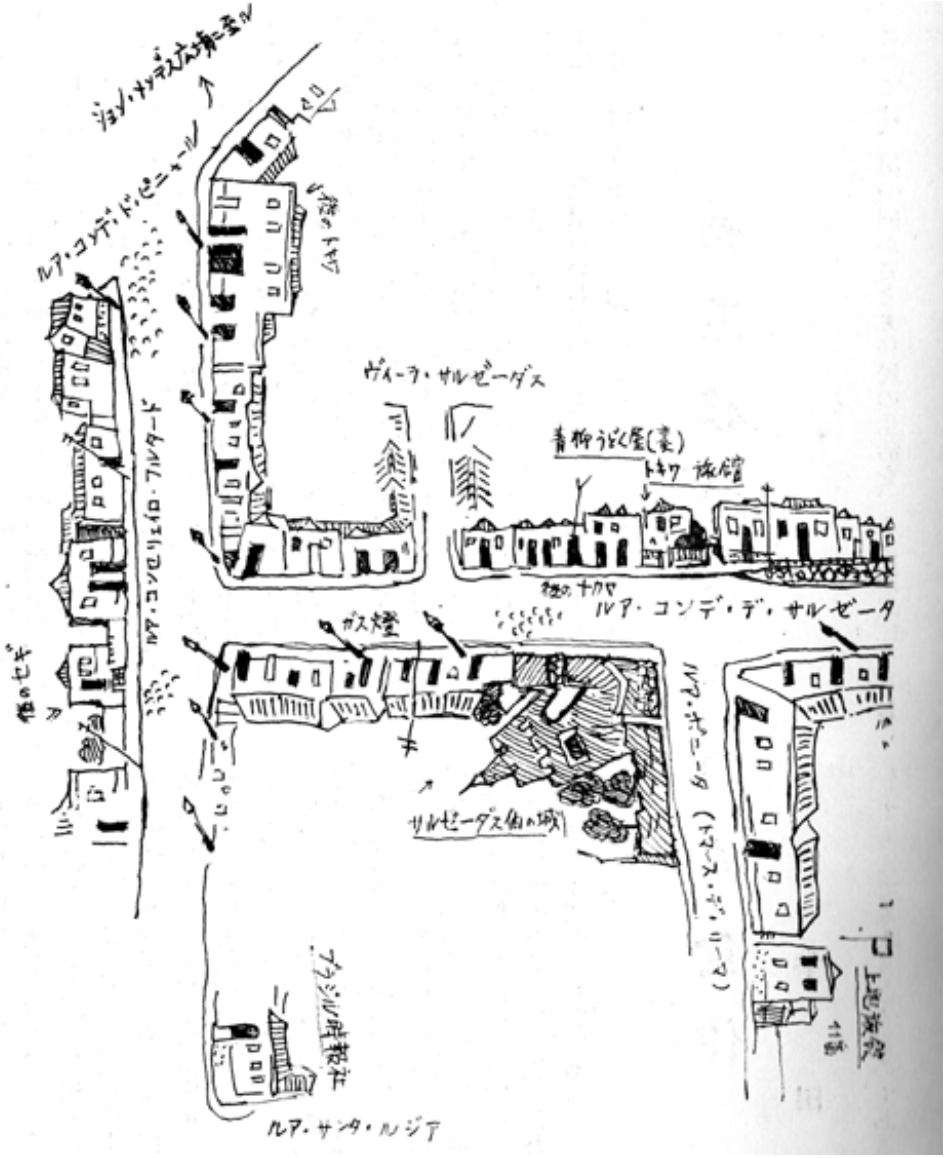
病人といえばその頃広島県人で山田の隆さんという人がいた神奈川丸の渡伯者で、日本ではお医者の薬局生で代診位していたそうだが、当時日本人の医者はおらず、この人が気安く診察したり薬も盛って呉れるので日本人は大助かり。尤も重病人はそれぞれの専門医に診せたがたいていの病気はこの人が治して呉れたので一般から神様のように

慕われていたけれど、気の毒に三十年の護憲革命の際流弾の為プラサ・ダ・セに於てはかない最後をとげた。山田さんと同じ頃もう一人伊藤庄吉という北米医学士もいたが北米の免状では公けに開業出来ず二、三年で田舎に這入りまもなく日本へ帰ったそうである。



コンデ街に邦人が益々増えるにつれ色々な職業も現れ、一九二〇年頃には床屋二軒、洋服屋三軒、菓子屋二軒、時計屋一軒、歯医者一軒

という状態で豆腐屋も一軒あって力行会の森口君がその元祖で豆腐一丁二百レースであった事も覚えている。



（一九二〇～二五年頃のコンデ街付近の地図）

青年の娯楽機関が乏しいというのでミカド倶楽部が誕生して笹原憲次、渡辺孝等がリーダー格で野球テニス、ピンポン等スポーツが盛んになったのもこの頃からである。

私がコンデ街坂上にトキワ・ホテルを開業したのが一九二四年三月、間もなく六月にはイジドーロ将軍の革命が勃発して市街戦となりボンベイロをねらって革命軍の打出す砲弾がコンデ街九〇何番かの太

田君というピントールの住宅へ命中したが幸い不発で大事に至らなかった。

この市街戦は二十日間も続きコンデ街の坂上にトリンシーラ（塹壕）が築かれ機関銃が据付けられ殆ど交通止めの状態であった。総領事館から注意があって明朝は田舎の方へ避難するよう準備したらその朝革命軍が退却したので大安心したが二十日間というものは電燈もなく水道は止まり俄か井戸を掘るという騒ぎであった。

この年は革命に次ぐ霜害で近年まれの不景気に見舞われ、コンデ街の邦人も大分奥地へ這入ったが一方商人は増えて瀬木商店、中矢、遠藤書店等々開店したのもこの頃のこと。トキワの五、六軒上に浅野という男か小料理屋を始めこれが呑屋のナンバーワン、魚芳と呼んで現在の青柳の前身がそれ主人の板前は素人に毛の生えた程度だったけれどお内儀が愛嬌者で当時一軒しかない呑屋という点もあって一時非常に繁昌した。

サンパウロに自動車が多くなりそれにつれて邦人運ちゃんの数がめっきり増え自前でタクシーを走らせる者も四、五人居り愛輸同志会なるものが生れ、三十人程のメンバーで青柳やトキワあたりで新年宴会等催し、ハデな立廻りを演じパトカー（その時分にはなかったが）ポリシアの厄介になったのもその頃のこと。

この頃からコンデ街の模様が大分変り住人はボツボツ坂上に登る傾向が現われ同時に職業方面も向上してサック工場へ通う女工さんは影をひそめ、家庭奉公する人も少くなり、商社やお役所へ勤めるサラリーマンが現われ始めた。商売の面でもチンツラリアからキタンダ、

フェイランテやメルカード内の商人等々各方面に進出した。

私がトキワ・ホテルをコンセレイロ街に移転したのは一九三四年で、この時はもうコンデ街も昔の様相はすっかり変り同時に邦人社会の生活状態も昔とは雲泥の差で自家用車を持つ者も十指に余り羽瀬さんや中矢商店、国井さん等も堂々と店舗を張り日本雑貨や食料品も種々輸入され三四軒あった料亭では日本座敷を作りホステスがみんなで四五十人おり芸者も二、三人おって豪勢を極めたが太平洋戦争で何も彼も御破算となった。

ブラジルが連合軍に加わって間もなくコンデ街一帯の邦人に立退き命令が出た。その頃はコンデ街を中心に七百家族からの邦人が住んでおりこれ等全部に十日間の期限で立退けというのだからいささか無理な話。

中には家長が長煩らいしているものもあれば失業者もいた。中でも強硬派は蓆旗でも押立ててオルデン・ポリチカへ座り込もうなどと不穏の情勢が窺れた。この当時私は救済会の仕事をしていた関係上重立った人々を集め、我々は目下敵性国家にいるのだから止むを得ぬ、この際無理な命令でも服従す可きだ私共も直ぐ商売を止めて移転するのだから皆さんもおとなしくムダンサする様、万一移転費に事欠くような者がおれば救済金で補助すると説得し、その夜東山の山本さん宅を訪れ事情を訴え差当り二十五コントス東山銀行から借受け、その金を七十五家族の人々に家族の大小と移転先きの遠近に応じ補助を与えて大部分はビーラ・マリアナからボスケ・ダ・サウデ方面へ移転してコンデ街に残った者は僅か二、三家族となりこれでコンデ街立退き事件は兎も角無事平穏に済んだのである。

終戦後邦人がガルボン・ブエノ街を中心に進出今日の盛況をなしつつあるのは周知の事実であるが、日曜の午後など見ていると通行人の八割は日系人でシネ・ニテロイやシネ・ニッポンの前などは邦人の自家用車で埋まっている。

昔コンデ街のポロンに住んだわれわれの内で今日の盛況あるを誰れが夢想だにしたであろうか。

（群馬県人会々長、勲五等）

初期移民たちの衣食住

半田　知雄

ここでは、第一回かさと丸移民の生活を、その衣食住をとおして考えてみようとするのであるが、資料となるものは決して多くない。

一般にかさと丸移民の問題は、どうしてファゼンダ（コーヒー農場）におちついて就働できなかったかということが、主として収入の面からとりあげられてきた。だから、この方面のものはかなり文書に書き残されている。しかし、日常生活の衣食住について書いたものは極く少ない。たとえば「移民四十年史」にはコーヒー農場において落ちつけなかった理由の一つとして食物のことがとりあげられているのはむしろめずらしい例といっていいだろう。気候がかあり、なれない労働で体力を消耗した上に栄養がとれなかったことは体を衰弱させるもとになった。これに収入の少なかったことの失望感によってあせり

が加わるとみんながノイローゼ気味になったことを指摘しているのである。

だが全く資料がないのではない。初期移民の生活はその後の傾向も参考にすればたいがい見当はつく。現存の人たちに会って直接話をきけないのは残念だが今はあるだけの資料でまとめてみよう。

上陸第一歩の印象

ベ　タ　ホ　メ　の伯字紙

ブラジルへ渡航することのできた移民は原則的には農業者で農事労働に適するものでなければならなかったが、石工、大工鍛治屋のような職人も全数の五分の一までははいることができる規定であった。

ところが第一回の人たちは必ずしもこの資格をもりものばかりではなかった。名目的には農業者としてやって来たかも知れないが「各県を通じて農業者は僅かにその七分の一にすぎなかった」という。①「他は巡査、監守、村長、学生上り、商売に失敗した小商人、網なき漁夫、石炭の臭気失せざる炭坑夫、鉄道工夫、校長になり損ねた小学校教員、腰弁の下級宜史、三百代言、株式に手を出して零らくしたる穀屋の亭主、田舎俳優の成れの果、博徒、船員上りの男、或いは酌婦上りの女、田舎芸者もおれば、宿場女郎が世話女房に化けているのもあった。そして家族は、ほとんどみなが、いわゆる構成家族にして、水入らず親身の家族は真に少なかった。」②通訳五人男の一人加藤順之助は書きのこしているのであるが、この記事を丸のみするにはちょっと躊躇されるとしても、純農ものが少なかったことは事実であったろう。

だから第一回移民の失敗の原因を究明した者は、純農家が少なかったことをその一つとしてあげている。また、純農の人たちを多く受け入れることの出来た農場主は、至極満足であることを皇国植民会社ブラジル代理人上塚周平に報告しているほどである。

さてこのような人たちがサントスへ上陸したときに、ブラジル人はどのように見たか、またすでに一足さきにブラジルへ来ていた通訳及びその他の人たちの目にどのようにうつったかを述べて見よう。

始めてブラジルの土地をふむ七九三人の日本移民たちをサントス港に迎えたコレイオ・パウリスターノの記者は、六月二五日の第一面にその記事をかかげているが、まるでベタ誉めである。

服装は清潔な新調品

「男たちは中折れ又は鳥打をかぶり女たちは下着（カミゼッタ）にスカートのつながった着物をきて、腰のまわりをベルトでしめ、極く簡単な婦人帽をゴムひもであごにかけ、ピンのかざりをつけていた。その髪かたちは、かって日本画でみたものを思い出させるがあの絵にあったような大きなかんざし（グランポス・コロサイス）はつけていなかった。」（浮世絵の美人画でも思いだしていたのであろうか）

「男女とも安価な靴をはいていて、底にはビョウが打ってあった。そしてすべてのものが靴下をはいている。」

「彼等のヨーロッパ式衣服はみな日本で購入したものであった

そして日本の大工場で仕立てられたものであった。」

「ヨーロッパ式服装は『日の出る国』に普及しつつある。移民たちは自分の金で衣服を購入したのであったから清潔な新調品で、気持のよ

い印象を与えた。女たちは木綿の白い手袋をはめていた。」

完全な清潔

「移民たちは一時間ほど食堂ですごしたのち、自分たちに割当てられた寝台、寝室をみるためにそこを出なければならなかったが、彼等の去ったあとのサロンは完全に清潔（リンペーザ・アプソルータ）がたもたれていてみんなをおどろかせた。タバコのすいがら一つツバを吐いたあと一つない。きたならしくツバを吐きちらし、タバコのすいがらを足でふみつぶす他の国の移民たちとは正に対しょう的である。」

規律正しい食事

「彼らはいつもきわめて規律正しく食事をした。そして最後に残ったものは、先きのものより二時間もおくれたのにヤジを飛ばしたり、がまんできずにさわぎたてたり、抗議の声をあげたりはしなかった。」

胴体がながく足はみじかい

「移住してきたすべての日本人は一般に背がひくい。頭が大きく胴体がながくよく発達しているが足は短い。十四才の日本人はわが国の八才の小児より背が高いとはいえない。日本人の平均身長は、われわれのなかの低位のものよりひくい。むろん、もっと高いものもいた。それらはわれわれの間の中（ちゅう）位に相当するだろう。しかし特にわれわれが注目したのは男子の体が頑丈で、きたえられていることである。しかも筋肉はそんなにふくれ上っていない。（ふしぎに思うだろうが本当だ）骨格は巾びろで胸は充実している。その黒い髪の毛

は、女性の大きな髪かたちにおいて特に目立っている。男たちほ頭髪をわけるように刈っている。すべてのものが分け髪にしているがあるものは横の方から、他のものはまん中から分けている。ていねいに櫛でとかし、みんながつけているネクタイとよく調和している。またそれは彼等の節くれだった手とも不均合いなものではない。」

従順で社交性がある

「彼等は従順で社交性がある。そして我が国の言葉を熱心に学ぼうとしている。」

妻への絶大な信用

「彼等が妻を信用している程度は最高で、自分たちのポルトガル語の勉強を中断しないために日貨を伯貨に替える両替を彼女たちにまかせている程だ。彼等は皆お金を持っている。十円、二十円、三十円、四十円、五十円ある場合はそれ以上であるがそれ程ではなくともみんないくらか持っている。」

風呂にはいる

「移民たちはたびたび風呂にはいるので体は清潔だ。また、さっぱりした着物をきている。」

よき生産者として

「将来サンパウロ州の富は日本人に負うところ多く、彼らは生産活動の一分子として申分ないものと認められるに至るであろう。」「人種的

には我々と非常にちがっているが劣等なものではない。我々は国内労働における日本人の働きぶりについて、いまから早まった判断はさけたいと思う。」と最後にことわっている。

これらの観察と評価はサントス上陸の模様から移民収容所にはいってからまでのことを述べたものであった。

では通訳その他の人たちはどのように見たかとなると、ブラジル人が他国の移民と比較しながら述べたこととは、かなりちがっていた。言葉の通じる日本人に対してはかなりわがままだったようだ。

「正真正銘の百姓でござると看板を背負っていたお百姓は、うろうろして気が利かぬけれども、世話をしてもらうのが当り前と、平気の平左で八百の口は一つ一つ異った要求をなした。水が欲しい。子供が病気だ。金を替えたい。日本飯をくれろ。寒いから毛布をもう一枚。女房と隔離するとは不都合。移民も人間でござる。のどに通らぬ物を食わせる法はない。と不平強調の連発には、余程通訳も大いに苦しめられた。」と加藤は書いている。③コレオ・パウリスターノの記者から清潔な新調品としてほめられた服装も清潔ではあったかも知れないが、どう見ても身についたものではなかったようだ。ある日、収容所長の命令で通訳たちは移民を引連れて市内を案内せねばならなかった

「黒い喪服のような西洋服を着た女が、赤い花をくっつけた扁平な麦わら帽子をかぶって、ゲイシャというオペラに出て来る女の、よちよちした歩行ぶりでついて来る一隊の同胞女人諸君には、さすがの通訳諸君も当惑して、僅かにブラス区を一巡して、ここはサンパウロ市だと称し、市のセンターである三角区（トリアングロ）に達したものはなかったというのも笑話の一つであった。」と『移民の草分け』に書

いてあるが他にも似かよった記事がある。④「二十男は小ざっぱりとしているが臍の緒を切って以来初めて洋服を着た恰好の悪いお百姓。男の靴をはいた女。手に入れ墨のある琉球女。思い切ってだした大廂（ひさし）の女等の大軍は、蜿々長蛇の如くブラスの大通りを内股に歩く。見物人は山を築き「見よ日本人を。獅子のような頭、みな足が悪いのかしら、まさかチンバではなさそうだ。あの女の手には絵が書いてある。きっと男が女に変装しているに違いない。しかし女に化けているにしては頭の工合が変だ。」と有難からぬ冷評をあびせられて通訳たちは顔から火をとばす。しかし、移民は平気なもの。「あすこの家の作り方は神戸の何々旅館と同じだ。」「あの木はシンガポールで見たものに似ている。」「あのお寺は大きい。」「みよ、ブラジル人は皆笑っている。お世辞がいいな。親切らしい。あれを見な、子供にミカンくれてらあ。」で全く閉口とん首であった。」⑤とある。これではまるでフランス人ビゴー（Ｇｅｒａｒｇｅｓ　Ｂｉｇｏｔ）のポンチ絵そっくりである。明治四十一年（一九〇八）という時代をふうかえって見れば『日の出る国』に普及しつつあったヨーロッパ的服装」はブラジル人記者には意外だったのであって、実はチョン髷の日本人が見られるのではないかと予想して行ったのではないか、という推察さえ成りたつ。コレイオ・パウリスターノの記者も日本人の体格にふれて、胴が長く足が短い、といっているが、移民四十年史に依ると、街へ見物に出た日本人の容貌にブラジル人がおどろいたらしい。「市民の悪戯者は日本人の前に立ちふさがって、低い鼻をみつつ自分の偉大な鼻を指先でおさえてみせた」という。⑥しかし、そういうことに神経をいためたのは、むしろこれらを引卒して出た通訳たちだけであっ

て、移民等は別に気にもかけなかったようだ。日本で異人などはみたこともなかった人たちばかりだったろう。寄港地ではながめて来たにはちがいないが日露戦争に勝利した一等国民は低い鼻も高々と意気盛んなものがあったようだ。

不平のはじまり

移民収容所の食堂

水洗便所を初めて使用したのも収容所内であったというが、西洋式ベットに寝たのも初めてであったろう。彼等はコーヒーが苦いということも初めて知ったのである。彼等ほ最初の日収容所内の大食堂で二回にわたって昼飯を供されたが、そのときはバカリャウ（干鱈）とバタチーニァ（ジャガイモ）のお粥（カンジア）であった。これは魚が好きだという日本人に対して特別の御馳走だったという。⑦だが当時の移民たちがそれを御馳走と感じたかどうかわからない。

さきにも通訳加藤順之助の書いたものの中で示したように、「のどに通らぬものを食わせる法はない」と文句をいったものがあった。日本人一般はまだ洋食というものがいかに日本食とちがうかを知らなかったし、どこへ行っても日本食がたべられるものと思っていた。だから、収容所でも「日本食をだせ」というような無理をいったものがあったほどである。収容所の食事は、朝は牛乳なしのコーヒーとパン、コーヒーは大きなブリキのカネーカに一杯。パンはイタリア式大麦の粉のまざったもので日本人には食べきれないほどの分量だった。

このソヴァード（大麦）のパンはイタリア人の好物であった日本移民にはこのコーヒーも至極苦がかったし、パンと云えばふわふわな餡

パン位しか知らなかったのであるから、このイタリア・パンをゆっくり味わうことは出来なかった。

昼と夜は時々バカリャウのものもあったが、普通は牛肉のスープの中に米をたたきこんだ「おぢや」風のカンジアであってこれにあのパンがついて来る。無論分量は充分あった。しかし油のぎらぎらうかんだカンジアに、日本移民は辟易したのであった。今日でさえ洋食のあとでお茶漬をかっこむことの好きな日本人の多いことを考えて見れば、六〇年前の庶民階級のものが日本飯を食いたがったのは当然であろう。食物については移民たちが農場行きの汽車の中の弁当として収容所からもらって来たリングイッサ（腸詰）が、どうしてものどを通らなかった話は有名である。これは第一回移民だけに起ったことでなく、その後の移民たちにも同じであったことが伝えられている。まっ黒な長い腸詰の一端を鼻さきにもっていくとプンと強いニンニクの臭いがした。これをナイフで切りとって口の中へ入れるとネチャネチャとして、どう考えてもうまいという感がしないたちまち顔をしかめて吐きだしたものであった。移民たちはあきらめてボソボソしたパンだけをかじりながら、ファゼンダまで長時間の汽車の旅をがまんしたのであった。或る男は途中の駅を通りかかったとき、この腸詰をブラジル人に与えてその反応をみようとした。ところがこれをもらったブラジル人は、すぐその臭いをかんで見て、うれしそうにほほえむのであった。

満面に喜色をたたえ、わからない言葉で礼をいっているらしい

ハハア…なるほどと思りた彼は、もてあましている連中からこれをもらいあつめた。そして汽車が駅へつく度にこれを窓からさし出しては

何がしかの金と替えるのであった。この様子をみていた一人がふんがいして「人からもらい集めたものを売るとはけしからん」といったところ、「すてるものを売ったってどこが悪い？　」とやりかえされて返答にこまったという話が「バウルー管内の邦人」中の間崎三三一伝に載っている。⑧

午後あるいは夕方になって農場へついた移民たちはみな農場の労働者食事給与所（ペンソン）で夕飯をすることになった。

これはソロカバナ線トレーゼ・デ・マイオ駅ソブラード農場へはいった移民たちの話であるが、卓上にならべられたのはブラジル式の油飯とフェイジョン（豆）であった。油飯は、今ならまあ具（ぐ）のはいっていないチャーハンといったもの、むろんニンニクの匂いはする。その上しんがあるような炊き方だ。

でも今日のように昔はトマトを使わなかったから、依然白い御飯である。移民たちはおなかがすいていたので、ニンニクの匂はがまんしてたべた。ところが豆は？　油のはいった塩炊き。なんだ甘煮ではなかったのか、とガッカリする。と、一人の男がさけんだ「コンニャクがはいっているぞ……」それからさらにすっとんきょうな声をはりあげて「ブラジルのコンニャクには毛がはえている……」むろんブラジルの生活を知っている人はそれが豚の肉だということはすぐわかる。豚の皮だということはすぐわかる。豚の皮は豆の中にきざんで入れても二、三本、時には四、五本も毛がのこっていることがある。なんでもないことで、これが沢山はいっている程御馳走だともいえる。だまってそのまま食べてしまうものもあれば、毛を抜きとってから口にいれるものもある。しかしそれはブラジルの食物になれているもののの

話。日本から着いたばかりの移民にとって隠元豆に似たフェジョンが甘く煮てあるならわかるが、油の塩あじ、その上毛のはえたコンニャク、なんとえたいの知れない食べものだろう。当時の日本人にとって、このフェイジョンはなかなか好きになれないブラジル料理の一つとなるのであった。食事の後で黒いコーヒーの出るのがブラジルの習慣だ。食後のコーヒー、これをのんで始めて食事が終ったという感をもつ。しかし日本移民にはどうも物足りなかった。ファゼンダにはまだマテ茶も普及していない時代であったから、お茶はなかった。

さてファゼンダ（コーヒー農場）生活の第一夜は労働者住居区―コロニアの家に数家族づつ、寝台もないままに土間に枯れ草などを敷いて、仮寝の夢をむすぶことになる。この一夜は移民たちの気持の変化にとって、大切なキッカケとなるのが普通である。それまでは、船からサンパウロの収容所へと生活をかえては来たが、どこかにまだ洋行気分（？）みたいなものがあり、今すぐにでも金の成る木―コーヒー樹―の前にたどりつくのだという夢のような気持ちがあった。しかし、ファゼンダに着いて、寝台もない土間の枯れ草の上に一夜をすごさなければならない移民の境遇を実感したとき、おやおやこれが移民というものの実体であったのか？　と感じるのであった。

コロニアの生活

先ず寝台づくり

コーヒー農場の家族労働者コロノの生活について語る前に、農場の全景とそこにある労働者住宅地域であるコロニアについて簡単な描写

をしておく。

今農場の全景を遠望するとすれば、無論コーヒーの樹海といわれる数十万、或は百万以上のコーヒー樹が、数千町歩の広大な地上を黒々とおおい、その一角には大小様々な家屋と果樹園のウッソウとしたマンガの樹、また富家邸宅の象徴のようにそびえている帝王ヤシとレンガ敷の広いコーヒー乾燥場とのみえる明るい区域がある。ここが農場の中心部で、事務所もあってファゼンダ中でファゼンダともよばれるところである。そしてここから一直線に横の方へ規則正しい白亜の家並が数百メートルの距離にのびている。あたりは牧場である場合が多い。これが労働者の住宅区域であって、もし幾組にも別れているとすれば少しはなれたところに、別な家屋群が、ここでも一直線にのびている。全体の感は碁盤目に植えられたコーヒー園といい、方形の乾燥場といい、等間隔にならんだコロニアの家並といいいかにも近代的風景として目に入る。しかし内状は必ずしも近代的といえるものではなかった。

コロニアの様式はどこも似たりよったりで、二家族または三家族が一棟に住めるようになっていた。木造もあるが主としてレンガ造りで、家根はパウリスタ式といわれる円瓦で、天井板はなく、床はレンガ敷というのが普通で、土間のところもめずらしくなかった。おもて側は白くシックイでぬってあるから、外観は明るい感である。こういう家が一直線に、数十軒ならんでいるのである。一棟で二家族分のものは、まん中から二つに分けて区切られているが、三家族分の家は三つの住居に区切られて、間にはさまった部分は表と裏があるだけで家のわきの空地がなくなる。だから住むのにも不便なので三家族一棟と

いうのは極く少ない。

一家族分の住居はたいがい四つの部屋にわかれているが、各部屋の入口には戸のない場合がある。各部屋に普通一個の窓があいているが、木の戸だけでガラスはない。表からの入口の所が、客間兼食堂となり、その他が家族の寝室になるわけだが、利用法は無論一定していない。客間兼食堂の奥が炊事場となっている所もあるが、多くは裏側へヒサシをおろして別についている。ここの一隅にかまど（フォゴン）が、立ったまま煮炊き出来る高さにしつらえてある。薪を燃す所（炉口）は一つだが縦に長くて鍋か二ツ三ツならべてかけられるようにできている。設備に気を配るファゼンダのコロニアであれば、レンガ積みのガッシりしたフォゴンが出来ている。

しかし、これらの家屋は無論日本式ではないから寝床はついていない。どこの国の移民でも、寝台は簡単なものを自分で組立てるが、経済的に少し余裕ができれば、家具としてベットを購入し、どこへ引っ越すにもそれを持ちあるくことになる。

日本人はファゼンダから板を供給してもらって、自分で寝床をつくるようになっていたが、第一回移民当時はまだ日本人の生活様式がファゼンダの方でよくのみこめていなかったものか板の準備もなかった所があったようである。

移民たちは農場につくと、最初の四、五日は家の振り分け、寝床造り、食料品買入れなどのためについやすことになる。

水はコロニアの裏側にある共同の水タンクや井戸から汲んでくる。薪はコーヒー園や荒地（カッポエイラ）で拾い集めてくる。便所は特別出来ていないから、たいがいマンンゲロンといって豚を放し飼いに

する割木の棚のかげなどを利用する。ヨーロッパ移民の女たちは便器をつかう習慣があるので屋内で済ますことが出来る。風呂は各自がこれから工夫すべきものに属する

日本移民の生活は先づ寝台又は寝床づくりからはじまる。最初の晩枯草の上に数家族がいっしょに寝かされたヅモーン農場の話は、どの移民史にもたいがい出ているので有名である。翌朝監督や通訳（日本人）がみまわりに来たとき、若いもの二、三人が四つんばいになってヒヒン、ヒヒンといいながらはねまわって、通訳を怒らせた話も知られている。後でこの枯草を取のけて掃除してみたら牛の糞がでて来たので、馬が牛の糞をしたとみんな笑い合ったという。しかし、こうした所に寝かされた女達は「まるで地獄のごたる。こういう所にゃ辛抱できんから、日本へもどして呉れ」と泣きだされて困ったという。⑨

ところでこのヅモーン農場には板が用意されてなかった。そこで、移民たちは山へ行ってヤシの木を切りたおし、持ってきて、これを割って並べて棚をこしらへ、蒲の葉を敷いて寝るようにしたといわれる。

ファゼンダに板があるところなら、移民たちは日本式に寝床をつくり、ここに日本から持って来たフトンを敷いてねる。もしブラジル式にベットをつくるとすれば、割木か細い棒で棚をつくり、この上にトウモロコシの皮を細くさいたものを袋のようなフトン皮に充分詰め込んで、これを敷布団にする訳である。

若し通訳がブラジル生活の経験者であれば、こうした細かいこともよく指導できたと思うが、なにしろ、ブラジル人の監督のいうことを、苦心しながら通弁するのであったから、寝台の作り方などもまちまち

であったろう。それに荷物がなかなか着かないので、道具もなし、移民たちは苦心惨怛したようである。

道具といえば、ブラジル人は、たいがいの仕事は斧（マッシャード）一挺でやりあげてしまう。大木を切り倒おすことからこれを割ること、木のササクレを削りおとすこと、小さな棒を処理することまで。ファゼンダの人達は日本人のように、ノミカンナ、ノコギリなどは、大工以外のものは使用しない。だから持ってもいない。腰にはいつもファッコン（山刀）をぶらさげているので、これで小さな木を切ったり、けづったり、きざんだりする。これは除草期に鍬のクサビなどがとれたとき、これを修理するのに便利だし、ヤマ歩きするときなどは、木の小枝やかずらを切り払うのにも使われる。ナタの代りもする。日本式のナタはちょっと便利だがブラジルの堅い木に使うとすぐ刃がこぼれてしまう。ファッコンはかなりなまくらだが、刃がこぼれない。斧もその通り、いかにもブラジル式である。ブラジル人があの大きな重い斧で、こつこつと鍬のクサビなどをけづっているかっこうをみると、なんと気の長いことだろうと思う。ファゼンダで使っている刃物は切れ味は悪いが、いそがずあせらず、こつこつと仕事をやるに適している。セッカチな日本人にはちょっとまだるっこいが、いかにもブラジル的であった。荷物が着かず道具のなかった移民たちは、おそらく近所のブラジル人から斧やファッコンを借りて使ったに違いない。

巻きゲートルに地下足袋

腰には手ぬぐい

衣服のことにうつろう。ブラジルへ来て一年、二年は、たいがい日本から持って来たものを使った。まだブラジルで衣服をこしらえるためには、裁ち方を知らないし、無論ミシンを持って来たものなどは一人もなかった。

男はシャツにズボン、時には日本の股引なども着用した。そして多くのものが巻ゲートルに地下足袋といういでたちであった。かぶりものは鳥打とか古いフェルト帽、当時はまだヤシの葉の帽子はあまりなかった。

女たちは上陸の際に着て来たあの着物と同じようなものを幾つか持って来たからあれを着て、日本式に手拭いをかぶる。しかしこれは巾がせまい上に、ひさしのある結髪をすっかりかくすには少し小さいので、すぐブラジルのレンソを用いた。ただ白い布を風呂敷形に切って使用するものもいた。

コーヒー採取には手甲もはめた。それに前掛け、地下足袋。すぐブラジルの労働靴を買ったものもあった。日本からはいて来た安靴は、労働用におろしたら、すぐいたんでしまうからである。

当時の女たちはほとんど色ものの着物をきなかった。イタリア人やスペイン人、むろんブラジル人の女とくらべると、彼女たちのファゼンダにおける服装はまるで喪服か、それとも暗い灰色一色に見えた。男も女も腰に手拭をぶらさげて歩いていた。これは汗ふきである。

彼等はブラジルに出稼ぎに来たのであるから、なるべく日本から持って来たものを使用して、ファゼンダでは買わないことにしていた。だから、最初の一農年中着物をこしらえたようなものは、極く少なかったと思う。しかも農場へはいるとたちまち失望して、どこか

もっといい所はないものかと、そわそわしだした人たちにとって、服装など考えている暇はなかったにちがいない。

一番苦心しなければならず、しかも苦心のし甲斐がなかったのが食物である。荷物が着くまでの四、五日間、ペンソンのブラジル料理を食べなければならなかった人たちは、油飯と、フェイジョンにはすっかり参ってしまった。油とニンニクの匂いがどうにもならないのである。早く白いご飯が食べたい。これが収容所以来の願望になっていたのである。牛肉などでも醤油と砂糖で煮たものなら無論御馳走であったが、ブラジル式に煮たものは口にあわなかった。干肉の料理などは問題外だった。

肉に骨がついているといって見向きもしないものすらあった。骨のついたケダモノの肉が食膳にのぼるなど、なんと野蛮なものだろうと考えたに違いない。それは見ただけで食慾をうばうものであった。そこで荷物を受け取ると、彼らは何よりもさきに、日本式の御飯を炊いた。おかずなどはなんでもよかった。たとえば、干鱈の一片を火にあぶったもの、それでよかった。むしろこんなうまいものはないと思う。日本からお茶を持って来ていたものは別であるが、ファゼンダにはお茶がなかったから湯づけをかっこんだ。何週間ぶりかで、船以来の米の飯を食べたときの移民たちの気持はどんなであったろうか。

日本移民にとってブラジルに米があったということは一つの救いであった。たといそれが在来のアグーリア種であって日本米のようにねばり気のないものであり、また味もちがっていたとしても、あんなに米をほしがった日本人に、若し米がなかったと仮定したら、その結果

は想像も及ばない悲惨なものとなったろう。油飯は口にあわなかったとしても、米があるということは大きな安心であった。グアタパラー農場にはいった第一回移民の中からも米作者がでているのは、それが儲かる仕事であるという予想もあったであろうが、米を作ることによって百姓としての安心感を得ようとしたことにもよると思う。

ヅモン農場では白米が一俵十九ミルレイスであった。むろん当時としては決して安い食糧品ではなかった。しかも日本式の御飯にすれば自然量も多くとることになる。だから、この貴重な食糧品を節約するためには、後の移民たちが盛んにやったように、もしさつまいもやマシジオカ等が入手出来たところではこれをきざんで御飯に炊き込んだに違いない。〝四十年史〟によると塩汁を作ってこれに一匙の豚の油をたらしこみ小麦粉のダンゴを入れてスイトンのようなものを作って副食物にしたという。これも一面では節米の役を果したものであろう。

日本移民が農場にはいったときはコーヒー採取期であったから、作物はむろんのこと、野菜もなかった。ただ新らしい農年にはいってからも続いて農場にいたものは、豆や玉蜀黍の間作をやったから、フェジョンの若いさや豆を汁の実にしたり、煮て食べたりした。また日本から持って来た野菜の種をまいて収
穫したものもあったに違いないが、多くのものは早くファゼンダを出る事ばかり考えて栄養をとる方法を講じなかった。ファゼンダには砂糖があったし、ほとんど真異なマスカーボというやつだったが安かった。おそらく一キロが二百レースか高くて三百レースであった。これをコーヒーに入れて飲んだのであるが、日本人は時々フェイジョンを

甘く煮てお数にした。また麦粉があったからダンゴを作っておしるこにして食べた。これは日曜日などの御馳走であった。

第一回の移民のファゼンダに於ける食生活は、早く退去したものと、一年以上辛棒したものとの二種薪に分けて考えることが出来ると思う。夜逃げしたものは勿論のこと、一日も早く正式に契約期間（六カ月のところもあった)をすごして農場を出たいと思っていたようなものは、新しく食物を工夫しょうとせず、なるべくそのときだけ口あたりのいいものを取っていたに違いない。栄養のことなど考えもしなかったから、焦燥感とともにいよいよ体が衰弱して行ったことが察しられる。〃四十年史〃もそれを指摘している。

もう一つの組は、とにかく十月後の農年を農場で頑張る覚悟が出来ていたもので、彼等は後の移民たちがそうしたように、少しでもブラジル食に馴れようとして、時にはニンニクの代りに玉葱などを使って油飯も炊いてみるし、フェイジョンもブラジル式に煮てみる、油気のあるものの方が腹持ちもよく量をやたらに取らないでも結構仕事に耐えられることを経験するのである。

紛争そして夜逃げ……

慌しい程の紛争、夜逃げ、罷業等が続いた第一回移民のコーヒー農場における生活を、その衣・食・住の方面から規定する事はむずかしい。たとえば紛擾の中心地の感さえあったヅモーン農場の如きは、僅か五、六日間の滞在期間であり、収入の少なかったこと、仕事場が遠かったこと、ブラジル食が口に合わなかったこと、通訳が不親切であったことなどについて、移民たちの不満はあきらかにされるが、そ

の期間中どんな生活をしていたかは、全然語られていない。だがその間、家の中には日本から持って来た荷物はただ乱雑に放り出されたまま、おそらく落ちついて家庭生活をいとなむためにあれこれと工夫するようなことはなかったと思う。日本人の生活に欠かすことのできない風呂でも、無論工夫されなかったにちがいない。また、せっかく十月からの新らしい農年を過すことになったイツーのフロレスタ農場などでは、翌年一月二五日になっても、五二名の沖縄移民は問題を起し、調停のために赴いた上塚代理人と農場主とが交渉中、移民たちの態度が農場主の嫌悪にふれて、全部追放を命じられたという例もある。その時移民たちの食糧用作物は、全部農場側に没収されたように書いてある本もあるが加藤順之助の書き残したものによると、移民たちは故意に自分たちの作物を全部根本から刈り取ってしまったものだといい、また農場主の好意で焼いた二〇〇俵の炭は移民たちの手によって焼き払われたものだという。

このように動揺しつづけた移民たちは、新しい環境に落ちつくため衣・食・住について工夫するという気分など出なかったことであろう。

⑩「配耕後半年にして原契約耕地を去るもの四三〇人」前記ヂュモント（ヅモーン）耕地退耕者の中の七〇人を差引いても、三六〇人である。

その後さらに九ケ月、四二年九月下旬野田通訳官がまた関係耕地を廻ってみた。そのもたらされた数字をみよ、前記耕地中本邦移民の止まるものは実に百九一名に過ぎなかった。」⑪

このように移動性のはげしかった第一回移民（こうした傾向は日本

移民ばかりのものでないことが注意されなければならないが)はブラジルの生活になじめないままに四散したものが多かった。

ただし、こうした傾向はあったにせよ、最後まで農場に頑張って契約年限を完うしたものが一九一名いたのであるから、彼等の生活はその後の移民もそうであったように「ブラジル生活の初等科」である、コーヒー農場において、衣・食・住のすべてをブラジル式に変えていったことが想像される。初めには鶏を飼った。つぎには豚を飼った。自分で豚の油をとり、また塩つけの脂(トウシンニョ)も造ったろう。臓物で石鹸を造ることも覚えたに違いないし、パンの焼き方も習らった。⑫むろんブラジルの酒(ピンガ)は好物中の一つになったにちがいない。これはその後ファゼンダへはいった日本移民の記録をみると、はっきりするところである。

中にはヅーモン農場からソロカバナ線トレーゼ・デ・マイオ駅のソブラード農場に移った。福島県人の一人などはここに十年間もがんばっている。⑬二年目からは故国へ送金して、それが評判となり、多くの移民をブラジルへ誘入する刺戟となった程であった。こういう人たちの生活態度を、その後の人たちの経験によって考えてみると、衣・食・住のすべてにわたって進んでブラジル式なものをとり入れて行ったことがわかる。彼等は当時『旧移民』として新移民たちの模範となったのであった。

しかしこういう人たちといえども、独立農へうつってからは、味噌も作り、風呂もたてて日本的生活を味わうようになるのであるが、それからはごく自然に、必要に応じてブラジル式のものをとり入れ、無理なくここの生活になじんで行くのであった。

○

註

①パウリスタ新聞社刊行「コロニア五十年の歩み」筆者加藤順之助、三九ページ

②　同上

③　同上　三一ページ

④鈴木貞次郎著「ブラジル日本移民の草分け」三八八ページ。

⑤パウリスタ新聞社刊行「コロニア五十年の歩み」筆者加藤順之助、三四ページ

⑥香山六郎編「移民四十年史」三四ページ

⑦　同上　三三ページ

⑧輪湖俊午郎著「バウルー管内の邦人」中の〝管内同胞二十一人伝〟三五ページ

⑨児玉正一著『ブラジル移民の父・上塚周平』一四三～一四四ページ

⑩コーヒー農場（ファゼンダ・デ・カフェー）のことを耕地と呼ぶ。移民会社が移民を農場へ送りこむことを配耕といった

　ちなみに、入耕、転耕、退耕などの言葉も使った。

⑪ブラジルにおける日本人発展史刊行委員会編『ブラジルに於ける日本人発展史上巻、二八四ページ

⑫ヅモーン農場からノロエステ線のサン・ジョアキン農場へうつった移民たちは、ここでパンを焼いている『ブラジル移民の父・上塚周平』一四六ページ

⑬前掲『五十年の歩み』二八ページ

（人文科学研究所員・画家）

明治を旅する

〝汗と感傷の歴史〟

渡邊　七之助さん

真っ白な髪、日焼けした顔、がっしりした骨組み、それになんとまあ太い指、これこそ海外移住者―といいたくなるような老人が、いま目の前にいる。ブラジル・サンパウロ州グアルリョス市在住、渡辺七之助さん（八一）。

５９年ぶりの里帰り

明治四十一年、第一回ブラジル移民団〝笠戸丸組〟七百八十三人の一人。いま、五十九年ぶりの里帰りで福島県二本松市錦町一の二六の〝実家〟に落ち着いている。口をついてでることばも、そのまま移民の歴史だ。

「日露戦争が終わってハァ、まもなくのことス。ハワイ移民の募集があって、わたしもひと働きして親の借金二千円を抜こう（返そう）と思い、村長さんに頼みました。それに広い海外で一旗あげようという気もあってー」

当時、渡辺さんは二十歳。徴兵検査も終わり新婚早々のころ。いま、二人のむすこにまかせ、隠居の身分。若いころの夢とはちがった形だが、とにかく生活は落ち着いた。しかし年をとる、ということはさびしい。孫が「おじいちゃんのブラジル語はまちがっている」などという。

日本が恋しいーと思ったやさき在伯県人会連合会と「日本海外移住

家族会連合会」などの主催で、移民百年を記念する〝里帰り〟の話が生まれ、一時帰国が実現した。

むかしワラジばきで通った道を、さしまわしの車でわが家へ帰った。父も母もいない。丘の上の生まれた家だけが、むかしのままの姿を残していた。

渡辺さんは、かけあがり、黒光りのする柱に、太い指ですがりつき、涙を流した。

なつかしさもある。生きて帰れた喜びもある。いろいろなものが、いちどにこみあげてきた。そのなかには「日本を出たのが、よかったのかどうか」というほろ苦い悔恨の涙もまじっていたかもしれない。

（サンケイ新聞報道の一部）

Ⅱ　形　成

日本人はコロニアを形成した。コロニアでは、村をつくり、日本人会や青年会が活動した。ある者は俳句や短歌に親しみ、ある者はスポーツで体をきたえた。年に何度かは、入植祭や運動会を催して家族総出のたのしみも忘れなかった。

こうしたコロニアの形成は日本人が、グループとして生存するための必須条件であった言語習慣のちがうこの国の社会に馴染めるまでは、自己崩壊を予防できる唯一の途であった。日本人のコロニアをキストだの、反同化の拠点だのと非難したのは、野暮でそして皮相な観察にすぎなかった。移住者はコロニアを休息の場とし、疲労回復の場として、再びブラジルの社会に出ていくのだ。コロニアを足場としてこそ、はじめてブラジル社会への融合が実現したのであった。

ブラジル情勢と日系人

廣　川　　郁　　三

ブラジル国は、北緯四・四二から南緯三十三・四五に及ぶ大国である。丁度日本全土の二十二・五倍にあたる大陸で、南北約五千キロ米、同じく、アンデス山脈から大西洋岸迄の東西約五千キロ米、即ち北海道からシンガポール迄の距離を有する大国である。

然かも伯国全土の六十八％が耕地可能面積で、日本が僅か全土の約十四％しか耕地面積が無い事と考えると、総ゆる点で、日本とブラジルは対照的である。

ブラジルは世界コーヒー産額の五十％を産出する点では、正にコーヒーの国ではあるが、同時に、ココア、棉花、砂糖、米、とうもろこし、豆等の農産物を産出している。

ブラジルの真の富は、未開発の地下資源にあると云わねばならぬ、一例をあげると、鉄鉱石である、伯国鉄鉱石の埋蔵量は推定六百億トン、実に全世界埋蔵量の三〇％に匹敵するのである。これだけで既に伯国は世界の最も豊める国と云い得るが、更にダイアモンド、マンガン鉱、ウラニューム、チタニュームボーキサイド、総ゆる宝石等、無限の地下資源を有し、しかも現在迄の開発は三〇％程度とすると、誠に驚嘆すべき資源である。

伯国人口は、現在約八千五百万人と云われ、ポルトガル人、イタリア人、スペイン人、独乙人、日本人を始めとして世界九十ヶ国以上の人種が住む、人種平等の国である。

白、黄、黒色人の差別も無く、然かも相互の結婚により血を交えて出来た世界唯一と云っても良い、文字通りの一つの世界を現出している、自由平等の国である。

伯国が有する優れた条件に対して欧米諸国が続々企業進出し世界の有名企業は殆ど伯国に進出している実情である。

過去百年に及ぶ工業化は、今日南半球最大の工業国として、総ゆる関連工業、産業を有し、殆ど八〇％の国産化を確立している。

伯国は、一九六四年の革命政府樹立以来、悪性インフレの制圧、健

全財政の確立等一連の経済安定政策を実施し、一面政治的には、左翼系政権を一掃して、自由陣営の有力国として政・経両面に於て、革新的な進歩を具現している。

以上の情勢下にあって、日本人は一九〇八年の第一回かさと丸移民の渡伯以来、実に六十年、日本よりの移住者は約二十万人、現在二世から五世迄の日系人を合すれば、六十三万人と云われている。

最初、農業移民としてスタートした日本人が、ブラジル農業に貢献した功績は絶大なものがあり、伯国朝野の賞讃の的となっている。

今や、伯国に於ける日系人の所有農場土地面積は、日本々国の同耕地面積の一割強、上回り、五百五十万町歩に達している　云いかえれば、日本人の最大の耕地は、ブラジルに在り、と云う事である。

日系農場の産する比率を見ると、茶九十二％、コショウ八十二％、繭八十％、ラミー九十二％、コーヒー九％、棉花十四％落花生二十一、トマテ五十八％、鶏卵四十四％、果物三〇％と真に驚異的なものがある。現在これらの農場、土地、日系民族資本は円貨換算四千億円と云われており、裸の移民が六十年間の労苦苦闘によって、一大金字塔を打ち建てたと申すべく、感激せざるを得ない。

今や二世の活躍は目覚ましいものがあり、政界に於ては、連邦議員四名、州議員六名、人口三万から、二十万程度の奥地伯国都市の市長、副市長は八十名を越え、市会議員に至っては数百名、最高裁判所判事一名、サンパウロ州政府長官（大臣）一名、軍人その他公職にあるもの三千名と云われている。　即ち伯国に於ける日系人の政治勢力は、実に巨大なものがあり、それだけに伯国人の日系人に対する信頼度は絶大なものがある。　（以下欠あり）

は米貨一億八千万ドルに達する盛況である。

本年度二億米ドル突破は確実であり、やがて三億米ドルを実現すると信ずる。

以上、日伯関係は移住で始まり、現在は企業進出が続々実現され、さらに両国の経済の懸橋として、日伯貿易が倍増の盛況にある訳で、移住、企業進出、貿易の三つの柱が中心になって総合的な海外最大の日系人の活躍地となっているのである。

しかも、ブラジル朝野から最も感謝、賞讃されつつある事を見る時、日本本国朝野は対ブラジル政策の重大性を充分に認識され、更らに一段の重点的政策を指向する必要を痛感する次第である。

目を伯国に於けるイタリー移民に転ずれば、今や、在伯イタリー移民コロニアは四百万人に近く、在伯国の工業の三十五％はイタリア系であり、同時に伯国に有する農場その他を合した民族資本は本国イタリアの総財産を上回ると云われている。

伯国財団として有名なマタラゾ社の総資産は三億米ドルと云われる。

今やイタリア人口四千万人の約一割、伯国イタリア系人口四百万人の財産の方が多く、真のイタリアはブラジルに在り、と申しても過言ではない。

日系コロニアが今後十二、三年後を出ずして、百万人を突破する事を想定すると、現在の数倍の財力を有する様になるであろう。

ブラジルは日本及日本人に取って真に偉大なる夢と将来を約束する世界唯一の国であると確信する。

（ブラジル日本・商工会議所　会頭）

コロニア　と　ジャーナリズム

藤井　卓治

一、新聞の價値と任務

コロニア新聞の歴史は、もう五十三年になる。近年まであまり変りばえのしないものが二つある。一つは新聞のレベルともう一つは編集技術である。レベルが向上していないということは創造性がなかったという意味だ。

これには、経済力と読者のレベルの問題もあったが何よりも記者という職業が確立していなかったことに原因がある。カマラーダやコロノの労働に耐えられない連中が都会に出て次の固定した職業を求める足場としての新聞記者であった。そこには研究心も創造力もなく、ましてやその使命を貫く気魄に欠けていたといえる。もう一つは新聞がボスの独占事業であったことによる。

この組織と経営の点は購買力と広告主の貧困にもよるが、何よりも権力的家父長制の延長に似た独占私企業化という面でその発展がはばまれている。

つまり、経営者は常に一人であるという、前近代的なひずみが、記者のレベルを自由に伸ばすことができなかったといえる。

また、戦前の、編集と経営の一本化、即ち、経営者である社長自ら筆をとって社の方針や論説が一人の人間に固定された〝個〟の新聞経営が記者のレベルや読者の開眼を拒んだことはいうまでもない。戦後は編集と経営が分離されてきたが、経営の面は相変らぬ有様である。

戦前には「伯主日従か、日主伯従か」『ブラジル養子論か天皇赤子論か』「日本精神論か自由主義論か」『帰国論か永住論か』「日語教育かブラジル教育か」について幾多の大論争が繰り返された。それ等移住者にとって切実な大問題の多くは新聞記者ではなく読者の側から提起されてきた。新聞はこれに論争の場を与えたに過ぎない。そしてその解決もまちまちの状態であった。只一つ移民会社のボス追放には各社力を併せて鋭いカンの力をみせてくれた。いまのコロニアの問題点は〃同化か自主か〃〃文化的包摂か調和か〃〃移住者は日本人なのかブラジル人なのか〃〃日系コロニアは、何時消滅するか〃〃産業構造の発展策は何か〃ＥＴＣ・ＥＴＣである。これらの問題意識……つまり日本の新聞の辞書にない問題点を掘り下げることについての努力はほとんどなされていない。それらは日系コロニアが、いま二世層へのバトンタッチという転換期に立って是非分析解明されなければならぬ問題点であり、ヴィジョンであってそれは新聞の大きな任務であると思う。

編集技術については、新しい日本語導入、第二社会面の誕生写真報道とポ語欄の面で進歩をみせたが、活字が九ポイントという石油ランプ時代のそのままであるため、紙面に現われる記事が長くて量が少い。ラジオ、テレビというニュースの強敵を迎え撃つ姿勢が何一つ打ち出されていないことも問題の一つだ。相も変らぬトップ記事争いだけが、生命であるという態度からもっと企画もの、キャンペーンものが出るべきではなかろうか。

日本の週刊誌丸写しの中面を、時事解説経済解説ニュース解説、それに世論を指導する論文にすりかえることも時代にマッチした行き方

ではないか。日本語新聞は一世の新聞である。この一世の層は商社企業進出、戦後移住者など高い教育を受けた者を含めての啓発指導の任務を持つ。新聞が五十三年一貫して旧移住者だけの対象であってはならない。ここにも日語新聞が摸倣だけでなく新鮮な頭脳を駆使し新しい価値創造を強く要請される所以であろう。

いまのニュース価値は＝時間×権威×重要度×人間的興味だといわれる。新聞学の上からは①ニュース性、①定期性、③報道性、④娯楽性だというが移住社会ではこれに⑤啓発指導性が加えられる。

販売の面からみたニュース価値は、①戦争記事、②性と犯罪⑨政治ゴシップ、④スポーツ、⑤家庭の順位で、今の新聞は圧倒的に、この商品価値を強調している。

産業構造の発展に伴う広告量の増加はこの商品価値に拍車をかけ企業への従属化が著しく、従って新聞は現状維持の社会体制を守る保守的立場に立ち社会の改革進歩にはペンをぼかして協力を拒否する。

叫ばれる新聞の公器性は次第にぼやけ、私企業化が目立ってくることは各界各派の小新聞の氾濫を招く所以でもある。

二．昔　の　新　聞

昔の新聞はそれなりに個性を持っていた。日伯新聞は、自由主義的立場をとり、日本や世界の全体主義化に強く反撥した。

当時野党色で染めあげられたこの新聞の主張は、今のコロニア民主化への接続に大きな役割を果し、その傘下から幾多の指導的人材を出した。

ブラジル時報は、強い日本的特色を発揮し日本官憲の官報的存在で

あった。戦後この中から保守派強硬派のリーダーが圧倒的に多く出たのもうなずける。

聖州新報は、ブラジルに日本文化を定着させる面で、笠戸丸移民の香山が、その半生をかけた新聞だ。犬猿もただならぬ仲の、日伯、時報の間に立って常に中立的立場をとっていた。戦後この新聞が再刊されていたら、負け組の日伯系パウリスタ新聞と勝ち組の時報の間に立って、一番伸びた新聞であったかも知れない。ただ聖報が戦争直前の廃刊命令に先立って打出した〝海南島再移住論〟は何とも後味の悪い幕切れであった。日本語新聞最大の欠陥は、ブラジルの政治批判が許されないことにある。三浦日伯は日本の出先官憲批判で、時報との対立となりブラジル政治批判のワナにひっかけられて二度も国外追放の憂き目をみた。

しかし三浦のコラム、須田町人の張り扇はコロニアの人気に投じ、戦前一万五千という海外最大の日語新聞を作り上げていた。権力に対する抗争は封建時代以降、犠牲者を出す大衆の利害につながることで、一番日本人の血を湧かすニュース価値であった。最近サンパウロ新聞が〝大使は田舎の小学校の小使云々〟と書いたため、総領事が〝外交問題にするぞ〟とがなりたてた一幕も、この権力に対するヤユをきかせている。

黒石時報の〝あるんである〟式、修身教科書的社説は、儒教・倫理観の担い手であっただけで東洋的倫理観の価値はあったとしても、西洋的キリスト教的倫理観への接近もしくは、克服的意欲はなかった。黒石自身の日本人としての教養と誇りが外界への融合、適応性を拒否させたのだと思う。

日語教育問題にしても立派な日本人に仕上げる目標、それは帰国を前提とすると共に日本人の世界征覇の夢につながったものとみることが出来る。それは教育普及会の葛岡忠雄のいう〝二世は天皇陛下の赤子である〟に通じ永田稠の〝アマゾン日本領土論〟に通ずる当時の声なき声を代表する支配的な思想であった。香山聖州は、和歌、俳句、詩などの短詩型文学や随筆、紀行文、小説など、移民の芸術を創りあげて不遇なインテリ階層の育成に力を注いだ。それはブラジルの地についたコロニア社会のあり方を示向したものであった。そのコラム・電滴は皮肉とユーモアを交えて世相を斬り社説のない新聞として特徴づけられた。激動する社会への責任から逃避する〝社説なき新聞〟であったかも知れない。香山は最後に、二十年のブラジル定着への目標と努力を一擲して海南島再移住論に走り自ら新聞記者的生命を絶った。戦前はこの外に週刊紙で、翁長の〝日本新聞〟坂井田の〝週刊南米〟がサンパウロにあり、リンスには梶本の〝ノロエステ民報〟、アラサツーバには中川の〝アリアンサ時報〟があった。

雑誌では揮旗、佐藤の〝農業のブラジル〟、黒石の〝子供の国〟などがあげられる。

三、いまの新聞

いま、日刊では、サンパウロ、パウリスタ、日伯毎日新聞があり、旬刊に、パラナ新聞、評論新聞、羅針盤、ショッピングニュース、がある。この外にもモジ・ダス・クルーゼス市、サント・アンドレー市、アサイ市、ロンドリーナ市、バストス市などに印刷又は謄写刷りのローカル新聞もある。雑誌では〝日伯情報〟、〝農業のブラジル〟、

〝実業のブラジル〟といったところ。

戦後は勝った、負けたの背景の上に立って、マスコミの最盛期ならぬ氾濫時代を迎えた。その中で時代と共に消え去った新聞雑誌を拾ってみると、まず、勝った組の背景に立った新聞雑誌では、ブラジル時報、昭和新聞、ブラジル中外新聞、雑証輝号。負けた組の背景に立った新聞雑誌では南米時事、球陽新報ブラジル朝日、週刊日系、サンパウロマガジンなどがあった。

そこで戦後の新聞は、経営の面で或は設備投資や―編集陣容の面でも次第に近代企業化に移行しつつある。サンパウロ、パウリスタ、日伯ともに株式会社の体裁を備えているが、中味は個人所有と大して変らない。

現在の所有者がその経営を開放しない以上経営権の交代はあり得ない。

カステロ・ブランコ政権末期の新聞法、新憲法は経営陣と編集局長等が生来のブラジル人であることを法令化しているからこの意味で名儀上の交代は早晩免れまい。

この日刊三紙をみると、ジャーナリスト出身の経営者パウリスタ、日毎の方が、新聞の公器性、倫理観というものに比重をかけているためか些かたじろぎ気味のようだ。

サンパウロはスタートからして商業新聞の性格をはっきりと打出し広告層の捉え方に一歩先んじている。

日本敗戦の認識運動の機関紙としてスタートしたパウリスタは今もその特色を堅持し圧倒的にインテリ層の支持を受けている。特に戦後の新聞記者倫理化に大きな役割を果した。

それは新聞の主張の上からも逸早く職業的記者を日本から呼びよせた結果であった。

戦後の新聞の問題点は

①思想の一元化、②新しい日本語の導入、③設備の革新、④労働法の履行、⑤ラジオ、テレビニュースとの競争などがあげられた。

この為には新聞記者が新しい戦後移住者であることが、新聞近代化の捷径であった。戦後のコロニア民主化はこれら一線記者の外に、五万に上る戦後移住者に負う所が大きい。

サンパウロ新聞は勝ち組、負け組の激発を避けるためゆるやかなカーブを描いて、認識問題に対処した。今日尚往時の勝ち組、負け組の傷恨が根深く残っているコロニア社会—負けていることは認識していても負けたと言いたくない—何とも奇妙な現象であるが巾広いそれらの層をしっかりと握っていわゆる大衆層を卒い発行部数二万五千まさに海外最大の日語紙を誇っている。機械設備も逸早く完備させた。記者の海外派遣も頻繁に行い、通信社との提携もこの社が最も早い。

日伯毎日はパウリスタ新聞から分派したもので日刊三紙の中一番出足がおそい。鏑を削る、パウリスタ、サンパウロの間に伍して、コロニア人発言の舞台として、各界、各層の人物を登場させ、コロニアの広場として親しまれている。この新聞には社説がない、コラムもない……〃君達の力でコロニアの指針を出せそれに協力するのがこの新聞の任務だ〃と言っているようでもある。とも角これら日刊紙は何れも堂々たる社屋を持っていて戦前の借家住いとは格段の差でもある。紙面ではニュース以上に論説に重きをおいた明治の新聞や戦前の新聞と

こと通い〃個〃　の意見から集団の意見へと移行したことに大きな進歩の跡がみられる。

戦前、一部にあったような無軌道記者が姿をけした今の新聞界を眺めてうたた無量の感がある。それはそれなりにきびしい世相の反映でもあろう。

四、日語　ラ　ジ　オ　放　送

戦後ラジオの日本語時間ができてサンパウロ市を始め地方各都市に拡がった。一九六二年にはサンパウロ市内一〇の放送局の日語時間は長短波合せて一八の放送時間を持っていた。地方都市のものを加えれば一〇〇に近い数に上り日語放送記者は一三〇名といわれた。一昨年日語放送が禁止されてからは市内で七つの放送局、一一の放送時間に減り、今では僅か三つの放送局となり地方都市の放送時間と共に潰滅に頻している。

日語放送が全く禁止された訳ではなく事前許可を受けたインタービュー、日本音楽はその制限を受けない。

日語放送の全盛時代に新聞ニュースは大きな打撃を受けた。この日語放送の雄は只一つ放送局を所有するサント・アマーロである。この放送局はロコニア歌手の育成に寄与し、作詩、作曲家を送り出し或は日本から芸能人を呼び寄せて日伯芸能界の交流に力を注いできた。このねらいは圧倒的にふくれ上った二、三世たちの動員体制で、ブラジル語による日本文化の伝達が大きな任務となっている。それはやがて日伯の文化を接触させる大きな接点となるであろう。

日系人のテレビ経営、これはポ字新聞の経営と同じく今のコロニア

社会最大の夢である。

（ブラジル日本文化協会事務局長）

１９６８年7月２６日叙勲祝賀会（文化センター正面玄関にて）

６０年ぶり桜の故国
涙ほろほろ里帰り
永田夫妻と湯ノ口さん

「桜の咲き誇るころの故国、死ぬまでにもう一度見たかった」とブラジルへの第一回移住者八人が十二日横浜港着のぶらじる丸で六十年ぶりに里帰りした。一行には指宿市、出身の永田一（七六）ノキ（八一）さん夫妻、湯ノ口畩市さん（七八）三人も参加しており「夢にまでみた帰国がやっと実現しました
ふるさとの桜島や開聞岳を見て回ることが何よりも楽しみです」と涙をぽろぽろ流しながらこの〝今浦島〟は喜びを語っていた。

永田さんらは十九日午前十時三十三分西鹿児島駅の特急〝あかつき〟で五十九年ぶり郷里の土を踏む。駅頭には寺園鹿児島県知事らも出迎え、三人をあたたかく迎えたいと計画している　指宿市十二町には永田さんの妹、西牟田ミサさん（七四）が健在、二カ月余りの滞在は、メイの娘西田フサ子さん（指宿市西方）が引き受ける。湯ノ口さんの身寄りは多い。鹿児島市照国町に二番目の弟熊吉さん（七〇）宮崎市にもその下の広さん（六四）がいる。

（南日本新聞報道の一部）

戦前戦後に於ける環境衛生

細　江　　静　男

日本人ブラジル移住史を六十年とすると戦前史が三十七年間戦後史が二十三年のふりあいとなる。そして衛生学的に眺めて戦時中には何等の好転がなかったから戦時中の歴史も戦前史の中に入れて間違いない。

先ず時間的にいうと私は一九三〇年八月末にモンテビデオ丸の特三の乗客として親子三名サントスに上陸の第一歩を踏んだ従ってそれ以前のことは「耳から入った話」である。又広いブラジルを地理的にいうとアマゾン流域のアカラや、パリンチンスには日本移民が入植していた。これ等の人々についても「聞いた話」であって自分の体験ではない。

そこでサンパウロ州の奥地については故高岡専太郎博士、又海岸地帯については故菊地円平先生、パラー州、アカラ地帯については故奥村良夫博士、パリンチンス地帯は故笹田政数先生、戸田義雄先生等の先輩から色々教えていただいた智恵である。

すでに日本移民の第一号がブラジル上陸以前からブラジルの海岸地帯では黄熱病や悪性マラリアが猖獗を極め、かかったら大てい死ぬというようなひどいものであり、ブラジル政府は黄熱病、マラリア撲滅に最大の努力を払い、北米からも有名な学者が参加、日本からも野口英世博士が来伯されると云う騒ぎ。

勿論ヨーロッパからも英国、ドイツ、フランス、イタリア、オランダ

等々の著名な学者が参集し黄熱病の病原発見、マラリア撲滅に最善の研究せ努力を行なった。しかし黄熱病原因菌の発見に至らず只アノフェレス・ステゴミアと云う蚊の仲介により病気は伝播されて直接病人から病人への伝染でないと云うことのみわかったのであった。又マラリアもアノフェレスと云う蚊の仲介で伝染するがアノフェレス蚊を殺す方法は発見されず、ボーフラ（ラルファ）を殺そうと云う努力が行なわれたのみで「キニネ」服用以外には何の手も打たれなかったのである。

かかる時代に日本移民が主としてサンパウロに、又十数年おくれてアマゾン地帯に移住して来たのであった。サンパウロ州に於ても一番開けていたのはモヂアナのカフェ地帯、セントラル線地帯位のみで、カンピーナスやバウルーあたりは町の様な形態をとっていたし、又ソロカバナ線ではボツカツ、オウリンニョス、アシスなどが町のかっこうをしていたのみであった

あとは見渡す限りの原始林で所々切り開いた小さい場所に駅がポツネンと建っていて黒人の駅員が二、三人いて、夜になるとカンテラの灯がまたたき汽車がつくと賑かだが汽車が去ってしまうとやがて又カンテラの灯も消え淋しい真の闇があたりを占めてしまうと云う有様で、サンパウロ市をはなれるとマラリアの巣であり、一九三三年にはモジのチエテ河の対岸に黄熱病が出たこともあった。ましてや一九二四、五年頃のノロエステ線の奥カフェランジァ附近は想像に難くない。その時分そこにあった上塚植民地、平野植民地が完全にマラリアにやられて滅びさった。その悲惨さが原因になって戦前唯一の福祉救済事業同仁会が生まれたのであった。

悪性マラリアであったか森林黄熱病であったか今もってわからぬ疑問である。これらの部落も又バウルのリオ・デ・ペーシェ河畔のバタリョンに於ても、又リベロン・プレートの近郊コレゴ・ベルデの部落に於ても合せて二百二十名の同胞が斃れて行ったのであった。その時分の日本人の食事は又乏しい貧弱なものであったと云う（高岡先生）第一お金が充分にない、そしてその食事はモジアナ地帯でコロノとして彼等が覚えて来たその昔の奴隷の食事であったのである。

日本人がピンガ（アグァルデンテ）以外人並の食事を食べだしたのは一九三〇年以後であった。

マンジョカ・ララーダ、ファリンニァ・デ・マンジョカ、コジダ、フェイジョン及びカルネ・セッカ少々、トシンニョ少々であって量に於ても質に於ても充分と云える状態でなかった。

その上に腸寄生虫病、アメーバ赤痢、細菌性赤痢、貧血、栄養不良、金欠病、僅かの人を除いては全く目も当てられぬ有様であった。（高岡、笹田両先生）

かくして一九三〇年代となり、これからは私が体験した日系人植民地の生活つまり衛生状態である。まずこの時分サンパウロ州パラナ州の一部にあった伝染病は、マラリア、フェリダ・ブラバ、ブラストミコーゼ、アメーバ赤痢、トラコーマ、肺結核等であった。森林黄熱病の流行もあったし、シァーガス氏病の点在的流行もあった。新開拓地にはマラリア、アメーバ赤痢フェリダ・ブラバはつきもので、その時分北パラナのジャタイの駅に三十分立っていたら、必ずマラリアになるといわれ汽車のつくまで人の子ひとりいない。汽車がつくと出るのと一緒位で逃げる様に発って行ったものであった。又十二指腸虫病も

みるみるふえて来た。当今こそマラリアもほとんどサンパウロ州から影を消して海岸地帯を除いてほとんど見当らぬが三十年前はサンパウロ市とその近郊一部とカンポス・ジョルドンがマラリアのなかった所位で又アメーバ赤痢も必ずと云ってよい位発生した。時には溜り水をのんだりにわか雨で谷間にふえた流れ水をのんで、ほとんどの人がアメーバにかかる。枯葉アメーバのことも多かった。又住家が仮住いで「泥壁、サッペ屋根」「板壁、サッペ屋根」の家が多いので、すぐパルベイロの巣となり、それに噛まれて糞をぬりつけられ「シャーガス病」の疑似となる人も多かった。ことに若い人に多くバストス植民地あたりのスポーツ青年で三十五、六才となり心臓の故障がおきスポーツの為と云われたが尚よく調べられるとシャーガス病であった例も相当あった。栄養不良なのに過激なスポーツと過労で心臓障害をおこした人も勿論あった。コロノ生活をして来た人々は金さえ出来てくれれば食物の向上、フェジョアーダ、マカロナーダ、油飯とそこは自由なものであったが日本直来は仲々困ったもので食習慣が取りかえられずいつまでも「お茶づけさらさら」。カロリーを充分摂取しようとして胃拡張をおこしたり、又蛋白不足で栄養失調をおこしたりした。その結果は肺結核患者の頻発で日本人は結核の特異体質かと疑われ排日の原因となりかけたこともあった。その真原因は過労と栄養失調の為の衰弱であり「日本人の為のサナトリオ」を我々がカンポス・ジョルドンに建てた理由もそこにあった。黄熱病には海岸地帯にある重症のものと奥地にある軽症の黄熱病とあり後者軽い方を森林黄熱病と云う。今のペレーラ・バレット昔のチエテ移住地アリアンサ移住地、ノロエステ線奥地一帯の日本人入植地帯に森林黄熱病が流行したのは一九三三

年頃であった。私はサンパウロ州立大学の寄生虫学教室（サムエル・ペッソア）先生の下に席をおいて医大への入学準備をしているときであった。猿が仲介主であって森の樹の高い所に住んでいる。しかし罹患して死亡すると黄色になって森の中に落ちている。だれか医者が行ってそれを確めてくれないかとブラ拓本部から募集するが行きては一人もない。だれかに行ってもらいたいと云う訳で武田先生（その時サントス在住）と私に白羽の矢が立ち二人出かけた訳である。もう山伐り人夫も日系人農夫も二、三十人死んだという状態で、戦々恐々でアリアンサの森に這入って猿の死体を探してくれといっても希望者は一人もない。そこでノルチスタの人夫を一人つれて森に這入りついに猿の死体をみつけて肝臓をとりサンパウロへ帰った。そして森林黄熱病に間違いないとわかったのであった。それから二週間位して私は本病を体験し生死の境をさまよい体重十七貫の男が十二貫となって一ケ月目に病床から立上がった。

この体験記は又外の機会に語るが斯の如くパウリスタの真中に恐ろしい熱帯病が流行して人心を寒からしめたのであった。

マラリア、フェリダ・ブラバ、ブラストミコーゼはスザノ、コチア、ジュンジアイに沢山あって遠くへ探しに行く必要はなかった。又ペンフイゴ（森林やけど）全身がやけどの様な水ぶくれになってそれがつぶれて水が流れ出て癩病の様になってぶるぶるふるえている。本病はトレメンベまで出て住民を恐ろしがらせた。これが戦前のサンパウロ州であったのである。

又パラ州のアカラ郡の鐘紡植民地は四、五百年前からポルトガル人の入植でほとんど伐り荒らされた再生林へ入植したと思えばいい。こ

れはすべての熱帯病の巣であって、たとえ日系人の入植した地方が原始林であっても病菌の伝播は行きとどいていた。

アカラはマラリアで亡びたといっていい。生残った人々の生命力には感激と尊敬を惜まない。そしてトメアス地区、ピメンタ・ドレノをもってアマゾン地帯を戦後に救けブラジルの人々から「救国神」の如く喜ばれ尊ばれるのも宜なるかなである。この人々には死に亡び又は逃亡した日本人の中の真珠の玉であった訳で、「日本人ここにあり」のさけびをあげずにいられないバレンチンス地帯の熱帯病の死にのこり逃亡者をあざわらって残った日本人。これが今日のアマゾン本流地帯の日本人で、ポルトガル、フランス、スペイン人達の人海戦で死んだ墓場に畑を開いて今日の成功を遂げているのであり、南伯に於ける同胞と同じ環境に打ちかって生きぬいた人々でこれ又「日本人ここにあり」である。此の戦前戦中の苦難史上の上に築き上げたのが戦後の日本人植民地でこの極楽境を次ぎにのべて見る。…先ずアマゾン地域ではすでに日系人の手でトメアスのピメンタ・ドレイノ、バレンチンスのジュッタは経済生活の基本を築き上げ考えず労せず只働きさえすればお金になった大戦直後上塚門下のヴェテラン越知栄、辻小太郎氏等が同輩十余人を糾合しアマゾンの各地に基地的植民地を開拓した。それはアクレのキナリ、ロンドニアのトレゼ・デ・セッテンブロ、アマゾナス州のエウジーニオ・サーレス・アグア・フリア、ロライマ州のタイアノ、パラー州のモンテ・アレグレ、アマパ州のマザゴン・マタピー等々で直接移入の日本人を一ヶ所に三百戸以上集団させられぬという戦前移住規定を尊重し、幾万人という日本人の導入を考えての深謀であった。しかしこれは戦後派の思想の異った移住会社の人々に

は了解されず、折角の基地も捨て石となってしまった。しかし北米から沢山導入されたＤＤＴとＢＨＣはアマゾン人家近くのアノフェレス・ステゴミア蚊などをほとんど全滅させ「マラリアなき」「黄熱病なき」極楽境となり只迷わず働きさえずれば成功は間違いなき現状なのである。

しかし栄養と腸寄生虫病には充分の関心を持たねばならぬ。

人家の近くのアノフェレス・ステゴミア蚊と申したのはアマゾン河流域のみならず、ゴヤスも東北伯もミナス州も麻州も、サンパウロ州、パラナ州の海岸地帯も又サンタカタリーナ、南大河州の海岸地帯ウルガイ河平原にはマラリアも又時には黄熱病も出没するのであって完全な文化の光は及んでいないのである人家の多い部落は大部分がＤＤＴとＢＨＣのおかげで蚊のいないバルベイロのいない又其他の有害昆虫のいない部落として安心して働け又旅行出来る今日である。

我々援協の奥地巡回班もこれ等の避地二戸三戸散在している同胞を訪ねそれと同時に現地人にも衛生知識の向上をはかる様診察、シネマ・スライドの映写講演、書籍雑誌の分配、座談会大小便、血液の検査、レントゲン検査等々を年一回は必ず行いたいと着々準備中である。

（同仁会、援協医師）

地方診療の思い出

江刺家　勝

『サンパウロ市、ヴィラ・マリアナ区サンタ・クルース街の日本病院が、幾多の迂余曲折があって、日系人コロニアの手と離れ……』と邦字新聞に載る様になった昨今でも、その入口玄関に、一九三六年訪伯の島崎藤村翁執筆の大和古代和歌四首を表に、裏面には、一九〇八年笠戸丸乗組の第一回渡伯移住者三十周年生存者名を記した、日本人コロニア建設、日本病院落成式記念碑が陽光を浴びています。

記念碑建設から丁度三十年碑に氏名を残された笠戸丸組、又病院建設に尽力された方々も既に、故人になられて、夫々現存者が減りつつあります。

今後三十年経ったら、この記念碑の存在は如何様なものになるでしょうか？

×　×　×

一九三五年同仁会夜間診療所の受付に就職した頃、友人の法華君、溝都君から

『変な仕事に就いたナア、厭な事が多いじゃろうに、苦労するぜ、薮共の下で、マァ薮守じゃナ、オイ、薮守！！　』

『ウン、暫くやって、その中気に入った所が見付かったら、又元に戻るさ』

『そうだナ、四、五年サンパウロにいて見るのもよかろうよ』

爾来、夫々こそ迂余曲折。遂に三十三年の薮守り生活。

衛生技手見習で、大正小学校を主に、市内や、近郊の日本人集団地、

日語学校児童たちを日曜毎に、細江ドクターの指示に従い、ドクターの健康診査の助手並に、腸内寄生虫検査を受持ち、セントラル線、パウリスタ線、ソロカバナ線、北パラナのトレス・バーラス移住地等々追々に主導ドクターは代っても、助手は腕磨きのために、サンパウロ州各線にお伴して歩きました。

手近なサン・ジョアキン街の大正小学校は、三、四年細江ドクターの下で、更らに鎌田博士の検診の助手並びに検便を行ない、当初、第一年目は、腸内寄生虫卵陽性率六十％（十二指腸虫卵が大半で、蛔虫が第二位、鞭虫、矮性条虫少数、勿論、二重、三重寄生虫もあります）も記録され、一、二週間後の日曜日に寄生虫卵陽性児童を集め」学校の先生方と、ドクターの指示に寄らて駆虫剤授与を行ない、年毎に、寄生卵陽生率が減少するのは正直なものでした。

上級生は陰性になって卒業し、新入学生は陽性の多いのも当然の事です。

サン・ベルナルド、リオ・ペケーノ、サント・アンドレー近くのオラトリオ、ヴィラ・ジュケリー、カショエイラ・タイパス。スザノの福博植民地、モジ・ダス・クルーゼスのコクェイラ、カッペイラ。更にジァカレイ等々、今追懐すれば、想出多いものですが、何れも郊外野菜生産地は、七〇％を越す陽性率でしたが、夜間診療所で扱ったのに二才の男児でその頃のサンパウロ中央野菜市場附近に住み十二指腸虫卵陽性というのがあり、びっくりさせられましたが、あの時代の吾々の毎日の生活状態と現在の各地の生活を比べたら雲泥の差ですから、本当に想い出話となって終いました。

実際、鎌田博士のお伴でマリリア市を中心に巡回診療の時は二週間

毎日早々とホテルを出、一、二の邦人集団地、日語学校児童の健診、児童が済んでから一般希望者の診療を受付けると夜が遅くなって、石油、ガソリン燈で照されるので、博士が片手で燈の光をさえぎり乍ら、患者さんと話を交わす有様でしたのに、今では到る所電灯が行き渡り、小生年に一、二度マリリア市を通り過ぎる度に、「あの頃はなア」と想い出を新たにします。

鎌田博士、高橋ドクター、氏原ドクターの帰られた後は小野ドクターが残られ、看護婦さんと三人で十数日の間、毎日々々割当の学校から届けられる材料を検鏡、一月末の暑い毎日、五〇、六〇、八〇と小缶に入った材料を拡げて検査するので、

『身体が臭くなりますわ』と小野ドクターが悲鳴を挙げ、

『マリリア市制十周年が去年盛大に催されたんでしたが、去年来て頂けたら本当によろしかったのに』と日本人会の豊臣発陽さんが残念がっておられました。

マリリア市附近日語学校その他の児童腸内寄生虫卵陽性歩合は集団地によって差があり、四〇から八〇％の陽性率。

病院開院式頃、八木博士に随行、サントス市の日語校三つを検診ジュキア線にとりかかったのは午後汽車を降り、翌日午前中博士の健診中に検便を済ませる様、顕微鏡携帯で、一ヶ所終れば、午後の汽車で次の日語校に向い、一泊づつ、五日、六日毎日雨降りで、ペドローゾでの最後の日ようやく陽の目を拝みサントス市に引き揚げ、ヤレヤレとセルヴェージァ（ビール）のコッポを傾けた時は全く生還った心地。

このジュキア線での検鏡の結果は陽性率九〇から一〇〇％と高率、

それに二重三重感染が非常に多数で、顕微鏡を覗いて第一視野で、もう幾つもの寄生虫卵が見られる始末。汽車の駅近くの道路も毎日の降雨の為カローサの轍の跡が溝深く、道を横ぎるのに苦労しなければならず、集合する学童は皆穿物などでは歩ける筈無く全部裸足が当り前でした。

又農家では、『用便は裏のバナナの所でやって下さい。便所なんか作ったって歩いて行かれやしませんよグァルダ・シューバ（洋傘）は其処にありますよ』成程ご尤もの事、お蔭で、八木博士と二人便所に行った気のしたのは古谷重綱さんのお宅とイタリリーの花城さんのお店位のものでした。

『裸足でばかり歩いている児童達が腸内寄生虫に感染しているのは当然のことですよ』と八木博士が話されました。

小生渡伯の船中、特三同室の再渡航者のAさんが、

『ヨ等（私等）ブラジルに行った二年目にソロカバの河っ辺で米作りしてヨウ、ブラジルの米作りナンカ知らんけど、旧移民さんに聞き聞きやったさ。後から日本から来た連中と一緒にカッチンカッチン蒔いた、蒔いた。面積なんか解りやせんさ。兎に角、蒔けるだけ蒔いて、あとは寝て遊んださ。エエオイ、稲が伸び来て穂が出たら雨期になって毎日雨さ、河の側なもんだからその中、水が増えて来て熟れた穂は水の中だ放棄ってしまうのも勿体ないからカノア（小舟）を借りて来て穂の所だけ鎌で刈ったさ。よく出来たねえ、アルケール二百俵越したと旧移民さん達言ってたよ。』

『刈ったのをランショの外に山と積んで陽の照る日は拡げて乾かすん

だが、何度もやってる中に降雨が続いて、終いに穂から落ちた籾から芽が出て来てよ、まるで網の目の様に根が張って来てどうにもなりゃせん。よう出来たのに売りっこ無しさ、その上さ、皆がマレッタで熱が出て打倒れて酷い目に遭ったよ、だが、次の年は少なくてよかったねえ、米作には河っぷちがいい』

『マレッタって、マラリアのことでしょう？　』

『うん、日本ではマラリア熱って言うよ。イヤ熱が出て頭が痛くてやり切れんよ』

『それでどうしたの』

『アー、キニーネ飲んで寝るだけさ、だけンドよ、アンタ、マレッタのある位の所でなきゃ米は出来んよ』

『と、云うことは、陸稲は駄目なんですか？　』

『ノーン。ブラジルで植える米は皆陸稲だよ。だけんどよ、水が浸いたら陸稲でもよく出来るよ。気持よく出来るよ。

だが、ヨはマレッタは嫌いだから三年目の作採った後すぐサンパウロに出て終ったよ。後の連中はマレッタに罹ったらピンガ呑んでよう。米売って翌年又米作って、土地購ってカフェー植えてソロカバナでやってるよウン』

この様に簡単にマラリアの話の出るブラジルの奥地。これが小生の脳裏に刻まれていたのでしたが、サンパウロ市近郊五年の生活では実際に体験せずに済み、先ず運が好かったのでしょう。夜間診療所ガルボン・ブエノ街時代『同仁』月刊パンフレットが出た二年目かに、北伯アカラ植民地から任期を終えてサンパウロに来られた奥村医学博士が同植民地でのマラリア罹病患者の状況手記を原稿として読まして頂

いた時はその惨状には唯恐れ驚くの他ありませんでした。
サンパウロ州ノロエステ線奥チエテ植民地で既に体験済みの八木博士に随って一九四〇年、リンスを中心に、邦人集団地を巡回した際には毎日、心ゆく迄マラリア患者さん達に接したのでした。
早朝、タクシーで、リンスから二十粁程のT植民地を訪ね、道傍で立話していた人達に、
『同仁会から参りましたが、此処の日本人会長さんにお逢いしに来たんですが』
『私が日本人会長をしております』
『あゝ左様で、同仁会から通知が参っている筈ですが』
『通知は来ていますが、この植民地はリンスにも近く、病人は皆リンスの医者に診て貰いに行き、病気らしい病気もありませんよ』
『まあ折角見えたんだからお茶でも上って休んで行って下さい』
その内に、
『今朝家内が、何か腹痛とかいってましたから、後程一寸診てやって頂けませんか？』
『はア、お一人でも役に立てば、では』
一人宅診して八木博士が戻って来ると、次々と、『私の所にも』と申出があり、午後迄博士の診療が続きました。
帰路車の中で『素人の僕が変ですが、今日、集った人達、皆貧血みたいですね』
『えゝ全部マレッタですよ』と八木博士、後で聞いた話ではまだ満植にならない植民地売出しの呼声は『マレイタ無し』との事でしたから『成る程』と合点致しました。

夫れから三週間、毎日集団地の人数によって、一、二ヶ所、診療用紙に氏名、年齢等を記入し、血圧を計り血液を採って検鏡の材料を造るのが小生の役で、各植民地毎にチャンと世話係りの方々が手分けして仕事の運びを進めて下さいます。

当初、『此所にはマレッタなんかありません』といわれる所ではすぐ小生が杓子とコッポを借りて、手近かの小用に行き蚊のボーフラを二、三十匹捕えて来ると、八木博上が机の上に置いて説明されます。

『この植民地にはマラリアが出ていないそうで非常に結構ですが、この通り、アノフェレスの蚊は沢山いるんです。誰か一人隣りの植民地から種を持って来れば、直ぐ皆に拡がって終いますよ』

『はア、これがマレイタの蚊のボーフラか』

小学校の教室の隅の腰掛の下なんかにはいくらでも蚊がおって、脚を動かすとブーンと何匹でも飛んで出て来ます。時には机の上に据えてあるコッポの中のボーフラが水面で成虫になり殻を脱いで飛び上り、傍の壁に片肢上げて止ります。

『ホラ、此の姿がこの蚊の型です』と、注意をうながすと、

『アッ』と大急ぎで叩き潰します。

平野植民地にも参りましたが、サンパウロ市で以前に友人のＹ君から聞かされた話では、

『俺は平野植民地開発当時にまだモレッケで半ズボンでおったがなア酷いもんだったゾ、何所も彼所もマレッタ患者ばかりで……、家族中熱を出して誰も飯を炊く者はない。皆板の上に莚を敷いて枕を並べて寝てるだけさ。

その中で、弱ったのが死んでしまうさ、他の者は飯食わないで熱出

してるから仕様ないさ。
村の係りが時々巡って来て『死んだのは仕方ないから家の外に出せ。運んでって墓場に埋めてやるから』って訳よ。枕を並べて何時迄も置く訳にいかんから、横の窓から押出すのがヤットさ、熱の下りた合間に米を炊いて、ガルネ・セッカ（乾肉）の生を噛って行けた者が生き残った様な按配さ、酷かったナア。
平野運平さんと云う人は強かったナア。俺は半ズボンをはいていつもピンガ買いに行かされたよ、ガラフォン（瓶）をさげて二ミルレースの銀貨持ってボテコ（雑貨屋）に毎日行ったよう。
俺か。俺はマレッタには罹らなかったよ。』
小生の渡伯間も無くから知合ったY君は一九一六年着伯の旧い先輩で、喜んで其の昔語りを聞いたものです。
其の平野植民地に続いての日会長はリンス市の宿迄お迎えに見え、『私等の所はマレッタは無いと思うんですが、念の為片っ端からマットを倒して蚊の居る所を無くしてやろうと思ってますよ。アハハ、、』
植民地に着いて見ると全く見渡す限りの土地、何所にもマットらしい物は見えません。
勿論検査をして見るとマラリアに冒されている人が沢山いましたが或期間経過したら健康地と呼ばれる様になるだろうと思われました。
経験があり、それに対処する意志の強さが好結果を招くでしょう。
『此の診察旅行での採血標本一千人分位のを、染色、検鏡迄僕一人にさして頂けませんか知ら。採血から仕上げ迄自分で続けたら吃度いい結果が出来ると思いますが』と八木博士にお願いして見たんでした

が、

『さあ。貴君が全部仕上げたら、夫はいい研究結果が出るでしょうがネ。貴君には此の後の巡回の仕事もあるし、これに掛切りには同仁会でさして呉れないでしょうよ』

斯様な問答のあった後サンパウロ市の自宅で思い掛けない妻の発病があり再参の遠距離電話で呼戻され残部の続行はリンスの今田先生のお計らいにお願いしてサンパウロに帰りました。

病妻の処置に一期間過して一日、ラボラトリオを覗いて見たら、医大の学生三、四人が染色検鏡しており、

『之、貴方の採血したのですか。沢山ありますね』

『丁寧に見て下さいよ。一枚一枚が一人一人の材料ですからネ』

『でも、沢山あり過ぎますよ』

矢張り小生一人で仕上げる訳には行きませんで残念でした。

是等巡回診療で訪問した三十年前の近郊の邦人各植民地の農家の大半は、正直言って八、九十％は丸木柱に細木、割竹を編んだ泥壁にサッペの屋根が葺いてあったもので、家の内は土間煤けた天井にガソリンや石油の洋燈が懸っておれば上等。カンテラ、瓶テラが多く見られたのでしたが、此所三、四年県人会の仕事で久し振りに各線を同県出身者を拾って尋ねて歩きますと、大慨煉瓦積の瓦葺きに硝子窓。台所にはガスコンロは勿論電気の来ない所でも石油冷蔵庫があり、さては自家発電で鶏舎にも点灯してる有様。

『メイア・アロース一俵十五ミル・レイス、二俵あれば一ケ月ある。ローソク一本二百レース。瓶テラ二つも三つも何するか。

陽の出刻に起きてかまどの火でカフェ飲んで、夕方は淡陽でジャン

タを済し日向水で身体を拭いて寝てしまえばグッスリ眠れる。何が新聞だ、雑誌だ』

と云った四、五十年前の創生期とは打って代って到る所の棚に少年少女雑誌、婦人雑誌がキチンと並んでいます。

生活の改善が文化の進歩と百姓上りの小生が日頃思っているのが如実に顕れて来ています。

マットを皆焼いて了ってブラジルらしさが無くなった等を淋しい気持もするが、お蔭でアノフェレス蚊の棲場が絶やされ、湿地はあってもマラリアの心配無しに農牧に励む事が出来る様になったと云えるでしょう。

戦前の腸内寄生虫保持率やマラリア感染の統計書が今尚あって発表されれば、現在の援協巡回診療班の業績と比較し、今後何年か是を継続した際在伯邦人間の衛生状態の向上は撞目する程の成果として表れる事は疑う余地のない事なのですが、戦時中同仁会解散の際書類整理で其の後の様子を知り得ません。

尚戦時中、日本字計り刻まれた前記笠戸丸記念碑は、台石から取り外され空サッコに包まれて三年間地下室に置かれた事があり、日本病院が事実コロニアの手を離れたとなれば、何時か台石まで所在を失うことになる恐れありと言わざるを得ない、と諸賢の御一考をお願い致します。

（日本病院勤務）

戦前戦後の陸上競技

原　源造

『かさと丸から六十年』誌に、コロニア陸上競技の事を書くように、との事でしたが、私は戦前の事については、ただ選手として出場したのが第四回大会で、それ以前のことについては知りません。

幸い只野凡児氏の書かれた『故安養寺顕三君と第一回全伯陸上競技大会』の一文があるので、その一節を転載させてもらって、第一回大会の模様をお伝え致します。

『ブラジルに陸上競技を普及したのは安養寺顕三君だ（茲に出て来る人名は、全部陸競に対して深い理解のある人達であるから敬称を附すべきであるが、繁雑になるため全部略す御了承を乞う。）

安養寺に対しては、彼を記念する意味で、安養寺カップを是非制定したいと思う。それ程吾がコロニアの陸競に対しては、功績の多い男なのだ。

在伯邦人最初の陸上競技大会を開いたのも、安養寺であり、（これはプロミッソン上塚植民地入植十周年を記念しての汎ノロエステ第一回大会）全伯邦人陸上競技大会を開いたのも安養寺である。

その当時サンパウロ市には陸上競技をやる者は十人位であった。この人達を説いて全伯陸上競技大会をやろうといったのであるが、その頃の邦人経済状態では果して参加するだけの費用が各線で負担出来るか？　が第一の疑問であった。

それで万一各線からの参加のない場合は、聖市対コチア両チームの

試合になるかも知れない。然し、全伯大会をやらなければ、何時迄たっても、邦人の陸競に対する関心、と向上はないから、万難を排してもやろうという悲壮な意気込みでやったのである。

そして聖市の有力者を説いて、資金を集め、又一方誰がなんといっても貸して呉れなかった、パウリスターノ・クラブを借り出したのである。

安養寺の外交手腕は、大したもので、ポ語もロクに話せないのに、あの運動場を借り出してくれたのである。

そして、賞品はオリンピック並に大きなメダルを各種目三等迄に出しカップも相当以上集めた。各地方への招待状も彼の手に依ってなされ、試合運行方法から、プログラム迄、大会に関する限り、一切一人でやって呉れた。

吾々ほ唯雑用の御手伝い位のもので、今考えてみても、安養寺の偉大さと努力に感謝したい。

それに、其の当時としては、誰も青年の為、など考えずに、自分の事業にのみ、没頭していた邦人社会で蜂谷専一氏は自ら大会の初代会長をつとめて呉れ、且つ経済的にも相当以上の援助をして呉れた。又海興におった東条一美氏もこの大会開催については、縁の下の力もちをやってくれて、安養寺に縦横無尽の活躍をさせたものである。

そして遂に、その当時では、誰も想像しなかった、第一回全伯陸上競技大会を天長の佳節を卜して、絢爛にも華やかに、南米第一を誇る、パウリスターノ・クラブ・グランドで全伯邦人各線の選手を網羅して開催されたのである（以下略）』

その後一九三三年には、大島、福井、大江、藤枝、住吉選手等の日

本選手団を迎えて、日伯対抗競技大会が、同じパウリスタ競技場で行なわれ、又コロニアからは紀元二千六百年に井上監督外四選手を日本に送り日伯親善の役を果しました。

一九三二年は革命のために休み、一九四一年まで、第十回大会を最後に、第二次世界大戦に突入した為、大会開催が不可能となり、戦後全伯大会が復活したのが一九四七年です。すでに御存じの事と思いますが、当時の邦人社会は、戦争に日本が勝った、負けた、で大さわざをしておった頃で、果ては殺人問題まで引き起し、一部の人々を震え上らせておった時であり、我々も何処へ行く処も無いまま、チエテ・クラブの競技場で棒高の練習をしながら、この現状を見りめ、なんとか解決の方法が無いものかと種々話し合った結果、これは戦時中、戦後を通じて押さえつけられた若人の熱情が爆発したものでこの有り余る力を陸上競技に向けたら、こうしたことを解決するのではないかと思い、 それには戦前行なわれて来た全伯邦人陸上競技大会を復活することであり、実現について話し合って来たのが、同じ棒高跳選手の河野君（故人）と大串君と私の三人でした。

そして、すでに一九四六年には第一回大会を開く準備を始めたのですが、私のイグアッペ転勤（当時破魔商会勤務）で話が中断され、それから半年後にサンパウロ市に帰って、再びこの計画が持ち上がり、当時の州の体育局長パジーリア氏にこの話をし、大会開催の許可をもらう為に峯氏と二人で行って種々話したところ(当時外国人の集合は一切禁じられていた頃でありましたが)

『貴任は私が持つ、そのかわり臣道連盟だけにはなるなよ』

と肩をたたかれて別れた事は今だに、忘れる事は出来ません。

こうして許可は下りたものの、戦前の参考書類は全部焼かれて何一つなく、記録を探し出すだけでも、一ケ月余りかかる仕末。

そして毎晩々々十二時、一時頃迄準備をし、そして選手である、河野、大串君等はその暇々に練習をしなければならず、随分重労働でした。

それに大会開催についての条件として第一に他人に頼らず、まず自分の力で起ち上るべきだ。経費はプログラムの広告代と入場料で賄なう事とし、第二に戦争の勝ち負けには、一切関係しない事、として準備を進め、当時は領事館もなく、そのかわりに開かれた在外事務所の初代所長だった野崎さんに優勝カップを御願いに行ったところ、吾々の計画に大いに賛成されて、サンパウロで一番大きなカップを、ということで、一米近くもある立派な大カップを寄贈して頂いた事は感激でした。

これに気をよくして、同じやるなら大きな事をと、入場式には今迄なかった州警兵の軍楽隊と交渉し、快諾を得て、この軍楽隊を先頭にして華やかな入場式を行ない、主催者も選手も、観衆も戦後第一回大会を飾るにふさわしいこの入場式に唯々感激あるのみでした。

この第一回大会の参加チームは、サンパウロ、ノロエステ、マリリア、バストス、南聖、ゴヤス、パラナの七チームで、選手三百余名、観衆もチエテのグランドを取り囲み、立錐の余地もないまでの人で埋ってしまい予期以上の大成功に終了しました。

其後毎年一回開催されて今年で戦後二十三回目の大会を挙行したのですが、州陸連でもこの邦人全伯大会を非常に高く評価しています。

そしてこの青年の全伯大会についで次代を背負う少年選手の育成を

主として始めたのがパジーリア杯争奪戦です。

これは、少年、少女、壮年を一単位としたもので、バストス、サンパウロ、パラナ、ノロエステの四チーム参加のもとにその第一回大会を一九四八年に行ない、幾多の優秀選手を青年大会に送る様になったのですが、費用その他の問題で、遂に青年の全伯大会に合併して行なわれる様になって来たのです。

こうして、コロニアの陸上競技界も一応体勢も整い、これからの大会の刺戟によって、数多くの選手がブラジル陸上界の為に活躍する様になり、又険悪であったコロニア社会も再び朗らかさを取り戻した観がありその後各種のスポーツが催される様になった事を思うとき、当時或種の反対もありましたが、戦後復活されたこの全伯邦人陸上大会も決して無意味ではなかったと思っています　又パジーリア杯が姿を消した後、これに代わる大会として、学童の年齢別陸上大会が、すでに十六年前から、サント・アマーロ連日会の主催で同地区の大会が始められ、続いて聖南地区でも、同じく年齢別大会が行なわれ、次々と各地方にこの種大会が催される様になり、当然地区対抗試合も行なわれ、最初三部対抗試合だったものが、最近では十以上の地区でこの種大会が催される様になり、やがて全伯的な大会が行なわれることになると思います。

最初この種の全伯大会をと、思ったのですが、それには先ず地元から盛り上げなければと、始めたのが今日順当な発展を遂げつつあることは真に嬉ばしいかぎりです。

然しコロニアの陸上界も、これまで必ずしも順調な歩みばかりではありません。戦後第二回目の大会に起った選手出場停止問題があり、

これがもととなって全伯大会が二つ行なわれた時もありましたが指導者等の理解と協力によって、再び一本化して行なわれる様になりました。

こうした事の原因は種々あると思いますが、主催団体が正式登録していなかったところに大きな欠陥があったので、これを正式登録しなければとの気運が盛り上がり（これまでは、サンパウロ市内、及び近郊を含めたサンパウロ近郊連盟が主催して来た）丁度その頃ピネイロスにある大正小学校ピネイロス分校が戦時中、菅山氏の名儀となって継承されて来ましたが、戦争も一応終り同氏も年寄りであり、いつどのような事が起るかも知れないので、今の内に公の団体に譲りたい、それには今、全伯的に連絡のある陸上団体に譲りたいので引き受けて欲しいとの要望が会計の稲垣氏、小川氏立会いのもとで、菅山氏より依頼を受けたので、当時陸上の選手でもあり、予備校を開いていた山本氏と計り、陸上選手と学生とを交えて文化体育クラブとして登録することとして、菅山氏等の申出をよろこんで引受ける事にし、ピネイロスのヴァレーリオ・デ・カルバーリォ街にある土地、会館、それに登録費までつけてもらい受けて生れたのが現在のピラチニンガ文化体育協会です。以来全伯邦人陸上大会はピラチニンガ協会主催のもとに今日まで続けられております　その間、一九五〇年には日本より南部監督以下沢田、高橋、田島、岡野選手等の一行が来伯しており、ブラジルからは、日本陸連の招待で、三段跳のアデマール選手がコーチのゲルネル氏と共に訪日しており、一九五六年には富山の国体と一九六八年の福井国体に日系選手を送り、富山国体では芥田君が走り巾跳で優勝し、福井国体では、倉田君が走り高跳に、西原君が砲丸投げに、

それぞれ二位に優勝した事は喜びに堪えない次第である。また越年マラソンとして有名なア・ガゼッタ新聞社主催のサン・シルベストレ大会には、多くの外国選手が参加しているが日本選手が参加していない、なんとかして参加出来る様にと、ネリー社長と交渉を始めたのですが、仲々いい返事がしてもらえなかったが、ようやく半年目にそれでは試しに呼んでみようとの事で最初に参加したのが石井、高橋両選手、幸い成績もよく、今後毎年招待することを約してくれたのです。そして今後毎年来る選手等の接待費を寄付に頼ることも出来ない事はないが、それよりもベテラン達が毎月少しづつ積み立てた会費でその費用を出す様にしようと云うことで出来たのがアテ・ア・ビスタ会です。

その後大西選手、井上選手、梅沢選手等の参加がありましたが、種々の事情のため一九五四年を最後に打ち切られたのは残念でした。然し陸上競技を通じて日伯間の親交は深まり民間外交としても大きな功績を残している。

コロニア陸上界も最近伸び悩みの状態で、記録的に非常に底調であり往時の面影はうすれてしまった感じであり、その原因をつきとめ、いかにして今後記録の向上を計ることが出来るかが、コロニア陸上界に課せられた大きな問題だと思います。

選手も指導者も真険にこの問題を検討し研究して再びブラジル陸上界に日系選手の華々しい活躍を心から望んでこの稿を終ります。

聖州陸上競技連盟理事（技術部担当）

６０年ぶりの故郷

金城盛吉さん
島袋カマさん

ブラジル移民の草分け金城盛吉さん（七四）＝豊見城村饒波＝と島袋カマさん（七六）＝美里村字比屋根＝のふたりが息子、娘、孫をつれ二十二日午後二時十分着の日航機で六十年ぶりに故郷へ帰って来た。金城さんと島袋さんは本土政府から贈られた勲六等瑞宝章を胸に元気よく一歩々々タラップをおり、力強く故郷の地をふみしめた。

タラップのそばには、小波蔵副主席、嘉陽農林局長がふたりを出迎え、副主席の案内で待合室に向かった。途中金城さんは妻のヨシさん（七五）の手をしっかりにぎり、また島袋さんはふたりの息子に両側からささえられながら待合室へ通ずる階段をのぼった。

そこには金城、島袋さんの兄妹をはじめ親類や部落民約三百人とテレビ録画をとるための報道陣が待機していた。ふたりの姿があらわれると歓迎陣やそこにいた本土観光団の間からもわれるような拍手がわきあがり長い間まちわびていた肉親との感激の再会がおこなわれた。

金城さんは妹の比嘉カマドさん（七二）、長嶺ヨシさん（六八）金城ウシさん（六四）、金城カナさん（六二）ら二人を両脇にかかえるようにして「元気だったか」といいながらあとは言葉にならず泣きくずれた。そのあと歓迎式がおこなわれ、一行に花束とレイがおくられた。

（沖縄タイムス報道の一部）

かさと丸訪日団が横浜港に着岸するや日本の朝日、毎日、読売、産経、中部等の各新聞、週刊紙は連日に亘って報道し、かさと丸ブームがおきた。

Ⅲ　発展

コロニアは発展する。「かさと」丸の人々は或いは物故し、或いは年老いたが、おびただしい子や孫たちがこの国で生を享けて、明日のコロニアを、そして明日のブラジルを背負うことであろう。

こうして伸びてゆく若い群像は、もはやコロニアの胎盤を離れ、移民という母胎から臍の緒を切って飛びたっていくかも知れない。しかし、コロニアは、そして移住者である親は、日本人として移民として、子供たちの前途に大きな期待をかけている。日本人の衿持を忘れないで欲しい、日本人の持ち味を棄てないで欲しい……。

考えてみると、コロニアこそはこの国の日本人が、日本の文化価値をこの国に伝承できる最良の媒体である。コロニアが如何に変化し変貌しても、「かさと」丸の精神は世代を超えて悠久に生きつづけなければならない。

第一世より当国生れの第二世第三世に望むこと

中澤源一郎

一口にいえば彼等にブラジル人のよい所と日本人のよい所とを採取した人間になってもらい度いという事である。

言語

それについて誰でも一番先に考え付く問題は言語の問題であると思うが二世、三世はポルトゲースがよく出来なければならない事はいう迄もない事であるが、それと共に矢張り日本語も解り喋れる様になってもらいたいと思う。

幼い時に日本語を使っている家庭で育ち其の時分よく日本語で話していても学校に行く様になると、全然日本語を話さなくなる傾向が強いが、之は自然の勢とは云え、誠に淋しい気がする。

此の点大いに努力して日本語を書く事は兎も角としても聞いて解り、自由に話せ、又読む事が出来る位には是非なってもらいと思う。

日本人の顔をしていると日本語が解るものと、一般からも期待される事は当然であり、又社会に出て後も往々にして仕事上交際上日本及日本人関係が多くなると思うが、其の際日本語が解らないと非常に不便でもあり不利益な事も多いと思う。

又日本語が解らなければ二世であれば其の親との、又三世であれば其の祖父母との意志の疎通にも事欠く事が多くなる。

尚其の上に世界語ともいうべき英語位はものにしてもらいたい。

其の点二世はポルトゲースが出来る為に英語をものにする点に於てほ一世とは比較にならない程上達が早い。其の利点を活かして英語を習熟する事は望ましい事である。

専　　門

自分の好きな、又社会の需要の多い専門の学問及至技術を是非一つは身につけてもらい度いが其の為には出来れば大学の課程の一つを修了する事は必要であろう。そうしてそれを一通り修了して外国に留学するとした場合には日本に行ってもらい度いと思う。其の為には国費留学生、県費留学生の制度もあるので一年及至二年日本に行って来る事は比較的経費をかけずに出来る事である。

日本は現在どの方面に於いても相当進んでいるので専門上に於ても得る所があると思うが一、二年で専門の学問を勉強するだけの時間的に余裕がないとすれば、又日本語の力に於ても、それが難かしいとした場合に於ては、一応其の道について視察するなり各地を旅行して日本を知るという事は非常に有益であると思う。

ブラジルを離れてこそブラジルがよく解ると共に、父母、祖父母の生れた日本の国を知るという事は父母、祖父母をよりよく理解する事にもなり将来二世、三世と日本との交流を密にするという点からも望ましい事であると思う。

何といっても血は水よりも濃しであって二世、三世に取って日本語が解り日本の国を知るという事は、色々の意味に於て大いに役立つ事にもなると思う。

高き強い品性を望む

身体を強壮にせねばならない事は申す迄もない事で、其の為にはスポーツの一つ位相当の所迄やってほしいと思うが、夫れと共に正直、勤勉、廉恥心、正義を愛し憐愍の心を有ち義理固い所謂高い意味の社会性を身につけたバックボーンのしっかりした人間になってもらい度いと思う。

こうした品性は日本に於ても段々少くなる傾向であるといわれるが、ブラジル人間に於ても非常に少いようである。然し、こうした品性こそ比較的一般の人が共の重要性に気付かない。

聖書の中にある家を建てる為には是非必要な「隅の親石」で社会の要となる品性であるが、之は儒教に鍛えられ武士道精神の中に養育せられた明治時代の巨人などに往々にして強く現われている品性で、矢張り私はそうした品性に非常な魅力と愛着を感ずる。こうした品性は何も日本の専売特許ではなく外国に於ても優れた品性として尊敬せられ通用する所のものであるがそうした高い意味の日本精神を二世、三世に出来る丈け持ち続けて頃き度いと思う。

そうして余り小さな物質欲や皮相な名声に拘泥する我利我利亡者にならず高い強い品性を自分のものにしてもらい度いものと思う。

結　婚

此の問題は中々デリカードで必ずしも二世、三世が日系人と結婚せよとも云いかねるが矢張り凡てに於て共通的なものを有している日系人同志の結婚の方が望ましいと丈申上げ度い。

農　業

当地方に於ける日系人の特徴の最大なものは、農業上の貢献であり農業に於ける其の成果である。

二世、三世は他の方面にも大いに発展して頂かねばならぬが一般的に云って第一世が築き上げた伯国に於ける農業上の地位はいつ迄も保って頂き度いと思っている。

（日本移民援護協会々長）

祖母より孫の淳（キヨシ）へ

赤間　みち　へ

淳よ。おばあちゃんが、あなたに何かをこれから書く事になりましたのは県人会連合会が、このたび移民六十年を記念して『かさと丸より六十年』という記念号出版物を刊行することになり、それに執筆を依頼されたところからこの一文を認める事になったのです。

私があなたに話すことが、これからだんだん大きくなって十何年、否もっと後になってでも、わかってもらえるかどうか、あやぶまれるのですが、淳よ。…どうか、ブラジルの教育はいうまでもなく、世界の言葉を身につける様心掛けていただきたい。…と同時にその中でもおじいさんやおばあさんの国の言葉は第一に学んでいただきたいのです。……

それは六十年前にこんな遠い国まで、はるばると渡って来た先駆者方の苦労を、そして今のコロニアを築き上げた日本人の足跡や歴史のさまざま、そして意気込みを知ってもらいたいからです……。

戦争が済んで、日本の勝ち負けで争い…日本人の信用が一時地に陥ちた時もありそのため二世の人からも軽蔑の眼を向けられたこともありましたがあの頃の日本人の社会層としては無理なかった様にも思うのです。

農業移民としてこの国に移り来てただひとすじに錦衣帰国のみを夢見て働き続け戦時中などは新聞雑誌も手にすることも出来ず知識的には本当に永い空白でした。

その上未だかって負けた事のない祖国を誇りとして来た移民の上に全くバクダン的敗戦の報を受けたのですからその受けたショックの大きかった事……　その挙句の果ての悲しい事件は、私達にはいつまでも忘れることが出来ません∴……。

でもただあの一面が一世のすべてだと見ずに、あなたのおじいさんやおばあさん級の人方がこの何千哩の遠い国に来て郷愁と戦いながらこのブラジルの産業面に偉大な貢献を成した一因はどこにあるか？その由来を少しでもわかってもらえることをねがいつつ……、この一文を綴ることにしたのです。決してあなたをめぐる二、三世方に恩を売るつもりのないことだけを理解して下さい。

さて今から三十八年前、三十数日余の船旅を終えて昭和五年三月三日に私達一行はサントンの港に到着しました。それから一切の荷物検査が済んで移民列車に乗せられて当時の移民収容所に送られたのです。

その日は丁度、カルナバルだ、というのでサンパウロに住んでる知人の案内で町に出て見ました。今頃はそれ程でもなくなりましたが当時の賑かなこと……まるできちがいの様に踊りくるってる黒人を見てどぎもを抜かれました。迷い子になっては大変だ、と汗を流しながら一生懸命におぢいさんにすがって歩きました。

西も東もわからない国、あなたのお父さんをお腹に抱いていた私は、足のむくみで歩くことも不自由なあわれな姿だったのです。……

さて一週間の収容所生活を終えて又ポルカリアの移民列車でカフェランジアの駅まで送られそこから又カミニォンで、その奥のセルボンという小さいブラジル人経営の耕地に行くことになりました。

デコボコの道を土煙をあげて、ガタガタと走るカミニョンの上で私は必死になってお腹をかかえていました。そして夕暗せまる頃ボロ切れの様に、へとへとに疲れ果てて目的の地についたのですが、その時出されたジャンタルはフェジョン御飯の上に、カルネセッカをのせた一枚の瀬戸引きのプラットを渡されました。…臨月をかかえたおばあちゃんはプーンとにおうその御飯がどうして咽喉を通りましょうか。…ボロボロと涙をこぼし乍らそれでもやっと二口、三口押し込みました。

レンガでもない土間に荷物を重ね、その合間にエンセラードを敷いて横になって寝たその晩は『なんの因果でこんな国に来てしまったか、あー取返しのつかない事になってしまった』と悔みつつほとんど一睡もせずに夜を明かした事も忘れられない苦しい思い出です。翌日、おぢいちゃん方は山に行って木を切って来てパトロンから渡された板で早速カーマを作り、コルションなしに布団を敷いて寝たものの

背中が痛くて馴れるまでは転々と寝返りばかりしていました。
妊娠中の栄養の点など心得ていたものの茫漠たるカフェザールの一端で原住民に等しい生活の中に放り出された故野菜もなければ勿論生肉など求め様もありませんでした。それでも働く人達の事を思って私は毎日あてもなく野生のトマトでもないかピコンでもよいが、とカフェザールの中を歩きまわりました。
こんな事では満足な子供が生れるだろうか、と毎日不安にかられ乍らその日を迎えたのですが案にたがえてしかも丈夫な、あなたのお父さんが日系ブラジル人として誕生したのです。
石油箱に足をつけミーリョの皮で布団を作りその上に綿の布団を敷いてそこにあなたのお父さんを寝かした時私は「わっ」と泣出してしまいました。『キリストは馬小屋で生れたのだぞ。こんな事でなんで泣くか…』と、あなたのおぢいちゃんに叱られました。
自分だけが不幸で、あわれで、他の人達がみんな幸せなのに…と自分だけの不幸をかこっていたのでした。
でもあの頃の移民といったらやはり私たち以上にみじめだったかも知れません。
焼けつく様な炎天の下で流れる汗をしぼりつつ一獲千金を夢見る人々の毎日の働きは想像以上の厳しいものだったのです。
早く行き度い南米のブラジルに
黄金の花咲く五万町
ちょっと理想は低いが
大地主コッチャエ　コッチャエ
船の中で声高らかに歌いまくって来た人々とここに着いてからの厳

しい現実に打ちひしがれて脱耕する老又夜逃げして行った人がいた翌朝など大騒ぎを演ずる有様でした。

『鐘が鳴ります耕地の鐘が』と、この頃生れたブラジルの歌を二世方は何も知らずに楽しそうに唄っていますがあの頃は先ず五時の起き鐘で「ヤッコラサ」と起こされ、ランプの光でアルモッソの仕度をし、次は朝のカフェーを作っているうちに六時の鐘をジャンジャンたたかれ、それにつれてぞろぞろとカフェザールに追いやられる毎日だったのです。こうした中でも三年契約五年契約をとそれぞれ退耕して少しづつでも、この国に生きて行くめどをつかんでみんな離れて行きましたが、その人達は今では、全く驚くべき立派な生活をして子供たちはそれぞれ一人前になってブラジルの為に何かのお役に立って仕事に精を出しておられる様です。

これこそ裸一貫で今日を築いた人達です。石油箱で育てられたあなたのお父さんも、大学を卒業しやはり大学を卒えたあなたのお母さんと結婚してあなたが生れました。

州立病院で至れりつくせりのみとりを得て退院した時あなたのお室として定められた室の真ん中には目もまばゆい様な美しいベットがそなえられ、そこで、このおばあちゃんをはじめみんなから最大の祝福を受けたこと。石油箱のベットにねかされ見舞って下さる方もなかった、あなたのお父さんに比べて、あなたは、なんと幸せな生れつきだろうと思いました。

今頃の若い人々はなんの不自由もなく、幸せそのものの様な境遇にあっても尚あきたらず不平ばかりのべているのを知っています。

あの頃の長男や長女の方々は親の犠牲になって働かされ、ろくな教

育も受けさせられなかった様でしたが、それでも親の心をよく理解している様に思うのは、親と苦労を共にして来たからではないでしょうか。

その頃あえて教育させられた方々の中から、デプタードやベレアドールをはじめ沢山のドトール級が輩出されました。こうした方々こそ淳たちの師として真に尊敬出来る方々だと思います。

凡そ人間として一番幸せなことはぜいたくな暮しではありません。良き両親を持ち、良き師を得、良き友を得て、良書に親しむことの出来るセンスを持つことの出来る人だと思います。

その点あなたは良きパパ、ママを持って毎日を合理的に育てられています、なんと幸せなことでしょう。成長してからの幸はあなた自身で克ち取らなければなりません。

そしてあなた方に、のぞんでいる事は、おばあちゃん達の出来なかった事をあなた方の頭と腕で仕上げていただきたいのです。何故なら四十年、五十年とこの国に住んでいながら一世の人方はブラジル語をマスター出来ませんでした。このおばあちゃんもその中の一人。

そのためどれだけコンプレックスを感じて来たことか、何故ママイ達はブラジル語を勉強しなかったか、と責められますがその頃は働くことと、そして一日も早く日本に帰りたい。それが日本人の、大かたの夢ではなかったでしょうか。それに、日本の家族制度のおかげで日本人は個人的に誠に弱い性格を持ち合せています。だから邦人の集団地に何時の間にやら引寄せられその為めブラジル語は何時までたっても覚えられずその様な境遇を作ってしまいました。

「ブラジルに来て後悔することは何か」と問われたら『ブラジル語

の勉強を怠たったことだ』と私は答えるでありましょう…あなた方もおばあちゃんの様な後悔がない様に大きくなったら勉強の好きな人になっていただき度い、それを祈っています勉強といってもその読み書きだけではありません。又机の上だけでは人の心も世の中のこともわかりません。

まず心身の全部を働かしてそこかから自分の棲んでいる今の世の中のあらゆる社会層、人間層をさぐり当てることです。その勇気を持っていただきたいのです。自分のこと、或は家族だけの幸せだけにとどまっていたのでは本当の人間としてのよろこびをつかむ事は出来ません。

あなたはまだ生れて一年と七ケ月にしかなっていませんが最早や個性のひらめきが著しのです。将来どの様に育っていくか？　親馬鹿という言葉がありますが祖母馬鹿になりつつある、ということは、あなたの一挙一動作に馬鹿の様によろこんだり心配したりしていますこれも肉身なるが故でしょうね。

ブラジルには今六十万のコロニア人がいます。昨今皇太子御夫妻の御来伯の時のあの人出、さすがは、と驚き且つ誇りをさえ覚えました。さてこの人方の何パーセントが錦衣帰国されたのでしょうか。おそらく夢を抱いたまま、この土となった人が多く、又なりつつあります。あなたのおぢいさんも二十数年前にブラジルの土となってしまいました。

これが移民の宿命とでも申しましょうか。そこで重ねてあなた方にのぞむこと、それはいくらブラジルの国籍を持つあなた方でも日本人の顔をしている日系人である事は消すことの出来ない宿命的なもので

す。この生れつきを誇りあるものとするか或いはコンプレックスを抱くままで終らせるか、それは一にあなた方の今後の努力にまつより外ありません。

ブラジルは各国人によって国が成り立っています。あなた方もその中の一員として国家興隆の上に一役を担うことになるわけですがどうか各国系のブラジル人を凌ぐ程の人間となっていただき度い。人生の旅路は決して生やさしいものではなく永い暮しの中には思いもかけぬ災厄に逢うこともありましょうが、そんな時は神の存在を意識におき強く立上る事です。それにはまず健康を第一にして少々の悩みや苦しみがやって来てもおばあちゃん達の辿って来た足跡に思いを寄せそれ等を吹きとばす意気を創り上げて下さい。そして移民の孫としての特徴を立派に表わしてブラジル文化の発展に大いに寄与していただき度いそれをお願いしてペンを措くことに致します。ではあなた方の寿くやかな成長を祈りつつ。さようなら

一九六八年　　祖母より　私の愛する孫の淳へ

（赤間女学院々長）

敬愛するおじいさんへ

山　添　良　一

笠戸丸でおぢいさんが此のブラジルに渡って来られてから今年で六

十一年になります。

ぼくはその孫の一人としておぢいさんに宛てて書くようにと選ばれたことを大変光栄と感じております。

しかし、何を書いてよいのやら分りません。何か書くことがいっぱいあるような気もしますし、又何もないような気がします。とにかく取りとめのないことになるかも知れませんがお許し下さい。

先日、ぼくは妻の大伯父に当たるＩ商会の社長に夕食に招かれて御馳走になりに行きました。社長は中心街のビルの十七階に住んでおります。小さいアパートを二つぶち抜いたというのですが、間取りのゆったりしたアパートはいかにも落ち着いた感じで大きい窓からはサンパウロ市が半分見られるとのことです。なるほど、眼下には中心街、少し右寄りにはアクリマソンそしてその向うにはイピランガ、そしてモッカ、ペンニァ、サンターナの一画がのぞめる、とにかくかっこうの場所なのですやがて日が暮れますと、ダイヤをちりばめたように電気がともり、サンパウロの大きいことに改めてびっくりしました。

社長は孫もあり、七十才を越える年なのですが、今でも自分で自動車を運転して五百キロもある奥地の店とサンパウロを月に二、三回往復するとのことです。つまり日本的な隠居など毛頭考えていない様子なのです。

以前病気になる迄は毎月一回必らずその五百キロの道を往復したということです。

一九二一年、此の大伯父がサンパウロに着いた時にはまだほんとの田舎町だったそうです、もっとも今でも大きくはなったけれども、田

舎町であることに変りありませんが、その頃、近郊に入ってバタタをブーロの背につんで三十キロの山道を運び出しても商人に安く買いたたかれるので、百姓がいやになるとともに百姓の弱さをむざむざと見せつけられた。それで、なんとか早く組合を作って結束し、自分達相互の利益を守らなければならないことを身にしみて感じたそうです。

日本人が作った組合がこれまで発展したのも、また農業組合といえば日本人という位、日系の組合がのびてきたのも、やはりこういう体験をした人達が多くいたからだろうと思います。

世界で首位を争うくらいに発展した大都会サンパウロを見下すサロンで社長の思い出ばなしはまだ続きます。

一九二六年、バタタ作りを切り上げて大伯父は現在本店を構えている町で自分の親類に任せていたためつぶれかけた雑貨店を再興するとともに、自動車の代理店をはじめて、又、その地方では初めてのガソリン・ポストを据え付け、それが大いに当っているところに一九三〇年代の不況に見舞われ、それからようやく立ち直る間もなく、護憲革命が起り売物にしていた新しい自動車を全部徴発され、大損をしたと話しておりました。

そして、事業がいよいよ軌道にのろうという時に第二次大戦で日本人は店の経営ができなくなり、綿と薄荷と米作りに転じたところ、薄荷の値段がキロ三百クルゼイロスから六十クルゼイロスへとガタ落ちしたため百二十アルケールの薄荷で相当な損害をこうむったのですが、綿や米の作の値が良かったので辛うじて助かったということです。

順調に、何一つ障害のない道を歩んできたと思われるＩ面会でさ

え、こんな歴史をもっているのです。これは成功した例ですから、いくらか自慢めいていても、気の毒にはなりません。
反対のケースはまだいくらでもあるでしょう。ぼくは田舎で育ちましたので、このような話を聞いてもまだ面白いと思います近頃の子供等は年寄りの話は昔話ばかりだから聞いてくれないと年寄がなげくという話を耳にすることがあります。

もちろん、昔話にばかり頼る後向きの姿勢、または自分の親達がどのような過程で今日をきずいたか、ということに無関心なのもどうかと思います。

年寄にして見れば、今このようにして落ち着いた生活のかげには自分達のこのような苦労があったという話をしておきたいのは山々でしょうし、孫はまた孫で、そんな話にはそれ程興味がない上、日本語でくどくどと話されても、既にブラジル語の方が日常語になっているのでつい面倒くさくなって、又年寄が訳の分らんことを言い出したわい、とつい好いかげんに聞き流している。ぼくには、そのどちらの気特も分るような気がします。

今、盛んに、コンフリット・デ・ジェラソンエス、世代間の相剋とでもいいますか。問題になっているようです。同じ言葉を話し、同じ顔をした社会の中にでて世代間の相剋が起っているのですから、ましてやブラジルのように、家の中では日本語（現在大部分はもうポルトゲースでしょうが）一歩外に出ればブラジル語というところでは親子の間の対話が難しくなるのは
やむを得ないでしょう。また日本語の習得もだんだん難しくなるばかりでしょう。しかし、このようなハンディ・キャップがあるにもかか

わらず、コロニアにおける世代間の相剋は少ないのではないかと思います。

おぢいさん、あなたはその子孫に教育と信用という二つの貴重な遺産をのこして下さいました。もちろんお金でも相当のこしていただきましたが、お金は使ってしまえばそれで終りです

そのおかげで子孫はどしどしブラジルの社会で重要な地位を占めております。おそらく、後数年もすると、日系人はあらゆる重要な分野に入り込んで、一つの階級をきずいていくのではないか、と思われます。

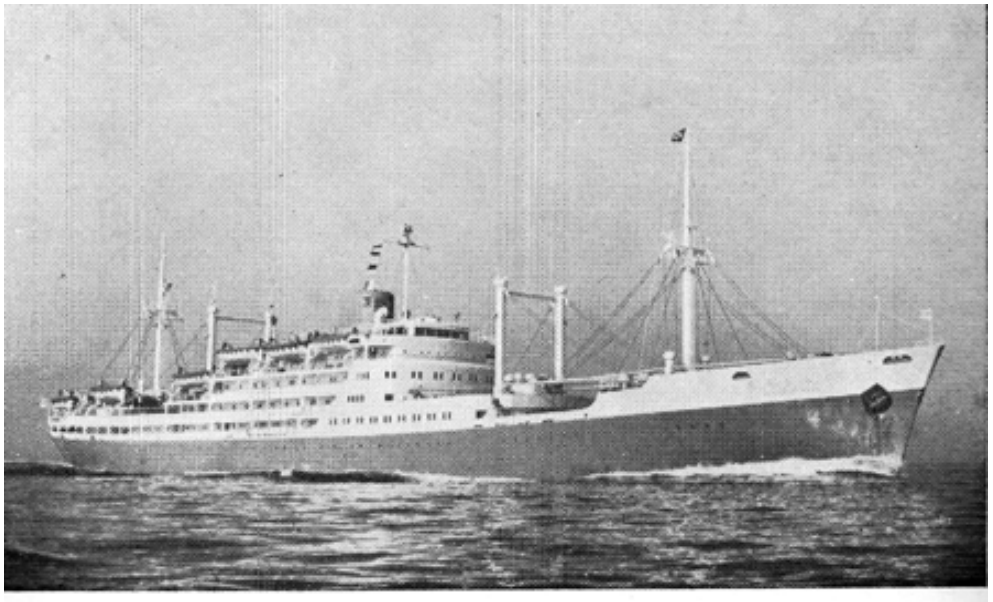
しかし、その反面、おぢいさんは御存知かとも思いますが、近頃日系のカベルード族、日本語でいえば長髪族が大分ふえてきております。石器時代の人間のような、ケッタイな頭をした人達です。時代の先端をいくつもりでのばしているのでしょうが、果して頭の中味はどうなのでしょうか。

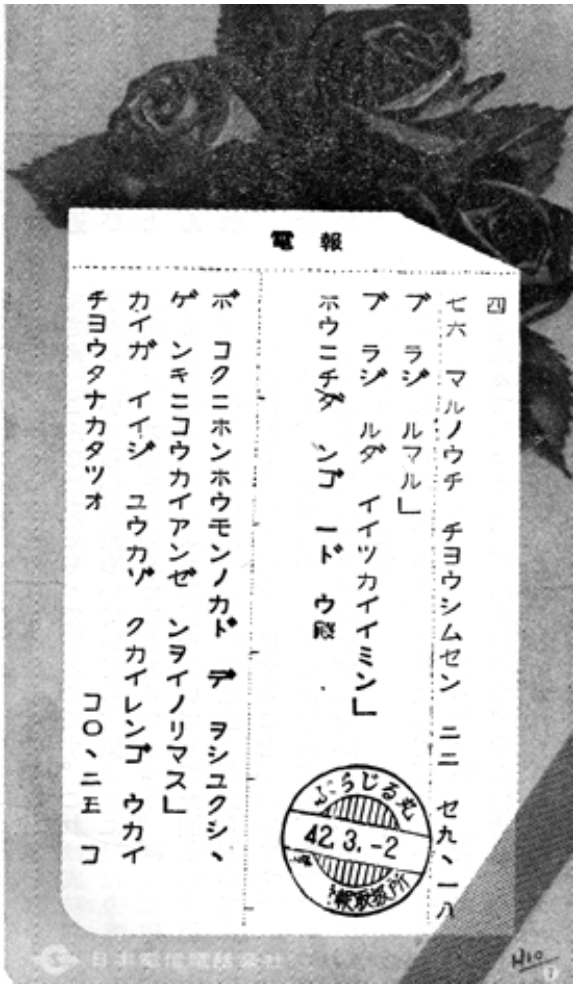
さて此所でおぢいさんに望むことを書いてしめくくりしたいと思います。早く財産や事業、または文化協会のようなものを次の世代にバトン・タッチしなければ、という人があります。しかし、こういったのは自然な形で次の世代に移るもので、無理に渡すものではないと思います。又、おいそれと渡さないのが人情でしょう。

ただ、長生きをして、自分の子孫がのびていく姿をいつまでも見守っていただくようにお願いします。

（南伯産業組合広報部長）

Ⅳ『かさと丸』日本へかえる





電報

四
七六 マルノウチ チヨウシムセン ニニ セ九、一八
ブラジ ルマル」
ブラジ ルダ イイツカイイミン」
ホウニチダ ンゴ ードウ殿

ボ コクニホンホウモンノカド デ ヨシユクシ、
ゲ ンキニコウカイアンゼ ンヨイノリマス」
カイガ イイジ ユウカゾ クカイレンゴ ウカイ
チヨウタナカタツオ コ〇、ニ五 コ

ふらじるぜ
42. 3. -2
横浜郵便局

在伯県連と共に

移住者援護の使命観

藤　川　辰　雄

「あっ…サクラの花だ……」と絶叫する老人の声が耳をつんざく。その日、昭和四十二年四月十二日午後一時頃、その朝ぶらじる丸で横浜港に到着したブラジル第一回移民の皆さんを乗せたバスが、東京に向けて横浜市郊外を走る車内のできごとである。

思えば、この人たちは、日本に帰ることを唯一の念願としてブラジルに風雪六十年……日本へ上陸第一歩にみた〝日本のサクラ〟……その胸中をしのび、接待役の私はいくたびか目がしらをおさえ、感激をわかち合うことができた。

そして、この歓迎事業が本会（日本海外移住家族会連合会）と在伯県人会連合会との緊密な連合作戦の成果であることの意義をかみしめてみる。

つまり、従来の送りっぱなしの移住事業に対し、移住者団体と移住家族団体とが提携すれば、どんな困難な問題でも解決できるという自信をつけたはじめての仕事であった。

しかもまた、その歓迎業務を通じてやみがたい移住者援護の使命感を自らにいいきかせる機会でもあった。

県人会活動の必要性

田中竜夫会長のお伴をして昭和四十年九月南米視察をしたとき、サンパウロ市において

「在伯県人会連合会」の結成を強く要請した。ところが意外にも「今さら県人会でもあるまいとする考え方が、旧移住者間にあるから県人会活動も消極的である」との声をきいた。

さらに帰国して在伯県連との提携において事業を進めるとき「移住してまで県人会などというのは島国根性だ」との批判論もきいた。

移住ということがブラジル社会にとけこむ前提において「今さら県人会意識でもあるまい」こともうなずける。しかし日系コロニア問題解決のために組織が必要という立場において「日本はどこの出身ですか、私も山口県出身でして……」ということで、初対面からうちとけることが出来る人間感情にむすびつく組織がもっとも自然的であることも否定できない。この自然的な県人会組織を通じて移住促進、相互扶助等の事業を行なうことのほうが、便宜上やり易いということである。

また、その組織は、共通問題処理のために連合会を強化する必要性がありながら、なお加盟しない県人会のあることは納得がいかない。

さらに、その県人会活動が〝親睦〟の域を脱しないものが多いようだが、新移住者のめんどうをみたり、相互扶助の立場に立たない限り存在の意味はうすい。しかもその活動は、母国海外移住家族会の組織と強力にむすびつかない限り、その目的を十分に果すことはできない。

県人会と家族会活動

「移民は昔から手をひいてやれば、だいてほしいといい、だいてやれば、背負ってほしいと要求し、なければないで工夫するものであ

る」という或成功者の話しをサンパウロできいた。
また、新移住者に対して冷たいと思われる幾つかの事例もみてきた。
私は、そこに古い移住方式の遺産をみるような気がして胸がいたむ。少なくとも移住者肉身としては、今後の移住を〝棄民〟にしてはならないということである。それにつけて、戦後の移住に国の手がさしのべられてありがたいことだが、また反面いわゆるお役所仕事にも多くの解決すべき問題のあることも周知の通りである。
ここに、「海外移住家族会」の決起があるわけだが、その活動も県人会とむすびつかない限り意味はなくなってしまう。かくて移住者肉身の「海外移住家族会」と移住者の「在伯県人余」とが車の両輪のように活動してこそ、両者の目的も達成できるのである。このことは戦後移住王国を築いたオランダのホームフロント（移住家族会）の活動と移住方式とをみのがすわけにはいかない。

在伯県連と連合作戦の成果

昭和三十七年に結成した日本海外移住家族会連合会は、内に組織づくりを進め、外に移住者団体との連合作戦を呼びかけつつ、昭和四十二年に結成された在伯県人会連合会とは早くも次の三大事業をなしとげた。

一、ブラジル第一回（かさと丸）移民訪日団
二、海外移住者に対する引揚者給付金特例措置
三、日本明治百年祝賀ブラジル「みどりの使節団」の派遣

ことに引揚者給付金特例措置は、移住者の要望をとりあげて時効の法制業務をむし返し、複雑困難な請求事務等の経過からして、いわ

ゆるお役所仕事ではできないことである。

ここに移住者肉身組織の執念と民間団体の持ち味なり強力な連合作戦成果の意義をしみじみと思うのである。

昔の移住は、一将功なり万卒枯れる方式だったかも知れないが、できることなら昔のような苦労をさせず万卒功成ってもらいたい肉身の祈り……。必要ならだいてやろう。オンブもしてやろう。それにともなうできるだけのことをしていこうというのが、「海外移住家族会」の趣旨である。

そのことは、すでに在伯県連との共同事業のなかに、その可能性を実証した。しかも日系六十万という偉大な基礎のあるブラジル、相当な成功者を出しているブラジルにして、やる気ならそれができぬはずもあるまい、それには、まず在伯県人会と連合県人会組織とを合理的に強化すると共に、母県海外移住家族会及び家族会連合会に強力にむすびつくことからはじまることを銘記したい。

それこそ、本稿のタイトル「在伯県連と共に」にある私の信念であり、本稿の結論でもある。

終り

昭和四十三年十一月三日　明治百年文化日の日に

（社）日本海外移住家族会連合会

専務理事　事務局長

かさと丸生存者訪日壮行を祝す

後藤　武夫

明治三十七、八年と申しますと、西暦一九〇四、五年でありまして、大変昔の話になります。

明治三十七、八年には日露戦争があり、東洋の一小国日本が欧亜に跨がる大国ロシア帝国と戦って大勝を博したのであります。

それで当時の日本ほ国力が内に充実して海外発展の思想が興隆したのであります。当時の私共青年は国外に発展して、日本の国威を世界に昂揚さすべき使命を感じたのであります。

ただし、どういう手段で、どういう目的で、達成さすと云うような具体的計画企図を持っていたのではありませんが、私の場合は日本の貿易を伸張させることは、日本国民の海外発展の一つの手段であると考えて、日本商品の販路をブラジルに拡張するを目的とする商社に加わって、ブラジルにやって来たのであります。

それが一九〇六年でありました。越えて一九〇八年に第一回日本移民団が、笠戸丸で大挙ブラジルに来たのであります。

この移民導入については日本官憲では、杉村ふかし公使、三浦荒次郎通訳官、民間では水野竜氏、鈴木貞次郎氏などが、ブラジル政府並びにサンパウロ州政府と折衝宜敷きを得て、この画期的事業が成功したのであります。

ただボンヤリと、海外発展の空想を描いて先着していた私共は、僅々二年の内に、斯様な具体的に日本民族発展が緒についたことに、

実に欣喜雀躍したのであります。

一九〇八年六月一八日、第一回移民船笠戸丸が日章旗を揚げて、サントス埠頭に着いたのを出迎えたのは公使館の三浦通訳官、当時現にサンパウロ州政府の移民官であった鈴木貞次郎君と、在留民の私と三名でありました。笠戸丸の移民諸君は私共と同様、日本民族の海外発展という大望を抱いて勇躍して来たので、元気一杯、秩序整然、ブラジル人から非常な好感を以って迎えられたのであります。当時のサンパウロ共和党の機関紙であったコレイオ・パウリスターノ紙は日本移民の清潔にして秩序整然としておる有様は、嘗って、欧州移民には見られなかったと万腔の賛辞を以って新聞に報道したのであります。

移民諸君は岸壁から移民列車に乗ってサンパウロ市の移民収容所に到着し、移民の手荷物も収容所内の税関で検査を受けたのであります。

収容所内の滞在数日で、奥地の珈琲園に配耕されたのでありますが、珈琲園の生活は移民の予想していたところとは大いに違ったものでありました。当時ブラジルの珈琲は、未曾有の不況時代でありまして、その対策会議がタウバテで開催されて珈琲の生産制限などが取り極められた時でした。また御承知の通り珈琲の生産は、豊作、不作は隔年でありまして、恰も同年は珈琲不作の年でありまして、新来の移民が星を戴いて出で、月を踏んで帰ると云う刻苦勉励しても、珈琲樹から珈琲の実をもぎ取る数量は少なく、収穫量によって賃金を得る所得は僅少で生活必需品は耕地の売店からカデルネッタで買うのでありますが、その方の借金の方が嵩高で、これではブラジルに借金をしに来たようなものだと。

移民間に不安が高まって、各耕地内で不安な状態が勃発したのであります。

公使館の人や移民会社の人が、その慰撫鎮圧に努めたのでしたが、耕地から脱退する人が多く、サンパウロの都会に出て来ても就職の途はなく、サントスの波止場人足や、奥地の鉄道工夫などになった人も多く、実に笠戸丸の移民は言語に絶する苦労をしたのであります。

その間、壮志半ばにして斃れた人も沢山あって、現在生き成っておられる人は誠に僅少であります。

この笠戸丸移民の苦難があったればこそ、漸次改善されて二年後の第二回旅順丸移民は耕地脱落者も減少し、以後続々と移民が継続されて、約二十万人が渡来し二世、三世を合せて日系人六十万と称せられるようになったのであります。

それですから、私共は笠戸丸の移民諸君に対しては万腔の感謝の念をもっておるのであります。

この度県人会連合会によって、笠戸丸生存者による訪日団を組織されたことは、私共感謝の微意の一端を表示するものでありまして、むしろ遅きに過ぐるのでありますが、私共は非常な感激を以って訪日団皆様をお送りするものであります。

在伯五十九年、皆様も御年配にもかかわらず、御元気でいらっしゃいますから、此の上とも、御健康に御留意なさって、母国日本の近状を十二分に体得されて無事に御帰伯なされますよう心からお祈り申し上げる次第であります。

（かさと丸以前伯者勲五等ブラジル日本文化協会評議員会副会長）

日本訪問に際して

お禮のことば

渡邊七之助

甚だ潜越でありますが、第一回かさと丸移民訪日団員を代表して、御挨拶申し上げます。

本夕は私共のために、このように盛大なる壮行会を催して頂き、この光栄は私共一生の思い出となることと存じます。

私共は一九〇八年六月十八日、七九一名と共にサントス港に上陸いたしましたが、もはや、同航の生存者は七十余名となりました。

私達は幸に長生きしましたおかげと、中尾会長様始め、コロニアの皆様の御厚意によりまして、実に五十九年ぶりに、夢にも忘れることのできない、ふるさと、あの懐かしい兎追いしあの山、小ぶな釣りしあの川を目のあたりに見ることができます。

この喜びは、私達の想像も出来なかったことであります。

祖国を夢みながら亡くなった同航者にもこの喜びを共にしたい思いであります。

この上はお互に無事訪日を終えて再び皆様にお会いしてお礼を申し上げることの出来ます様、元気で行って参ります。

尚文化協会、南米銀行から御丁重な記念品を頂きましたことを御礼申し上げます。

皆様ほんとうにありがとうございました。これを以て簡単ながら御挨拶と致します

（「かさと丸」訪日団代表、壮行会当日の挨拶）

かさと丸移民について

アンドウ　ゼンパチ

ブラジルへ最初の日本移民を輸送した笠戸丸が、一七世紀の初期にイギリスにおける新教の圧迫に不満をいだいて母国を捨てて、新天地アメリカへ渡った、ピューリタン（清教徒）の一派が乗った有名なメイフラワー号によくたとえられるが、これは全くおかど違いである。

メイフラワー号に乗ったピューリタンの一団のものはその前にイギリスから新教国オランダに移住したものだ。その一部で彼等は更に新世界に自由の天地を求めて再移住を決行したのだった。したがって彼等の目的はあくまでも彼等の宗教儀式が自由に行なわれる土地を求めてそこに理想的な社会を建設するということであった。

メイフラワー号に乗船した一〇二名の移民たちは最初は一六〇九年からロンドン植民会社によって開設されていた。アメリカ東岸中部のヴァージニアの植民地に向ったのであったが途中で激しい暴風雨にあい約一カ月も漂流した後、東岸北部の一地点に上陸することができた。

ここはロンドン植民会社とは関係がなく先住植民者もいない全くの新天地であったが、着いた時は十二月下旬の厳寒の最中で食べものも充分になく寒さと壊血病とで同志はぞくぞくと倒れて其の冬の間に仲間の半分を失うという惨憺たる苦難に直面したにもかかわらず、このきびしい試練を克服してアメリカ史上に輝く有名なニュープリマス植

民地の建設に成功したのであるが、これは全く彼らがすべて同じ信念に生き同じ理想に燃えていたものたちによって固く結ばれていた一団であったからである。

ところが、笠戸丸に乗ってブラジルに来た移民たちはブラジル渡航の目的が、メイフラワー号の移民たちとはぜんぜんちがっていた。そもそも海外へ出た日本移民は明治元年のハワイ行移民から以後数十年にわたってアメリカ大陸の各地に渡航したほとんど全部が一時的な出稼を目的としたものであった。そして彼等を目的地に輸送したものは移民輸送を商売とする移民会社で移民会社の宣伝によって日本の各地から寄せ集められたものが、たまたま同じ移民船に積みこまれただけのことで同じ船に乗っていても彼等を固く結びつける信仰・信念・理想といったようなものはなかった。

ブラジルへ渡った最初の日本移民を乗せた笠戸丸とても同じことで一七〇家族七九一名のいわゆる笠戸丸移民は家族ごとにあるいは全員の一人一人が数年の出稼ぎで一、二万円もうけて帰ろうという希望以外には共通な信念や理想などというものはなかった。それは何も日本移民だけのことではなく世界史的に見て、近代移民というものは南支那の華僑やイタリア移民を初めとしてどこの移民も出稼を目的としたものでいわゆる出稼根性(といってもここでは悪い意味で使っているのではない)と云う個人的な気持だけで出かけていったものでまさに近代の社会的な現象であると言える。それにもかかわらず笠戸丸移民がブラジルに渡った最初のものであるということだけでなにかすばらしい功労者のようにしたり世紀の英雄のように持ちあげたり、さらに、移民会社が傭った輸送船の笠戸丸までがメイフラワ号にたとえら

れるようなことになってはひいきのひきだおれになる。

笠戸丸移民は最初の移民であったために第二回以後の移民たちが味あわなかった幾多の苦労をなめたことやそのつらい経験のために後続移民が大きな便宜を得たことは大いに認めなければならない。そういう意味で笠戸丸移民の年老いたる生存者にコロニアはあたたかい気持で感謝の意を表するということは敬老的社会美談として結構なことである。

（人文科学研究所員、在日本）

母との対面

永田夫妻

「おかあちゃん……」

あとの言葉が続かないまま、永田さんはひしと墓石にすがりついた。

七十六歳の老人の口から「おお」とも「うう」ともつかないおえつがもれる。

明治四十一年、神戸からブラジルへたった永田さんにとって、正確にいえば五十九年ぶりの母との対面であった。当時、永田さんは十七

歳。

「一、負けるんじゃないぞ」と大きな声で永田さんの出発を励ましてくれたおかあさんだったが、いまはものを言わない。

しかし、永田さんは生きている母を抱きしめるかのように、いつまでも墓から離れようとはしなかった。

×

ひと口に六十年というが、その歳月は長い。日本から初めてブラジルに移住し、以来一度も帰国したことはない。いま、ブラジルで活躍している日系人約六十万人の基礎を作った〝移民のパイオニア〟たち。こんど日本に里帰りしたのは、そうした九人の人びとである。

永田さん夫妻と湯ノ口さんは同じ鹿児島県の指宿出身だ。十九日、打ち上げ花火と日の丸の小旗でふるさとに迎えられた三人。

× ×

こんどの里帰りは、観光旅行をかねてというものではない。「余生の残り少ない私たちの一生の願いが、先祖の墓参りでした」―― このパイオニアたちの切実な願いをかなえてあげようと在伯県人会連合会と日本海外移住家族会とが共催してくれたのである。

（週刊読売５５号、五月五日載）

『かさと丸』

訪日団員の略歴

〔１９６８年２月２８日サントス出港のブラジル丸にて〕

金城　盛　吉（７４才）

明治２６年７月２０日生

現住所　モッカ区パッサロ街三九サンパウロ市

本　籍　沖縄県島尻郡豊見城村

父盛元は明治三十八年、ハワイ移民として、渡航したところ、トラホームのため上陸不許可となり、止むを得ず沖縄に帰ったが、海外雄飛の志捨て難く、明治四十一年（一九〇八年）ブラジル移民が募集されるや一家を挙げて第一回移民としてブラジルに移住した。即ち盛吉氏は十五才にて父と共に渡伯。サンパウロ州フロレスタに配耕された。日給一ミル五百レース（当時一ドルが九ミル）、一カ月後、耕主より「一カ月後にヨーロッパ系移民が退耕する約束であったので、日系移民を雇ったが彼等は引続いて働くことになった。就いては日系移民は退耕せよ」と申し渡され、止むを得ず、イツーの町に出て薬局の住みこみ小僧となって奉公した。一ケ月三十ミルであった。

六ケ月後、マット・グロッソ州の鉄道工夫として雇われ、十六才でラブラタ河のエスペランサ港に行き、一年後、アルゼンチン国のロザリオに移り、ドイツ系の砂糖工場で働いた。一ケ月七十ペソ（一ドルが六ペソ）更に同国の首都ブエノスアイレスに移り、木工場で六ケ月間（日給三ペソ五〇セントで）働いた。

一九一三年ブラジル国に戻り、ソロカバナ線のサン・ペードロ農場

にてコーヒー日雇を三カ年した。伸地ウシと結婚したが、一九一五年ウシは病因不明で死去した。

一九一七年比嘉ヨシと結婚、同年隣の出現に移った。日給二ミル五百レース日傭と通訳を兼ねた。沖縄県人としては一番早い通訳であった、そこで三力年間働いた。

一九二四年独立して、ジュキア線アナ・ジアスに於て米作を始めた、土地は三アルケール（七町歩半）豊作であったが米価が安くて、生活は楽でなかった。米はモミで三五〇俵収穫したが、精米すると一七〇俵になってしまい、一俵（六〇キロ）一九ミルが売値であるが、精米賃二ミル運賃四〇〇レースを差し引かれるので、手取りは一六ミル四〇〇レースしか残らない、米の収穫後はジャガイモを栽培したが、青枯にあって全滅した。

ジュキア線ジュキアに移って再び米作を始めたが、マラリアに冒された為、米作を断念して、木炭焼になった。一九二八年ジュキア線のセードロに移って、バナナ園を経営し七アルケール（一七町歩）の土地を買った。事業が安定したので父は沖縄へ帰った。

日用雑貨店せ兼営したが、第二次世界大戦のため、バナナの輸出が止まり、現金商いだったのが次第に延べ払いとなり遂に資金の回収不能となって失敗した。

日用雑貨店の在庫品を処分して、バナナ園で養豚を始めた。最初オス五頭メス五頭で始めたが、一年後には一〇〇頭にふやし、一カ月六頭平均つぶして、六〇ミルの収入となり、生活が安定した。日用雑貨店を再開した。その他トラック二台を購入して、バナナの輸送業をも

兼ねた。二年後、以上の事業一切を廃めて、サンパウロ市に移り、家屋を購入して八百屋を始めた。更に自動車三台を購入して、長男、次男、三男、四男に、タクシー業を営ませた。現在長男盛太郎四八才は乾物と野菜を販売し、次男盛光四六才はタクシー業、三男盛三郎は衣類を販売四男盛利はサントス市の市場中に販売所の権利を買って、野菜、果物を販売している。孫は一六名ある。

中村たかの　（７４才）

（旧姓）橋　　本

現住所　伯国サンパウロ市ガーマローバ街二〇二二

本　籍　愛媛県伊予郡双見町上灘

明治二六年一月一五日本籍地に生る。

実兄東野綱吉は家庭的に恵まれ祖母に盲愛された為、若い時より遊蕩にふけり、このまま日本におっては一家の財を散じ本人の将来のためにもならず、単身渡伯させるのも不安であり、可愛そうでもある。というので妹のたかのが三年間ブラジルに居るとの約束で渡伯することになり、一五才五カ月で戸籍名儀の上だけ橋本重左街門の妻となり、一九〇八年第一回移民としてブラジルに渡った。上陸と同時に離婚した。

ソロカバナ線トレーゼ・デ・マイオ・ソブラードに配耕された。実兄東野綱吉は六カ月で退耕したが、たかのはドトール・ポンポネ医師宅に女中奉公をして二年間働いた。初め六カ月は無給、次の五カ月は

月給五ミル、五カ月後は一〇ミルとなる。（当時一ドル九、ミル）一九一一年サンパウロ市サンパウロ街二〇番地の外人の商人宅に奉公、半年後アンドレー・マタラーゾ邸に移った。（編者詐マタラーゾ家はブラジル随一の資産家の一族）月給二〇ミルで二カ年奉公した。一日も早く日本に帰りたいとの考えから、少しでも収入の多い所へと希望した。幸いブラジル料理も覚えたので外人の上流社会に勤め、月給は七〇ミル迄昇った。

然し乍ら当時の上流社会は毎晩の様に晩餐会が開かれ、来客も多く非常に疲れた。

その頃は、二四〇ミルあれば船賃になるとのことで、なんとかして帰りたい一心で一コント（一〇〇〇ミル）貯金しようと、五力年間三枚のブルーザと唯一枚だけの黒いスカートで我慢した。実兄を訪ねる場合でも往復四〇〇レースの電車賃を節約して遠い路を歩いた。その頃は日本人が珍らしく殊に女でもあったので自分が歩くと、白人やら黒人の男がゾロゾロ後について歩いて困った。

この様にして漸く八〇〇ミル貯金したとき、兄が友人と、リオ・デ・ジャネイロ市で共同事業を始める、必ず一年後に返す、と固い約束のもとに五力年間血と汗の結晶である八〇〇ミルを貸し、一年後には日本へ帰ることができる、と希望していたが、この金は遂に返らなかった。

二二才の時兄の勧めで、中村四郎と結婚した。夫はサンパウロ市で、大工をしていた。その頃のブラジルは奴隷解放後二〇年しかたっていなかったので邸奉公といっても、食事も、極端に粗末なもので、豆と粉だけで喉も通らず、水で流しこむ様なものであったが、第一次

世界大戦勃発と共に不景気になり、大工の仕事もなくなったので、パウリスタ線のテーラ・ロッシァに移り、夫婦で棉つみに入った。一カ月の収入が八〇ミルであった　子供二人を抱えて、やっと食って行けるだけであった。二年間というものは現金を手にしたことは一度もなかった。退耕するとき、ようやく三〇〇ミル入手したに過ぎない。余り惨めな生活をしていた為、同航老（同じ第一回かさと丸で来た人）（編者註・親戚、知友が少ないため、ブラジルでは殊に日系社会では同航者がお互いに親身になって援けあう）が同情して三角ミナスの米作を誘ってくれた。同所に移って一年目は稲の高さが人間の背の高さ位あって、豊作を予想されたが、収穫時にマラリアに冒され日系七〇家族が殆ど倒れて刈り入れが出来ず、フラフラしながらようやく家の廻りの家族の食べるだけの米を刈るのがやっとであった。二年目は不作、三年目を迎えでも不作、遂に日系人全家族は家財道共を残したまま、夜逃げをした。

この当時、自分達夫婦は通訳を兼ねていた為、耕主側と日系日傭人側との板ばさみとなり、或時は日系人から誤解され又耕地の雇人の無知な黒人から銃二丁をつきつけられ、引金に手をかけて、アワヤというとき総監督が来て助かった事があった。

一九二六年三角ミナスの隣で、八アルケール（約十七町歩半）の土地を地主と半々という契約で米作を始めた。最初の年は不作、二年目は豊作だったので、十人の日傭を雇って刈入れしようとした日から、四十日間雨が続いて稲が腐ってしまった。遂にこの土地をあきらめて、退去した。

サンパウロ州のカニンデ駅のロッシンニャ耕地でカフェーを一ヶ年

五百本で請負ったが食費に使い果した。
夫はカフェーを止めて、同地で米作を始め、自分は通訳と産婆と、薬草を主とした病人看護をした。この薬草は黒人の老人から教えられたもので二百種以上あり、病人には特効があった。但し産婆と病人を看護するのも一切無料である。
十年間その土地に居たので土地の人々から慕われ、耕主の信用もあつく百アルケールの土地を、中村の名儀で買ってやる、とか立派な商店を買ってやるから経営しないかと親切に勧めてくれた。然し夫は変りもので、他人の世話になることを好まず、いずれも断った。
自分達夫婦は外人の生活を見るにつけ自分達の子供には是非日本語教育によって、日本精神を伝承させることを念願としなんとかして日系人の多い、日本語学校のある土地に移りたいと希望し、ブラガンサ線のヴィラ・ジュケリーに移り、ようやく子供達に日本語教育を受けさせることが出来た。
自分は長い間外人宅に奉公した為ポルトガル語は自由に話せるが、家庭では一切日本語を使い、子供達も家庭内でのポルトガル語を禁じた。
その後サン・カエターノに移り、長男はマタラーゾの工場で働き、次男はバスの運転手、三男、四男は技術工となった
ブラジルで死ぬことをきらい日本へ帰りたがっていた、夫は一九五九年に亡くなった。
現在長男良夫四二才はアチバイアで養鶏、次男年男四一才はバールを共同経営三男マリオは、トヨタ自動車で働き、昨年会社より日本へ半年間派遣され、技術を修得し、世界的水準の技術者という証書を受

領して帰伯した。長女は竹村家に嫁しアチバイアで果樹を栽培し、四女は佐々木家に嫁し、カラグアタツーバで野菜を栽培している。
孫は二十人、曾孫は四人。

島　袋　カ　マ　（７６才）

現住所　カンポ・グランデ市マット・グロッソ州アベニーダ・ドン・キノ四九

本　籍　沖縄県中頭郡美里村字比屋根六九〇

明治廿四年五月十五日本籍地で出生、島袋亀はハワイ移民を志したが、当時北米では排日の気運が濃く到底ハワイへ行くことが不可能と思われたので、ブラジルへ渡航することとなり、十八才の時前記夫亀と結婚して一九〇八年渡伯した。

カナン耕地に配耕され、一九〇九年アルゼンチン国ヴェノスアイレスに移り建築業を営み、半年後ロザリナに移る。パラグアイ河に沿ってブラジル国のポルト・エスペランサに入り、ツルマ鉄道会社に於て、鉄道工事に従事した。夫亀は、日給二ミル、カマは日給一ミルで炊事を担当した。

四年後、マット・グロッソ州のカンポ・グランデに入り、土地を借りて野菜を栽培した。一九一四年長男島袋ジョゼーが出生した。一九一五年亀はマラリアの為病死、一年半後、新垣松と再婚した。

新夫松も野菜を栽培していたが、一九二五年松は病死した。長男ジョ

ゼー五三才と三男新垣徳雄は、ガソリン・スタンドと自動車修理工場を経営し二男新垣松雄四八才は別れ、ガソリン・スタンドを経営している。長女新垣ソエは薬局を営み孫は二〇名である。

山　口　ト　モ　（４２才）

（旧姓）西　　村

現住所　サントス市マルシャル・エルメスダ・フォンセッカ街五一二

本籍　熊本県飽託郡城山村

明治三十八年三月十七日本籍地に生まれる。四才の時、父母兄弟と共に渡伯、ヅモント耕地に入る。一九一〇年サンパウロ州モンソン耕地を政府から無償交付を受けた。米、とうもろこし、にんにく、玉ネギ等を栽培した。一九一九年プロミッソンの上塚第二植民地に於て上塚氏から一五アルケーレス（三六町歩）の土地を購入してカフェを栽培した。

一九二五年山口徳太郎と結婚、夫は測量技師の助手であった。一九二六年長女ゆき、一九二九年長男オノリオ、一九三一年のりよしが出生した。夫と共に州内の諸所を測量のため移動した。一九二八年父母は相当の資金を持って帰国した。

一九五八年ようやくサントスの現住所に定着した。長男は中学校にて図画、数学、ポルトゲースの教師、次男はサンパウロ大学自然科学

科卒業サントス水産試験所の技師、長女は広瀬三郎に嫁している。自分は、父が早く金を貯めて日本へ帰ることを急いだため学校へもやってもらえなかった。無学であるが、現在は子供達の孝養により安楽な幸福な生活をしている。

湯ノ口　畩　市　（７８才）

現住所　サンパウロ市

セナドール・フェジョ街八〇〇

本　籍　鹿児島県指宿郡指宿村

明治二二年八月一日本籍地に生まる。

ペルーへ移住する希望であったが、ペルー移民が難かしいとのことで、二十才の時妻及弟八郎と共に渡伯、サンマルチン耕地に配耕され、一九〇九年にサントス市に出た。

港湾労働者となり、一九一〇年、サンタ・カタリーナにて煙草巻をした。一日四千本で八ミルの収入、一九一一年リオ・グランデ州のポルト・アレグレに行き次いてリッシン植民地へ入ったが、昼なお暗き大森林の為引き返えして、サンタ・マリアで再び煙草巻した。一九二一年十二月再びサントスに帰り、建築のペンキ業を始め現在に到る。

この間十一人の子をもうけたが、六人死んで五人生きている。二男フランシスコ五十五才、四男ペードロはペンキ業を営み、娘三人はそれぞれ嫁している。孫は十八人、曾孫五人家業は全部子供に譲り悠々自適している。

林　岩　松　（７６才）

現住所　サンパウロ市ピネイロス街八三二

本　籍　山口県大島郡家宝町

明治四十一年笠戸丸にて、兄、林愛之助の家族の一員として渡伯した。ソロカバナ線トレーゼ・デ・マイオのソブラード耕地に配耕された。十一才であった。

その後兄と別れて退耕、サンパウロ市に出た。

諸々方々で家庭奉公をしたが、日本人だというので珍らしがられ、パトロンから可愛がられた。

その当時ポンは百レース、バナナは一打二百レース、仕事のない時は二百レースで生活したこともあった。あの当時のサンパウロ市内のリベーロ・バダーロ（現在の繁華街）はずっと野菜園であった今のビア・ヅット・デ・シャー（お茶の水橋）は木造で、その下のアニャンガバウの処は足をベトベトさせながら歩いた

私は家庭奉公をしていたし、小さかったので、あまり苦労はしていない。

満十六才の時自動車の免許証をとった

パトロンに車を買ってもらい運転手を永く続けた。その当時大工は一日働いて五ミルだった。

私は月給百五十ミルで服もパトロンから貰った。日本人では私の前に三人の運転手がいた。

長ずるに及んでサン・ジョンにガラージを開設し、タクシー二〇台をおいたので伯人が驚いていた。現在はピネイロスレジストロ、パー

ラ・クルスの三カ所でガソリン・ポストを経営している。
一男三女がある。
長男レオポルド家業。長女マリ子。夫は森田秀吉・経済学士計理士。
二女エレナ、夫は角勤兵庫陶器製造工場経営。三女テレジンニァ、夫
鈴木輝一機械製造工場経営。

永　田　一（７６才）

現住所　サンパウロ州ジャカレイ市バロン・デ・ジャカレイ街四三五
本　籍　鹿児島県指宿郡指宿村七二
明治二四年六月一三日本籍に生れ母の実家の養子となる。
一七才にて実兄西牟田実と共に渡伯する。渡伯の動機は永田ノキ項に詳述するサン・マルチン・ヅブラードに配耕二年三ケ月後、サントス市へ実兄と共に移り外人宅の家に家庭奉公した。日給五ミル（一ドル、九ミル）一九一〇年兄実は心臓病の為死亡した。兄嫁西牟田ノキと兄の娘一人をつれて、サンタ・カタリーナ線ジョイン・ビーレに於て、フランス系の砂糖会社にて砂糖キビの栽培をした。
日給三ミル但し自分で開拓した土地は無償交付するという好条件であったが、土地が悪く、六ケ月で退耕、ジョイン・ビーレの町に移って、煙草巻作業をした。
千本について二ミル、一日家族中で六千本巻いて一二ミルであった。
当時は部屋代及食事代共に一日三ミルで足りたので、生活は余り苦

しくなかった。その為その年一九一三年頃、英貸五六ポンド（一ポンド、一二ミル）を日本に送金することができた。八カ月後母からの返信があり決して送金には及ばない。それだけの金があれば、それをもとでにして早く成功する様にと、寧ろ母から叱られた。それと同時に実兄西牟田実の未亡人ノキと結婚する様に勧められ、一九一四年二月二〇日結婚した。その後リオグランデ市に於て港湾労働者となった。日給七ミルであった。更にリオ・グランデのアウシリアイス鉄道会社のペンキ塗りに従事した。月給一二〇ミル。

その当時は家賃、食事代共一家三人で七〇ミルあれば足りたので比較的楽な生活であった。家族をサンタ・マリオ市に残して、鉄道会社の仕事で、リオ・グランデ州を転々と移動した。八年後退職してペンキ業を始めた。マノエル・ナシメント・バルガス（後の有名な大統領ゼツリオ・バルガスの実父）に可愛がられてその邸に、一年九ケ月引留められた。

その後北米のシャトルの友人を尋ねて北米で仕事をしようと志し、単独で、ボリビア、アルゼンチン、パラグアイを放浪して最後にパラグアイのアスンシオンで遂に北米行をあきらめた。その間一年八ケ月妻子はサンタ・マリオ市で貯蓄で生活していた。一九二三年サントスへ帰ったが、その当時日本円にして四万円所持していた。一九二三年より二九年迄ペンキ業を営みその後は新移民の通訳に転じ一九三三年ノロエステ線クンニヤ・ブエノ耕地に於て支配人となった。一九三三年ジャグアレーに出て洗染業を始めた家業は三男ミルトンが継ぎ長男アリソン四六才は病床にあり、次男ジャイメ三九才は工場で働き、娘二人は嫁ぎ孫は一三人ある。

永田　ノ　キ　（８１才）
（旧姓　西牟田）

現住所　ジャカレイ市バロン・デ・ジャカレイ
本　籍　鹿児島県指宿郡喜入村
明治十九年十一月十五日本籍地に生る
西牟田実と結婚夫西牟田実は薩摩焼の名家に生まれ、鹿児島市に本拠のある他、京都、大阪、四国にも支店を設け、盛業中であったが、事業に失敗し、実弟永田一と共に一九〇八年第一回移民として渡伯した。二二才であった。サン・マルチン・ヅブラッドに配耕された、後、サントス市に出て夫は外人宅の家庭奉公人となった。一九一〇年夫が病死、後は娘と義弟と共に行を共にした。一九一四年二月二〇日郷里の親戚の勧めにより義弟永田一と結婚した。

渡　邊　七之助　（８１才）

現住所　サンパウロ州ビーラ・モンテイロ・ロバート一一六
本　籍　福島県二本松市錦町二二六
明治一九年一月一日本籍地に生る。一九才で松本けさと結婚、父が家業に失敗して当時の金で二千円の借金を背負った為、父の借金を返す為、二一才にて夫婦で渡伯、ヅモント耕地に配耕された。二ケ月後ソロカバナ線トレゼ・デ・マイオ駅のソブラード耕地に転住日給二ミル五百レース、渡伯一年目に長女を熱病のため失なう。四年後大工を

兼業したため日給四ミルとなった。一二年間同耕地に定着した。八年の間に少しづつ父の借金を返済し八年目にやっと二〇〇〇円完済した。

八年間というものは米の飯も食べず、粉と豆ばかり食し、シャツはメリケン粉の袋をほどいて作り、ズボンは穴だらけであった。

その当時一ミルは日本金にして、六六銭六厘六毛であったから二千円の借金を返済するためには衣食を極度に切りつめ朝のまっくらのうちから、夜も暗くて手が見えないまで働き、幼児はコーヒーの樹につないだまま働いた。幼児は蟻のため顔に穴があいた。

一九一六年スペイン風邪が流行して、五十二家族の内十二人が死亡したが、妻けさと弟真吾もその時死んだ。一九一九年三月鈴木はるえと結婚した。

一九二〇年星名代の斡旋にて奥ソロカバナ線サント・アナスタシオに上地十アルケール購入してコーヒーを植付け、豆、棉、落花生、ジャガイモを栽培した。次々と土地を購入して百三十三アルケール（二百九十二町歩）の土地を所有した。　この年次女、かつえ（八才）が森林梅毒で死亡した(編者註森林梅毒とは荒れた山に入るとかかる病気で症状は梅毒に類似している風土病)

一九三八年三女みさが心臓病、一九四〇年次男が盲腸手術で死亡した。サント・アナスタシオの土地は、一アルケール二百ミル（一ドルが九ミル)で購入した一九五三年サンパウロ州ガルリョスにて土地一アルケール購入養鶏一万五千羽を飼っている。長男七重（カズシ）四十六才、三男正行三四才、長女は渡辺礼二に嫁している。長男、三男は家業を継いでいる。孫は十人。

琉球政府主席の祝電

三六二ノ

イワイ　一〇七　オキナワナハ　九二七　コ一・五

モトシオチョウ八ノニ」

スミトモセイメイヨツヤビル」

ニホンカイガ　イイジ　ユウカゾ　クレンゴ　ウカイチョウ」　タナカタツオ殿

ホウニチダ　ンゴ　一　コウオメデ　トウゴ　ザ　イマス」

イジ　ユウ　クサワケノギ　ヨウセキヲタタエコンゴノ　ゴ　ケンコウヲオ　イノリスルトトモニキレンゴ　ウカイニ　カンシヤモウシアゲ　マス」

リウキウセイフギ　ヨウセイシユセキ

四月一四コ　二　一八

目　次

第一章　訪日派遣準備とその経過
（１）創立総会
（２）経　過
（３）訪日団広告募集
（４）訪日団の応募者
（５）訪日団派遣に関する日本政府への申請書
（６）同事務連絡
（７）訪日団打合せ会
（８）朗　報
（９）在ブラジル第一回移民訪日待遇に対する申請
（１０）訪日団員の変更

第二章　壮　行　会

第三章　ぶらじる丸船中

第四章　公　式　行　事
（１１）共同記者会見
（１２）ＮＨＫ見学
（１３）ＮＨＫスタジオ一〇二放送
（１４）大阪商船三井船舶
　　招待パーティー
（１５）靖国神社昇殿参拝
（１６）国会議事堂訪問

（１７）首相官邸訪問
日本政府叙勲の意志発表
（１８）外務大臣訪問
（１９）外務大臣招待による歌舞伎座観劇
（２０）ソニー工場見学
（２１）モノレール
（２２）三越本店見学
（２３）佐藤総理正式招待による観桜会
（２４）明治神官昇殿参拝
（２５）国立劇場招待による観劇
（２６）皇居見学
（２７）大阪商船三井船舶株式会社訪問
（２８）皇太子明仁親王殿下
同美智子妃殿下に謁見
（２９）ブラジル大使館訪問
（３０）歓迎会
（３１）叙勲伝達式
第五章　フジテレビ
第六章　ＴＢＳ
（３２）沖縄訪問
（３３）沖縄から本土へ
（３４）「おようにっぽん」放送

第七章　第八回海外日系人大会日本
海外移住家族会連合会総会
（３５）会　議
（３６）総理大臣歓迎パーティ
（３７）会　議
（３８）万国博招待パーティ
（３９）ＮＨＫ歌のグランドショウ
（４０）日本海外移住家族会連合会
総会並に社団法人設立総会
（４１）自衛艦隊の練習
（４２）美濃部知事招待パーティ

第八章　岐阜県家族会大会に出席

第九章　送　別
（４３）厚生省援護局に対する謝恩
会並に田村事務局長送別会
（４４）在伯県人会連合会主催謝恩会

第十章　帰伯あるぜんちな丸船中
（４５）永田一氏発病

第十一章　永田ノキさん病臥
（４６）会　議
（４７）見舞金
（４８）下船会議
（４９）重なる不幸

イ、トビアス氏の死去
ロ、飛び込み自殺
ハ、沖合退去
（５０）サントス着
第十二章　かさと丸及かさと丸以前
渡伯生存者調
第十三章　かさと丸及かさと丸以前
渡伯生存者叙勲の発表
第十四章　勲章伝達式及叙勲祝賀会
（５１）伝達式
（５２）祝賀会
第十五章　結　語

在伯第一回（かさと丸）移民訪日団日誌

輝ける栄光の日々

附　かさと丸及びかさと丸以前生存者調査と叙勲

第一章　訪日団派遣準備とその経過

（1）創立総会

◎一九六六年四月十二日、文化センターに於て、在伯県人会連合会の創立総会が開催された。

宮坂国人氏が議長に推挙され、役員選挙の結果、

会　長　中　尾　熊　喜（熊本）

副会長　上　野　米　蔵（福　岡）

副会長　小笠原　喜　一（宮　城）

理事県は各ブロックより左の通り互選された。

東北・北海道　小笠原喜一（宮城）

関　東　石川　芳男（福島）
　　石原　桂造（群馬）
　　照沼　朝男（茨城）

近　畿　竹田　清一（和歌山）
　　和田周一郎（奈　良）

中　国　村上　智（広　島）

四　国　田中　義数（愛　媛）

九州・沖縄　上野　米蔵（福　岡）

各理事県より会計理事、監事を互選。

第一会計理事　田中　義数

第二会計理事　村上　智

第一　監事　吉雄　武

第二　監事　花城　清安

又顧問として左の五氏を推戴することを決定した。

顧　問　駐伯大便　田付　景一

顧　問　サンパウロ総領事　鶴我七蔵

顧　問　サンパウロ日本文化協会

会　長　宮坂　国人

移住事業団サンパウロ

顧　問　支部長　鈴木　猷吉

会長に就任した中尾熊喜氏は、第一号議案として、

『第一回かさと丸移民訪日団の派遣』

を提案し、その理由を説明した。

「理　由」

『在ブラジル第一回かさと丸移民は今日の日系コロニア六十万人繁栄の基礎を築いた貴重な人達である。我々移民は、成功して必ず故郷に錦を飾りたいと云うのが唯一の念願であった。然るに、かさと丸移民の方々は多年の苦労にもかかわらず、経済的に恵まれず、母国訪問の夢も叶えられず、志なかばにして逝かれた人が多い。本連合会はこれ等の先駆者の労に報いる為に、是非一度日本訪問をさせてあげたいと思う就いては、旅費の半額を本連合会が負担し、半額を日本政府に

申請して、是非これを本連合会の第一の事業として実現したい』
参会者一同は、深く感激して、満場一致可決した。

（2）経　過

四月中旬小笠原副会長訪日に際し日本海外移住家族会連合会の総会、海外日系人協会主催の海外日系人大会に於て、この件に関し、日本政府に対し旅費、滞在費半額負担の申請をすることを提案した処、いずれも満場一致これを可決し、大会の決議事項として外務省に申請した。

◎八月九日　第二回役員会

第二号議案　（中尾会長提案）

『在ブラジル第一回かさと丸移民を日本に招待することを、日本政府に要請する運動を即刻展開する件』

中尾会長、『さき程小笠原副会長よりの報告により、この件に関し、日本政府も非常に好意的であることが判明した。即ち昭和四十三年度は、明治百年に当り、又ハワイ移民百年祭にも相当するので、その時、ブラジルからも第一回移民を招待しては如何かと云う意向の様である。

然し、ブラジルのかさと丸移民は、ハワイのそれとは異なり、現存している。然かも極めて高齢者であって、明後年となれば、甚だ心細い、従って本連合会としてはあくまでも明年度実現出来る様に、即ち

一、新聞広告によって早急に応募者を募ると共に、各県人会からも該当者に呼びかけてもらう。

二、応募資格者の人数が判明次第、日本政府の招待を要請すべく、

在サンパウロ日本国総領事館と日本海外移住家族会連合会を通して申請を行なう。勿論往復旅費、滞在費を日本政府負担とする。但し最悪の場合、コロニアに於て旅費が負担出来得る位の意気込みで推進する。

三、宮坂顧問が九月に訪日されるので外務省に働きかけてもらう。

四、目標は来年の五月とする。

五、接待に就いては日本海外移住家族会連合会に依頼して、各県にも呼びかけ、万全の処置を講じたい。

宮坂顧問『皆さんが、それだけの決心を以って推進されるのであれば日本政府ばかりでなく、財界にも呼びかけ、日本朝野を挙げて歓迎して呉れる様に呼びかける。

議長、右の提案を諮ったところ、満場一致これを可決した。

（3）訪日団広告募集

◎八月二十日、サンパウロ新聞、パウリスタ新聞、日伯毎日新聞、評論新聞、羅針盤紙上に左の通りの広告を掲載した。

第一回「かさと丸」移民の日本訪問団募集

一九〇八年（明治四十一年）六月十八日サントス入港の「かさと丸」第一回移民七九一名の方々は五十八年間刻苦精励して苦難の道を開拓され今日の日系コロニア六〇万人の繁栄の礎となられたのであります。我々はこの尊い先駆者に対し、敬慕と感謝の情、真に切なるものがありますこの半世紀以上に亘る長い間、夢にも忘れ得なかったであろう母国訪問を是非実現して頂きたい。この様な念願のもとに本連合

会は日本政府、各県庁その他に対し、日本への招待方を懇請致し度く存じますので、左記各項御熟読の上、一名でも多く、参加されますことを希望致します。

記

一、訪日の時期＝一九六七年三月出発、東京にて挨拶回り、歓迎会、見物等諸行事の為十日間滞在の後訪問団を解散、各自は自由に故郷を訪問する。

但し、在伯県人会連合会より各県に対し、接待方を依頼する。帰伯は自由行動。

二、乗り物＝往復船便

三、船賃及滞在費＝船賃は無料滞在費は東京滞在十日間無料、但し付添者の船賃は自弁

四、応募資格＝第一回「かさと丸移民」でまだ訪日されない方

五、申込期日＝一九六六年九月三十日迄

六、申込場所＝在伯県人会連合会事務局（月、水、金午前中）及各県人会事務所へ、氏名、年齢、性別、現住所、本籍を明記して提出のこと、付添人の場合も同様

一九六六年八月二十日　聖市サン・ジョアキン街三八一番（日本文化センター内）在伯県人会連合会　会長　中尾熊喜

◎十月五日　第三回役員会

中尾会長　在ブラジル第一回かさと丸移民訪日応募者は、去る九月三十日を以って締切ったところ十五名の応募者があり、それに付添五名と合計すると二十名になった。費用の件については日本政府に申請

するが、最悪の場合はコロニアに於てこれを調達するだけの意気込みがなければならない。この費用を捻出する方法は

「在ブラジル第一回移民かさと丸訪日記念号」を発刊して　五万コントスの収入を期したいと思う。尚かさと丸訪日の件については一切を会長に委任されたい」。

と諮ったところ、満場一致可決した。

（4）訪日団応募者

◎かさと丸訪日団申込者氏名

山口　トモ　六二才（熊　本）
橋口　敏信　六四才（熊　本）
光永　三利　六〇才（熊　本）
宮田　稔　七五才（愛　媛）
中村たかの　七四才（愛　媛）
林　岩松　七一才（山　口）
永田　一　七六才（鹿児島）
永田　ノキ　八一才（〃　）
竹内喜左衛門八〇才（〃　）
湯ノ口畩市　七八才（〃　）
新里　三郎　七七才（沖　縄）
金城　盛吉　七四才（〃　）
仲程仙五郎　七七才（〃　）
島袋　カマ　七六才（〃　）
宮城　字吉　七八才（〃　）

以上十五名

付添

宮田宗子、幸崎健一、竹内キク、島袋保正、宮城カマド　以上五名

合　計　二十名

（5）訪日団派遣に関する日本政府への申請書

◎十月七日　かさと丸移民を日本へ招待方日本政府に対し御斡旋御願いの件に就き、在サンパウロ日本国総領事近藤四郎殿に右書類を提出

県連発第二十三号

一九六六年十月七日

在伯県人会連合会

会長　中　尾　熊　喜

在サンパウロ日本国総領事館

総領事　近藤四郎殿

謹啓、尊台益々御隆昌の段慶賀申上げます。陳者首標の件に関し別添要望書の通り、日本政附に申請致度存じます。

御高承の如く第一回移民は既に高齢に達しておりますので、是非昭和四十二年度にこれが実現を期し度、尊台におかれましても日系コロニアの要望を御容れ下さいまして日本政府に御取次御斡旋方御願い申上げる次第であります。敬具

要　望　書

今日、ブラジルにおける日系人の数は六十万といわれ、ここ十年の

後に百万人を突破するものと思われます。そのなかには農業や商工業の面で非常に成功している者も多く、日本人としての面目を保っております。また移住者が子孫の教育に熱心でありました為、二世は当ブラジル社会で大きな勢力を持つことに成功いたしました。国会議員四名、州議員六名のほかに、政治、教育、衛生、軍事などの第一線で活躍している二世は数えきれないほどであります。

このように、日本の国外において日系人が集団地をつくり、移住地社会の大きな存在となっておりますことは、母国日本のために大きな役割き果たすことになるものと考えられます。例えば、東京オリンピック委員会の東京開催の折の南米諸国の票数は、日系団体の請願によるブラジル代表の働きと考えても過言ではありません。

また、当ブラジルは二十一世紀の国といわれているように、将来は北米合衆国とも肩をならべる大国となる多くの要素をもっており、躍進する母国日本の商工業の受入国となると思われます。現在すでに二百数十杜の日本商社の進出をみており、さらに増加しつつあります。

然しながら、日系人の大集団地ができるまでには、五十八年の年月と数十万移住者の尊い犠牲を要したのであります。

とくに一九〇八年（明治四十一年）に日本を出発した第一回移民七九一名は、言語、習慣、風土の異ったブラジル国コーヒー園労働者として送りこまれ、二年間は後続部隊も日本船の来航もなく、日本との手紙の往復は、早くて六ケ月を要したという時代に非常な苦労の末、日本移民の地位を獲得したのであります。

それから五十八年間、大部分は死亡いたしましたが、その時代の人たちは移住についての準備も、母国からの援助もなかったために、成

功している人が少ないのであります。

しかも、この人たちに限らず、移住者は国を出る時から母国に一度帰ることを唯一の希望としていたのであります。

不運にして、国を出てから五十八年、わが第一回移民（かさと丸）のなかにはこと志とちがってすべて意の如くならず老境をむかえて母国訪問をあきらめつつある状態であります。

私ども在伯県人会連合会は本年四月十二日結成したばかりでありますが、結成大会の決議要望として、第一回移民生存者の母国訪問援助計画をたて、移民の無二の希望である母国訪問の夢を突現せしむる趣旨のもとに日本政府に対し、援助方を要望する次第であります。

第一回移民（かさと丸）　日本訪問の送り出し要項

一、訪日の時期、一九六七年三月頃を希望する、東京にて挨拶回り、歓迎会、見物行事の為十日間滞在の後、訪問団を解散、各自は自由に故郷を訪問する

但し在伯県人会より各母県に対し、接待方を依頼する、帰伯は自由。

二、乗り物　往復船便

第一回移民（かさと丸）訪日希望者

名簿（前掲申込者と同じにつき省略編者）

日本政府に対する要望事項

前述の如く第一回移民（かさと丸）は苦難の道を開拓して今日の日系コロニア繁栄の礎となりましたが、彼等第一回移民は経済的に報いられず切々たる望郷の念止みがたきものがありましても、その機を得なかったのであります。

更らに彼等ほすでに高齢に達しておりますので、一日も早くこれが実現を計らなければ遂にその時期を失する恐れがあります。

本連合会と致しましては、日本政府が右事情を御賢察下をいまして、左の通り金七、八三四・二四〇円の内、金三、九〇〇・〇〇〇円の御援助を賜わりますよう要望する次第であります。

尚残額三、九三四・二四〇円は在伯県人会連合会及び日本海外移住家族会連合会において負担致します。

訪問期日　昭和四十二年三月

一、船賃　エコノミカル八人詰

一人に付片道五九二米ドル

往復一、〇六五ドル六〇セント

日本円一人に付往復三八三・六一六円

合計十五人分　五、七五四・二四〇円

二、滞在費第一回移民十五名付添五名計　二〇名分

一日一人十五ドル　日本円五、四〇〇円十日分　一、〇八〇・〇〇〇円

三、東京都に滞在十日間分の交通費、食事費、見学費一日一人　五、０００円十日間　二十名分　一、〇〇〇・〇〇〇円

合計　七、八三四・二四〇円

その内、日本政府補助金三、九〇〇・〇〇〇円

以上　右申請書の写を、リオ・デ・ジャネイロにある日本国大使館特命全権大使田付景一殿を訪問して提出する他、日本海外移住家族会連合会会長田中竜夫殿及日本滞在中のサンパウロ日本文化協会会長宮坂国人殿宛にも発送した。

（6）事務連絡

六六県連発第二十三号

一九六六年十月廿六日

在伯県人会連合会

事務局長　田　村　　徹

日本海外移住家族会連合会

事務局長常任理事　　藤川　辰雄殿

第一回かさと丸移民

訪日に関する事務連絡の件

（前文略）陳者昭和四十一年十月十二日付貴翰拝誦致しました。田中会長の御奮闘に就きましては真に感謝致しております。陳者貴会長に対する激励文としては発送しておりませんが、先日要望書の写を発送しておきました。尚総領事の公信は渡辺担当領事に問い合わせました処、既に十日程前に外務省宛発送済にて総領事としても来年度の予算は間に合わなければ、本年度の外務大臣報償費から支出され度旨申添えるとの事でした。尚総領事から指示もありましたので、要望書の写を先日リオ・デ・ジャネイロに行きました節、田付大使に直接御手渡して何分の御支援方依頼しておきました。（以下は他の要件のため省略）

◎十一月九日　文協会議室にて

かさと丸訪日団出身県人会打合せ会協議事項一、在伯県人会連合会長名を以て、各出身県人会会長に要望書、名簿を添付の上団員の接待を依頼する

二、各県人会長は右連合会会長書簡及要望書、名簿を添えて母県知事

に依頼状を発送する

三、十二月十日午後二時より、かさと丸訪日団を招集する。

渡航手続が即刻出来得る様予め召集状に明記する。

四、沖縄関係については、田中竜夫代議士より琉球政府に交渉方依頼すること

六六県連発第三七号

一九六六年十一月十一日

在伯県人会連合会

会長　中　尾　熊　喜

日本海外移住家族会連合会

会長　田　中　竜　夫殿

（前略）

陳老在ブラジル第一回かさと丸訪日に関する日本政府に対する補助金申請に就きましては一方ならぬ御奔走を賜わり、ありがたく厚く御礼申上げます。追々日も迫って参りましたので、尊台の御判断によりまして、本年度補助金が不可能と思惟されますならば、次の機会に譲って頂きまして、大阪商船三井船舶株式会社に対して船賃大巾割引御交渉相願度、その節は勿論往復船賃は当方に於て負担致します。尚船賃払込の関係もありますので可及的速みやかに御回答賜わらは幸甚の到でございます。

敬具

六六県連第三五号

一九六六年十一月十日

在伯県人会連合会

会長　中　尾　熊　喜

熊　本、鹿児島、愛媛、山口、沖縄　各県人会長宛

在ブラジル第一回移民かさと丸

訪日に関し御高配方御願いの件

（前文省略）

陳者首標の件に関し別添要望書、訪日団員名簿を御送付申上げました。訪日団は昭和四十二年二月二十八日ブラジル国サントスを出航の「ぶらじる丸」に乗船四月十日頃横浜港着の予定であります。東京に於て十日間の公式行事を終えて訪日団を解散、その後は各自が永年の間夢にみた故郷を訪問することになっております。就きましては貴会の母県各官庁に種々御面倒御願い致し度く存じますので甚だ恐縮ながら貴会より各関係方面へもよろしく御斡旋御取り計らい下さいます様御願い申上げる次第であります。敬具

一九六六年十一月十五日

在伯熊本県人会

会長　中　尾　熊　喜

熊本県知事　寺　本　広　作殿

在ブラジル第一回移民（かさと丸）訪日に関する御願いの件

謹啓　尊台におかれましては今度目出度三選されまして、再び県民の為御健闘下さることにになりました事は在伯熊本県人会の深く喜びとするところでありまして、謹んで御祝い申し上げます。

陳者別添在伯県人会連合会長の依頼状及要望書の如く、今般首練の通り第一回移民が訪日することとなりました。本県人会員山口トモ氏（六二才）熊本県飽託郡城山村出身）が訪日団に参加しております。東京滞在約五日間の公式行事終了後は故郷を訪問することになっております。日程及歓迎方法につきましては、日本海外移住家族会連合会（会長田中竜夫氏）と外務省及かさと丸訪日団出身県（熊本、鹿児島、愛媛、山口、福島、沖縄）各県庁との打合わせ会が開催されること、になっております。第一回移民は日系六十万人の繁栄の基盤となった貴重な存在であり

一九六三年三月にはブラジル大統領が首都ブラジリアに軍用機二機を以て二泊三日招待されました。

何卒山口トモ氏訪日の際は種々御高配賜わり度く御願い申上ぐる次第であります。

敬具

六六県連発第三六号

一九六六年十一月十日

在伯県人会連合会

会長　中　尾　熊　喜

かさと丸訪日団員殿

（前文略）

陳者主標の件に関し打ち合わせ致し度く、且つ渡航手続きも致し度く存じますので、左記の事項をよく語熟読下さいまして、万障御繰り合わせの上御来所下さいます様御願い申し上げます。

記

一、日時一九六六年十二月八日午後二時

二、場所サンパウロ市サン・ジョアキン街三八一日本文化センター大会議室

三、当日必ず持参すべき書類

A、日本国籍の人

①渡伯した時の旅券

②鑑識手帳

③納税証明書

④無犯罪証明書

⑤婚姻証明書

⑥居住証明書

⑦未亡人の場合は亡夫の死亡証明書

（以下略）

（7）訪日団打合せ会

◎十二月八日　団員打合わせ会

会長、副会長、団員出身県人会々長　金城盛吉、永田一、新里三郎、湯ノロ　畩市、中村たかの、山口トモ、林岩松、新垣松雄（島袋カマの代理）

会長、副会長の挨拶

田村事務局長より注意事項の発表

渡航手続説明の後直ちに手続を開始

（8）朗　報

四一海家連第九五号
昭和四十一年十二月十四日
日本海外移住家族会連合会
会長　田　中　竜　夫
在伯県人会連合会
会長　中　尾　熊　喜殿
第一回移民訪日船賃割引の件
標記の件に関し十一月十一日付六六県連
発第三七号貴信をもって依頼があり、大阪商船三井船舶（株）と折衝の結果、次の通り特別割引きが認められましたので緊急お知らせします。なおこのことは大阪商船三井船舶の趣旨に深い理解をもたれての特別配慮によるもので、同社長宛てに礼状を出されると共に、その厚情に報いる意味において是非往復とも同社定期便を利用されるようにお願いします。
一、訪日者十五名については五割引とする
二、同付添人については三割引とする
三、東京滞在期間についての、本会の協力に関しては外務省等他の機関とも協議して十分方法等を研究してお知らせする。
◎十二月二十三日
日本政府より総領事館を通じて
「本年度の補正予算、来年度の予算計上は不可能、但し昭和四十三年度は明治百年、ハワイ移民百年につき若干名のかさと丸移民を招待することは可能」と回答があった。
翌二十四日家族会連合会田中会長から前提の大阪商船三井船舶株式会

社の好意により船賃大巾割引の朗報が届いた。

尚サンパウロ日本総領事館より「日本政府の招待として東京滞在費、市内見物については全額政府が負担する」と回答があった。

中尾会長は、補助金について、かねてからこうした回答のあることを予期していた。然し高齢者の事とて三ヶ年待つことは不可能で、是非これを今決行しなければ悔を千載に残す、旅費、滞在費は例え自分が全額負担してもこれを実現するとひそかに心に決めていた。

六六県連発第四六号
一九六八年十二月二十七日
在伯県人会連合会
会長　中　尾　熊　喜

日本海外移住家族会連合会
会長　田　中　竜　夫殿

謹啓昭和四十一年十二月十四日付四一海家連第九五号の貴翰本日拝誦致しました

昨二十六日サンパウロ日本国総領事館より補助金却下の旨通達がありました処本日尊台より御朗報を賜わり尊台の御強力なる政治力と御誠意に対し、唯々感激致す次第であります。早速御指示の通り、大阪商船三井船舶株式会社取締役会長岡田俊雄殿及社長進藤孝二殿に対し同封写の通り御礼状差し上げました。又即日新聞にも発表致しました。お蔭をもちまして実質的には日本政府の補助金を得たと同様の結果になりました事は主催者たる本会はもとより日系コロニア挙げて尊台ならびに大阪商船三井船舶株式会社に対し、大いなる感激と感謝の声に

満ちておりますことは、同封新聞報導の通りであります。
尚総領事館におきましても、日本に於けるスケジュールに就いては出来得る限り援助するから申請書を提出する様にとの申出がありました。何れ早急に希望条項を決定して申請致します。何卒その節は外務省を始め各関係方面へよろしく御高配方御願い申上げます。　敬具

◎一九六七年一月四日
第四回役員会
第二号議案　会長提案
かさと丸訪日に関する件
一、壮行会はコロニアを挙げて盛大にし、そのためサンパウロ州知事、大使、四人の総領事等も招待する。文協、援協、日伯文化普及会、エスペランサ婦人会、ブラジル商工会議所邦字三新聞社にも共催を申入れる。
二、訪日団引卒者として事務局長田村徹を派遣する。

◎一月四日
六七県連第一号
一九六七年一月四日
在伯県人会連合会
会長　中　尾　熊　喜
在サンパウロ日本国総領事館
総領事　近　藤　四　郎殿

（9）在ブラジル第一回笠戸丸訪日団
待遇に関する中請書

（前文略）陳者来る二月二十八日サントス出港の「ぶらじる丸」にて第一回笠戸丸移民十五名付添五名が四月十二月頃横浜に到着の予定であります。御承知の如く同移民は今日のブラジルにおける日系六十万人の繁栄の礎となった極めて貴重な存在であります。ブラジル政府もその労苦を多とされまして、さきに一九六三年三月九日ジョン・ゴラール大統領は軍用機二機を以て首都ブラジリアに二泊三日間招待し大統領官邸アルボラーダ官に於て大統領夫人自ら茶菓の接待をされました。

日本政府におかれましても本訪問団に対し左記の便宜供与賜わりますれば、日系コロニア全体の探く喜びとするところであります。

尊台におかれましては右事情御賢察の上、日本政府に対し、これが実現御斡旋下さいます様申請する次第であります。

敬具

記

一、日本政府招待という名目を与えられること。

二、天皇陛下、皇后陛下、皇太子、同妃殿下に謁見を賜わること。

三、内閣総理大臣、外務大臣とも面接すること。

四、皇居、東宮御所、国会議事堂の見学

明治神宮、靖国神社、ＮＨＫ放送局、デパート、歌舞伎、国際劇場、国技館、羽田空港、モノレール、地下鉄等を見学したいので、その為必要な便宜をも御配慮ありたい。

備考、本訪問団滞日中のスケジュール作成及び受入れ事務は日本海外移住家族会において、これを担当されることとなっておりますので、委細の決定については同会と御連絡の上御処理下さる様御願い申し上

げます。

◎一月九日　海外日系人協会理事長岩重　隆治氏、日伯中央協会理事長上塚司氏　全国知事会理事長宮内弥氏に対しても　第一回かさと丸移民訪日に関して御高配方御願いした。

◎一月二十三日　本会連合会々長中尾熊喜氏高血圧の為病床についた。

◎二月三日　かさと丸訪日団壮行会招待状を発送、大使、サンパウロ、ベレン、ポルト・アレグレ、レシフェ、マナウスの各総領事、田村、平田、宮本、上野連邦議員アプレウ・ソドレーサンパウロ州知事その他に招待状発送した。

四一海家連第一三六号
昭和四十二年三月十四日

日本海外移住家族会連合会
会長　田　中　竜　夫

在伯県人会連合会
会長　中　尾　熊　喜殿

第一回移民訪日歓迎の件

標記の件に関しては別添外務大臣宛本会文書の通り、外務省に対して在京中の日程及び経費について強力に折衝した結果日程については右文書の通り、また経費についても宿泊中の滞在費協力が認められるに至りました。また本会もその経費の一部を分担すると共に在京中の一

切の実務にあたることになりました。また三月十日出身県との連絡会議を開催して、出身県の歓迎についても万全を期しておりますので、どうぞ御安心下さるようにお願いします。

なお、その後の歓迎業務等についてはお知らせいたしますが、要望等でもありましたらお申し越し下さい。

四一海家連第一二四号
昭和四十二年二月二十日

外務大臣　三　木　武　夫殿

日本海外移住家族会連合会
会長　田　中　竜　夫

在ブラジル第一回移民訪問団

歓迎について助成協力方お願いの件首題の件に関しては、客年四月在伯県人会連合会結成大会の決議事業として、明治四十一年笠戸丸でブラジルに移住した第一回移民生存者を日本政府の招待で訪日させる計画のもとに、本会にも協力を求め、本会昭和四十一年度通常総会で決議して外務省に協力方を要請いたしました。

爾来在伯県連と緊密な相互連絡のもとに、大阪商船三井船舶（株）の船賃特別割引き協力、現地募金等の作業を進め、本年二月二十八日サントス港出帆の「ぶらじる丸」で訪日することになりました

ついては御高承のようにブラジル第一回移民は非常な辛酸をなめて経済的にも報いられることなく風雪五十八年、望郷の念やる方なく異郷の地に人生を終ろうとしております。今やブラジル国における偉大な地位を占める日系六〇万人の礎石ともいうべきこの第一回移民を母

国日本に暖かく迎えることは、ただに本人たちの苦労に報いるだけでなく、それがブラジル日系六〇万の感動となって、大きく日伯親善にもつながる意義をもつものと信じます。

どうか本事業の趣旨に対して深いご理解のもとに助成ど協力たまわりたく、下記「在ブラジル第一回移民訪日団在京歓迎計画書」及び別紙「在ブラジル第一回移民訪日団在京予算書」を添えてお願い申上げます。

記

在ブラジル第一回移民訪日団在京歓迎計画書

一、行事日程　四月十二日（水）

横浜港ぶらじる丸に出迎え歓迎挨拶

二、四月一三日（木）

商船三井（株）歓迎行事（協力）

三、四月十四日（金）

午前靖国神社、明治神宮、国会議事堂　見学

午後総理大臣懇談会（総理官邸）歌舞伎見学

四、四月十五日（土）

午前ブラジル進出企業会社見学

午後羽田空港、モノレール見学

四月十六日（日）

午前、テレビ出演希望見学

午後、座談会開催、夜の市内見学

四月十七日（月）

午前皇居見学、皇太子同妃殿下接見

午後関係団体共同歓迎懇談会

四月十八日（火）

各出身県へ出発、出身県及県海外移住家族会会長案内

二、歓迎業務

外務省協力のもとに日本海外移住家族連合会が行なうものとする。

◎二月九日

副会長上野米蔵同小笠原喜一事務局長田村徹は中尾熊喜会長病気のため会長邸な訪問訪日団派遣費用として金壱万七千コントスを受領した。

（１０）かさと丸訪日団団員の変更

かさと丸移民は高齢のため、予て中尾会長が心配していた如く、出発間ぎわになって、病人が続出し、結局、団員九名付添七名合計十六名となった。

団　員

金城　盛吉　七四才　（沖　縄）
島袋　カマ　七六才　（沖　縄）
永田　　一　七六才　（鹿児島）
永田　ノキ　八一才　（　〃　）
湯ノ口畩市　七八才　（　〃　）
山口　トモ　七八才　（熊　本）
中村たかの　六二才　（愛　媛）
林　　岩松　七一才　（山　口）
渡辺七之助　八一才　（福　島）

付添　金城ヨシ、島袋ジョゼー、新垣松雄、林トミエ、東野君江、加藤栄

引卒者、在伯県人会連合会

事務局長　田村　徹

◎二月十日

田村事務局長はウニベルツール旅行社に於て訪日団団員船賃として、金一〇、七四一・二四八クルゼイロス二四八センターボスを支払った。

第二章　壮　行　会

◎二月二十四日（金）時

在伯県人会連合会、サンパウロ日本文化協会、移民援護協会、日伯文化普及会ブラジル日本商工会議所、エスペランサ婦人会共催、サンパウロ新聞社、パウリスタ新聞社、日伯毎日新聞社後援の壮行会が午後七時から開催された。

すでに六時半から来客がどんどんつめかけてきた。

メインテーブルの向って左側に、かさと丸訪日団員が着席した。

（敬称略）

司会　サンパウロ日本文化協会

事務局長　藤　井　卓　治

挨拶　在伯県人会連合会

副会長　上　野　米　蔵

送別のことば

駐伯日本国特命全権大使代理　稲　葉　理事官

サンパウロ州知事アブレウ・ソドレー代理　ジョゼー・ミゲール・

ウィタケル・ピント

在サンパウロ日本国総領事館　総領事　近　藤　四　郎

サンパウロ日本文化協会　会　長　宮　坂　国　人

日本海外移住家族会連合会　理　事　佐々木　敬　介

宮坂国人文協会長から「かさと丸訪日団」に対しプレゼントの贈呈が行なわれ尚南米銀行からも、プレゼントが贈呈された。

乾　盃　在伯県人会連合会　副会長　小笠原　喜一

日本移民五十年祭の歌

コロニアの歌

赤間学院合唱団によって唄われた。過き来し、五十幾年の苦労が思い出され、場内はシーンとして聞入っていた。

送別のことば　日本文化協会評議員会　副会長　後　藤　武　夫

日本移民援護協会

会長　中　沢　源一郎
ブラジル日本商工会議所
会頭　広　川　都　三
エスペランサ婦人会
会長　三　宅　　静
連　邦　議　員　平　田　　進

お礼の言葉　訪日団代表　渡辺七之助

この訪日団の生みの親とも云うべき中尾会長が病気のため出席されなかったことは、参会者一同、一抹の淋しさを味わった。

新聞社のフラッシュ、特に今日はブラジル新聞三社も来ており、テレビ・カナール４も撮影すると云う華やかさであった。

かさと丸以前、渡伯の大先輩である後藤武夫氏、訪日団代表・渡辺七之助氏当日の挨拶は八二頁～八四頁に掲載してある。

第三章　ぶらじる丸船中

◎二月二十八日　この日は一点の雲もなく快晴であった。

サントス港空前の見送人、上野、小笠原両副会長、佐々木家族会連合会理事、大竹氏等数百人の人々が見送りに来られた。

船中は人、人、人でゴッタかえしている。新聞社の写真班の記念撮影と取材に応じる。

団員の人々の親戚知己の見送りで船室も、廊下も歩けない位だった。

あわただしい空気、気も浮き立つばかりである。

団員の人々もこの晴れがましい空気にとまどっている。
やがて第一回のドラがけたたましく鳴りひびく、然し誰も下船しようとしない
山口トモさんの姿が見えない、
船内くまなく探しても見当らず、事務室に問い合わせても「まだ乗船されておりません」という。
第二回のドラがなる、ようやく見送りの人々は去り難てに下船して行く、然し山口さんの姿は依然として見当らぬ。
「山口さんは急病で行かれなくなったのだろうか」と、中村たかのさんに聞いた。
「いいえ、確かに、税関で姿を見かけたんですが」
乗船用の梯子が上りかけたところへ、あわてて、かけつけた山口さんの姿を見てホッとした。
午後五時二十分、船は静かに岸壁を離れ出した。
五色のテープがヒラヒラと風になびいて美しい。船上の人、岸壁の人々が白いハンカチで瞼をぬぐっている。段々岸壁の人々が小さくなって行く。昏れやすい冬空も段々暗くなって行く、突堤を出はずれた頃は岸壁の人々も豆粒の様になってしまった。
船客はもうあきらめた様に船室へ入って行った。
船内放送で『今晩は時計を三十分おくらせて下さい』と云っている。船内は冷房がよくきいて肌寒いくらい、六時三十分、夕食を知らせるチャームが鳴った。
食堂はとても美しくアペリチェフ、エビとバタタのサラダ、鶏の蒸焼、果物、コーヒーと云う豪華版で、昔の移民船のおもかげはない。

団員一同疲れた顔もなく、元気に食事をしている。入浴後今晩はお互いに早く寝ましょう、と寝室に引きとった

◎三月三日　晴

朝七時カフェー

七時半朝食、みそ汁、つくだに、ジュース、

昼　食

そうめん、肉のフライ、魚の塩焼、野菜の煮物、柿

午後三時、洋菓子、紅茶

夕　食

魚の天ぷら、豆と豚肉、果物、コーヒ

団員集合して午後三時頃甲板で一人々々の肖像写真を撮った。

◎三月四日　暗　時々雨

午前六時カフェ

午前七時半

みそ汁、梅干、つくだに

昼　食

かつをさしみ、煮魚、冷肉、ラッキョウ

夕　食

スープ、トンカツ、ライスカレー、プデン

落語寄席があったが、団員の経歴書を作成するため行かなかった。

永田一さんの経歴を口述筆記した。

◎三月五日　時計１５分遅らせる。

朝　カフェー、梅干、つくだに、玉子二つ

昼　うなぎ丼、吸物、玉子豆腐、うの花づげ、大阪漬

夜　スープ、魚のフライ、白シチュー、水瓜、アイスクリーム
渡辺七之助氏の経歴を口述筆記した。
ビンゴゲームがあった。
湯ノ口氏、山口さん船酔のため食事せず。
◎三月六日　荒天
今日赤道通過であるが雨天のため赤道祭は翌日に延期、但し食堂でパーティがあった。
ざるそば、幕の内、おでん、やき鳥、すき焼、えびの天ぷら
とてもみんなは食べられない。
午後二時、中村たかのさんの経歴を口述筆記した。

船内の人々に依頼されて、断りきれず
船客一四六名分の名簿の作成をひきうけさせられた。
◎三月七日　赤道通過　荒天、船ゆれる
団員一同元気なく、食堂へ出て来たのは、渡辺さん、中村たかのさんだけだった。

◎三月十日　赤道祭
暗室で写真の現像をした。かさと丸訪日団の経過、報告書の作成。
船側の好意により午後二時から、かさと丸団員だけ健康診断をしてもらった。
一同元気で安心した。
船側の団員に対する気の使い方は行き届いたもので、昨日から食堂にも「かさと丸団員様御席」と特別席が設けられた

本山事務長に対して
「他の船客の手前もありますから決して団員を特別扱いにしないで頂きたい」
と再三申入れてあったが、事務長は
「団員の皆様を無事に横浜まで御送りする大事な責任がありますので」
と、丁重な言葉であった。後日横浜で下船した時本山事務長は
「あ、これでホットしました」
と心境を語っておられた。
冷房がききすぎて赤道直下だと云うのに冬のシャツ、冬のズボン下をはかなければならない。
団員一同も風邪をひきそうだと云うので金城さんその他の部屋の冷房をゆるめる様事務室に申入れた。
荒天のため赤道祭は年後二時食堂で開かれた。
中村たかのさんが船客代表となって、元気な声で竜王様の尋問に答え、南半球へ入る免状をもらった。
◎三月九日　晴
今晩はダンス・パーティがあった。湯ノ口さん、山口トモさんも今まで船酔で食堂に掛を見せなかったが元気で食事をしていた。
◎三月十一日　カルタヘナ（コロンビア）着
朝カフェー
朝食　梅ぼし、オムレツ、漬物、みそ汁
昼　まぐろのさしみ、小貝のつくだに、若芽のすまし汁、小芋とたけのこ、ますのうまに、ポンカン

夜　スープ、冷肉、ライスカレー、水瓜、プリン

フィリピンで終戦後夫を殺された人がその後アルゼンチンに住み、日本へ帰るのだが、荷物のことをどうしたらいいかと相談に来た。七十才以上のお婆さんで気の毒だった。

船のゆれがはげしかった。

年後三時カルタヘナ（コロンビア領）に着岸した。

かさと丸団員はあまり元気がない。

島袋さんと息子さん二人、永田一さん等と街を見物した。

◎三月十二日、クリストバル着

４５分時計を遅らせる。

昨夜はものすごくゆれた。

午後三時半頃クリストバル着岸

◎三月十三日

かさと丸団員全員椰子並木を背景にして記念撮影。

島袋親子、中村さん等とコロンの街を見て、タクシーで、パナマ運河を見学した。運河の両側はアメリカ陸軍の基地で星条旗がヘンポンと飜っている。きれいな芝生が緑に映えて美しかったが、これではコロンビアの国民が内心憤満やるかたないのも当然だと思った。

三時二十分乗船午後四時から運河を通航した。

その夜暗室で現像したが、パナマ運河は見事失敗した。

◎三月十六日　１５分おくらせる。

午前中現像、夜九時から写真の引伸を始めた。

昼食の時船内アナウンスで、

「七月二日横浜出港のあるぜんちな丸は乗船者多数のため、本船のお

客様の乗船申込みは中止致します」
と二度繰り返えして放送があった。これは大変と直ぐに事務長を尋ね、永田夫妻、湯ノ口、中村、東野、田村の六人の船席を是非確保して欲しいと申入れた。
事務長も、すぐ本社へ電報を打ってなんとか確保する様に致しますと約束してくれた。
◎三月十八日（土）晴
午前中団員全員でかさと丸団員経歴書や写真をはり、五十冊製本をした。これは日本及びブラジルのマスコミ用に作成した。
夜八時から甲板で盆踊りがあった。日頃、船酔で弱っていた山口さん、元気な渡辺さん達が揃の浴衣を着て嬉しそうに夜遅くまで踊っていた。
暗い夜空に紅白の提灯が風にゆれて美しかった。
◎三月二十一日　晴　寒い
朝　目玉焼、梅ぼし、みそ汁、つくだに
昼　おさしみ、茶碗むし、ごまめ
送別晩餐会　夜　スープ、エビの白ソースあえ、肉、若鶏、アイスクリーム、コーヒー、オレンジ
午後十時からダンス・パーティ
◎三月二十二日　ロスアンゼルス
島袋親子、中村さん達とロスの市内見物をした。
加州新報に挨拶に行った。
夕食後ロスの沖縄協会の人々の訪問があり、金城、島袋さん等を加え座談会を催した。

◎三且二十三日　曇

朝九時集合四台のバスに一八〇名乗車今日はＯＳＫサービスの市内見学だったハリウッド、ボール（屋外劇場）チャイナ劇場、サンセット大通り、ビバリヒル、リットル東京、ゴースト・タウン、ディズニーランド、ロングビーチを廻った。

昼食中に羅州新報の記者が来て、団員の写真を撮った。

ロスの覚書

自家用車は三人に二台、日系人五万人ロスの人口五〇〇万人。

自動車の価格は一五〇ドルから八千ドル。トヨタ自動車二万台あるとの事。

日産自動車はエンジンが永続きするので好評との事だった。

◎三月二十四日　晴　ゆれる。

暗室で写真の現像をした。

午後四時ゴールデン・ゲートを通ってサン・フランシスコについた。夜下船した。今日は土曜日で淋しい。カニ、エビ等をイタリア系の人々が売っている美味そうだった。

商店街は夜でも開いていた。すごく寒かったが船中の室は暖房で暑い位だった一寸気のきいた土産品だなと思えばほとんど日本製である。

◎三月二十五日

八時半起床、バス三台にて市内見学。

メインストリート、市庁、州庁を通り、トウインヒルで市内を遠望ゴールデンゲート公園に行く日本庭園の八重桜は今が満開であった。

団員の人達は五十九年ぶりの桜の満開に涙ぐんでいた。海岸通り、漁師町を通り十二時二十分船に帰った。今日は風速四五メートルの馳風の影響があるとのことであった。

◎三月二十七日（月）

Ｏ・Ｓ・Ｋより返電あり、事務長自らが部屋まで持って来て下さったので恐縮した。

「カサトマル・ダンイン六メイノセンセキ・カクホシテアル・アンシンヲコウ」との事でホットした。

◎三月二十八日（火）

元海外移住振興ブラジル代表の宮下衛氏より

「カサトマルダンインノ、ゴアンチャクヲイノル」

と祝電を頂いた。

◎四月一日　雨後晴　ホノルル着

時計４５分遅らせる。

朝八時半生合かさと丸団員の女性の方々に美しいレイを買って贈った。岸壁ではＯＳＫサービスのフラダンスがあった生憎小雨ダウン・タウンを通る、案内嬢は戦争花嫁だった。カメハメハ大王の銅像州議会を見て、更に無名戦士の墓の四二二部隊に参詣、団員の記念撮影をコロリードで撮った。

明治天皇から贈呈されたという竹を見てハワイ大学を通り、ワイキキ海岸に行った。

夢の国ハワイとかワイキキ海岸とかいうが、リオのコパカバーナの海岸の方がよっ程美しいと思った。

ハワイ八島人口七二万人、１／３が日系人、ハワイ大学一万二千人

とのこと、渡辺七之助氏の親戚の人が訪問されパイナップルのカンズメを頂いた。

◎四月三日　月　晴

演芸大会があった。山口トモさんも、ノド自慢に出て拍手カッサイを浴びた。

◎四月五日　ゆれがはげしい

日付変更線を通過一日飛ばす。

◎四月八日　ゆれがはげしい

団員元気だが食事をあまり食べない、写真の引伸をやった。

◎四月九日

船のゆれがはげしくて、座談会をやる予定だったが中止した。

荷物の整理中貧血を起し医師に来てもらった。

団員の中三人がひどく船酔した。

◎四月十日

船側の好意により、再度団員の健康診断をしてもらった。

◎四月十一日

「ゼンイン、ゲンキニオイデヲシュクス、マスコミノコンランガヨソウサレルノデ・ゼヒトウセイワトワレタイ」フジカワ

「ゴアンチャクヲシュクシマス」イミンエンゴキョウカイ　マツモト

「訪日団御一行おめでとうございます。

移住草分けの業績をたたえ、今後の御健康をお祈りするとともに、貴連合会に感謝申上げます。

琉球政府　行政府主席」

以上三通の電報を本山事務長がわざわざ部屋に運んでくれた。
事務長から『ＯＳＫからの電報連絡によると、報導聞係が横浜沖合から相当乗り込んでくるから、団員の方々をメインロンジに集めておいて頂きたい大体午前七時頃の予定、相当混乱が予想される』とのこと、吾々も緊張してすぐ団員の人々に集まってもらい、
「当日午前七時にメイン・ロンジに集まること、取材は藤川氏と田村を通じてすること、各々勝手に取材に応じると混乱を招くから、共同記者会見が終るまでは勝手に取材に応じないこと。
着岸後も統制のある行動をして、例え肉親の人達が逢いに来ても共同記者会　見が終るまでは統一行動をとること」を申し合わせた。
食堂に於て午後七時からアンドウ・ゼンパチ先生を囲んで団員と座談会を開催した。
◎四月十一日　船のゆれはおさまった。
夜十時頃から横浜港の灯がチラチラ見えだした。
船客一同は甲板に上って横浜の灯をみつめている人、酒を呑んで唄っている人それぞれであった。
団員の人達は一つに集まって、五十九年振りに見る日本の灯を見つめながら、喜びと、なんとなく不安な気持で唯ジッとみつめるのみであった。
船客名簿を作成するに当り、緒言として左の通り記載した。
「本航海は第三十七次ぶらじる丸復航であり、一九六七年二月二十八日午後五時サントス港を出航した本船には一八八名の船客が在りその内訳は、日本人（ブラジル国籍を含む）一六六名、アルゼンチン人一

○名、中国人四名、スペイン人三名、白系ロシア人二名、デンマーク人三名以上まことに国際色に富んでいる。

航海は快適であり、特に大阪商船三井船舶株式会社は船の設備、接客、食事催物等に最深の注意を払い船客に対するサービスは到れりつくせりである。

吾々が移民として渡伯した時代を回顧すれば実に格段の相違である。移住者にとって、同航者は親戚以上に親しくお互いに頼りになりあい、相寄り相援けて、喜怒哀楽を共にする深い因縁がある。

殊に本船には、在ブラジル第一回笠戸丸移民も同航しているが、船客も船側もこの第一回移民の人達を温く、敬愛の念をもって抱擁している。

茲に吾々第三十七次ぶらじる丸復航同船老名簿を作成して永遠の記念にするとともに、この名簿の紙上において船側の御好遇に対して感謝の意を表する。

一九六七年三月五日午前零時

赤道通過に際して　田　村　識

第四章　公式行事

◎四月十二日（水）　晴

昨夜十二時ぶらじる丸は横浜港沖合にピタリと碇泊した。

午前七時、ようやく空もあかるんだ頃早くも二隻のランチがやって来た。

一隻は検疫のため、一隻は記者団三十名が乗船していた。一昨夜の

打合せ通り、直ちに団員はメイン・ロンジに徽章をつけて勢揃した。心なしか皆の顔は緊張して、やや蒼白であった。

（１１）共同記者会見

やがてドヤドヤと一団となって入って来た朝日、毎日、読売、産経、中部、西日本等の記者と、そのニュースカメラマン、ＮＨＫ、ＴＢＳ、フジテレビ、日本放送、毎日放送等の人々を代表して、読売の記者が、矢つぎ早に質問して来る。

フラッシュの閃光、あかあかと照らし出されるライトが眼もくらむばかり、まぶしい。

「かさと丸訪日団の経過、目的、等を説明した」船中用意の団員経歴書五〇冊を各記者に渡した。好評だった。

日本海外移住家族会連合会常任理事、事務局長藤川辰雄氏から歓迎の挨拶、団員一同に大きくて、立派な徽章が胸につけられた。

午前九時着岸と同時に地方新聞の記者にとりまかれた。

団員の下船する処がテレビに撮られ、下船と同時に、団員個人に対する各報道関係の取材競争が始まった。五十九年ぶりに、涙と共に肉身相抱く姿がニュース・テレビに録画されて行く、報道班員の血眼の競争を見て、日本のジャーナリストのはげしき、猟犬が得物に飛びかかる様な迫力があった。その激しさに統制も出来ず唯呆然と手のほどこしようもなかった。同胞相抱いて泣き合う有様に思わず、もらい泣きするのみであった。

（１２）ＮＨＫ見学

最初の予定はＮＨＫ独占放送とのことであったが、一昨日、外務大臣が「かさと丸第一回移民が四月十二日に横浜に来る」と、発表した

ため各テレビ局が家族会連合会に共同取材を厳重に申入れて来た由。午前十時、一同こんどは、ほんとうに下船し、ＮＨＫ差し回しのバスに乗って、ＮＨＫ横浜支局に寄り、茶菓の接待を受け、有名な初見アナウンサーに紹介された。明日の放送の打合わせ等をした。今日一日初見アナウンサーも同車することとなった。

これは団員と初見氏が心安くなって、皆が固くならずに放送出来る用意のためである。

京浜第三国道を通って、代々水のＮＨＫ放送センターに着く。

此処はもと練兵場のあった処で、東京オリンピックが開かれた所だ、との説明に、今浦島の団員は驚くばかりである。

然し昔の東京を知らぬ団員も多く、いくら変った、といっても納得も行かず、外国へ来た様な感じのようであった。

流石に、世界に誇るセンターだけあって、規模の広大、施設の充実に驚嘆した

東京見物も終って、午後五時帰船した永田夫妻は懇望されて、ＴＢＳスジタオに出演した。

（１３）　ＮＨＫスタジオ一〇二放送

◎四月十三日（木）晴

午前七時半ぶらじる丸船上よりＮＨＫ全国中継、スタジオ一〇二放送である。

この放送は聴取率四〇％―七〇％で全国三千万の人が見るという。丁度各家庭では朝の出勤前、朝食の時間の関係で見る人も多い、年末の紅白歌合戦につぐ番組であり、しかも生放送である。

ぶらじる丸船中にテレビ・カメラ二台と、小型テレビ、岸壁にカメラ一台、陸上に大型バス二台の中には調整機が入っている。船中、岸壁横浜支局の連絡は、すべて無線である。

スタッフ五十人、昨日渡した、船中作の団員経歴書が、すでに台本となって五十人の人々が皆これを見ている。

前の放送が小型テレビに映っている。

放送開始五秒前、四秒前と秒読みが始まる、思わず、ぐっと緊張する。三秒前、二秒前、一秒前、ハイッ！　と声がかかる小型テレビにはぶらじる丸船上の皆の姿が、もう映っている。初見アナウンサーのもの馴れた紹介が始まり、藤川事務局長の挨拶、団員一人一人の前にマイクを出した。苦労話や、日本へ着いての感想を聞く、田村事務局長には

「どうも長い間、お年寄りと一緒で、大変でしたね、どんなことに一番苦労されましたか」

「途中で、葬式の一つも出るのではないかと心配しておりました。でも船中の運動会に一等をとったり、のど自慢で一位になったり、で皆さん大変お元気だったので、安心しました」と答えた。

これは後で、固くならずに、やわらくて、とてもよかったと初見さんに賞められた。

「皆さん方、仲々インターヴューに馴れていらっしゃる様ですが、ブラジルでも度々あったんですか」

と問われるほどであった。

最後に初見さんから、山口トモさんに

「今日は貴女に是非逢って頂き度い人をお連れしました」

と云って三十才位の男の人を別室から呼んだ、その瞬間山口さんは、
「まあ…弟じゃないの」
「姉さん……ほんとうに久し振りでした。私が解りますか」
と後は言葉にならず、只抱きあって泣くばかりでした。
ＮＨＫでは、このかさと丸訪日団の取材を二カ月前から企画し、日本海外移住家族会連合会の藤川事務局長と何度も打合わせ、熊本に居る山口さんの弟さんを探し出した。旅費滞在費全部ＮＨＫ負担で、二日前から東京に呼んでいたのである。

この放送は生放送のため、撮り直しが出来ないので、スタッフの苦労も大変だったと思う。
高橋プロデュサーに呉々も御礼申上げた。尚ＮＨＫから一同に出演記念品を頂いた。
高橋プロデュサーは公式行事の終るまで、つきっきりであり、帰伯する時もお世話になった。
この放送の影響は極めて大きく、笠戸丸ブームが起きた、と云っても過言ではない。すでに税関の人々もこの放送を見たと云って、吾々に、
「どうも、永い間ごくろう様」とねぎらって、荷物の検査も型通りであった。
正午には、知人からも
「一〇二ホウソウラミタ、ゴアンチャクヲ　シュクス」と電報があった。

（１４）大阪商船三井船舶（株）

招待パーティ

一寸、時間があったので、泉岳寺に参拝して光輪閣に於ける、大阪商船三井船舶株式会社主催の歓迎パーティに出席。

社長の御挨拶後、日本海外移住家族会連合会々長、衆議院議員田中竜夫氏から、丁重な歓迎挨拶があった。

船客を代表して、かさと丸訪日団代表林岩松氏から御礼の言葉があり、それを補足して、田村事務局長から

「かさと丸訪日団」に対する船客、船員の一方ならぬ御厚情を感謝した。

午後五時、上野忍ばずの池畔の法華クラブと云うホテルに四〇日間の旅装を解いた。

外務省、家族会連合会では、久し振りの畳がなつかしかろう、というので和室を準備されていた。なんと五十九年振りの畳に一同大はしゃぎであった。

ＮＨＫ一〇二放送で見たという友人、知己、見知らぬ人々から、ＮＨＫ、外務省に宿舎を問い合わせた、といって、夜中の一時迄、電話が次ぎから次へとかかり、受話器をおくと、すぐ次の電話、訪問客も殺到した。ＮＨＫ、外務省でも、問い合わせの電話で一人かかりっきりであったという。

ＮＨＫ高橋氏、ＴＢＳ並木氏、フジテレビ荒瀬氏、毎日放送丸畑氏のディレクターと個々に明日のスケジュールの打合わせ藤川事務局長の疲れも大変なものだった。これから毎日この状態が続く。

◎四月十四日（金）晴

朝六時から、電話のなりっぱなし、
九時三十分迄、面会人と電話で息つく暇もない。スケジュールの問い合わせ
ブラジルにいる親戚の居所を探して欲しいとの希望、雑誌週間紙の取材、テレビ出演の申込み、招待したいとの中込の殺到、勿論藤川事務局長が中心となって、テキパキと処理されているが、直接こちらへ来る人も多い。

（１５）靖国神社昇殿参拝

靖国神社は桜の花ざかり、サンパウロ靖国講から寄贈の桜もあった。
奉讃会理事長（海外日系人協会理事長）岩重隆治氏の御出迎えを受け田中会長も付添って下さって、靖国神社池田権宮司によって、昇殿参拝厳粛な気分となった。お供え、かわらけ等を頂いて退去、鳥居前で記念撮影した。
ＴＢＳ、フジテレビ、毎日放送が今日から毎日行事の撮影を終日行なった。主婦の友、新潮社からも取材に来ていた。

（１６）国会議事堂訪問

田中会長は、玉座のある参議院の方がかさと丸の人々にはよかろうと斡旋して下さった。
午前十一時、国会議事堂を訪問、その建物の壮麗には驚くばかり、所謂赤ジュータンを踏んで、重宗議長、鍋島参議員（後国務大臣）田中代議士（後国務大臣）と共に議長応接間にて茶菓の接待を受け一時間懇談した。重宗議長は

「貴方方は海外移住町先駆者であり、功労者であり、私もブラジルを訪問して、よく知っているが、貴方方の苦労というものは、並大抵のものではなかったと思う。ほんとうは、衆参両議院で貴方々を日本へ御招待すべきであった」

と懇切な御挨拶があり、団員を代表して林岩松氏から御礼の言葉を述べた。田中会長の御進言により、重宗参議院議長の御招待で、議員食堂で中食の御饗応にあずかった。

議長応接間といっても文化センター大会議室よりもはるかに大きく桃山時代を思わせるケンラン、ゴウカなものである

昼食後、参議院議場の玉座、天皇陛下の御休憩室等を参観した。

（17）首相官邸訪問

日本政府叙勲の意志発表。

年後一時、永田町の首相官邸訪問今日は、東京都知事選挙の前日に当るため、佐藤首相は外出中、代って国務大臣官房長官福永健司氏にお逢いして一時間懇談藤川事務局長より、一同を紹介した。

「やあ、よくいらっしゃいました。私はブラジルへ行ったこともあり、海外移住については、極めて熱を入れております。私の息子も今度ヴェネズエラへ移住することになっています」

と、くだけた調子で話しかけられ、

「今朝佐藤総理大臣とも、話しあったんですが、貴方方かさと丸移民生存者全員に、日本政府は叙勲するつもりです。閣議前に発表するということは、前例がありませんが、十八日の午前中に閣議に上程して、直ちに叙勲する予定、これは故郷へ錦を飾って頂きたいという政

府の親心であります。
貴方方の予定は十七日に解散することになっていますが、一日延ばせますか」
思わぬ発表に、八十名位詰めかけていた内閣記者団の間にも、ざわめきが起り競って、本社へ電話を入れていた。その間テレビのニュース、新聞のニュースの閃光に照らし出されていたが田村事務局長から、すかさず
「官房長官、大丈夫ですか？　この嬉しいニュースをサンパウロにある邦字新聞に打電しても大丈夫ですか」と確認した。官房長官も一寸考えてから、
「大丈夫、私も内閣の大番頭だ、きっと閣議を通してみせる。一体こういう人達に叙勲しなければ、誰を叙勲するか」
と呵々大笑された。尚長官から
「今ブラジルに第一回移民は何名位生存しているか」との質問に
「調べてみなければ、判りませんが、推定八十名位生存致しております」
「帰ったら、すぐ調べて報告して下さい」
とのことであった。官邸の庭で記念撮影後、閣議室を見せて頂いた。丸テーブルに各大臣の名前入りのスズリ箱が置いてある。案内者の話によると、このスズリ箱は、大臣か辞職されると、記念品として贈呈するとのことだった。
次に総理大臣室を見せて頂いた。思ったよりも狭く、質素なものだった。中商企業の社長室位のものだ。茶目っ気の中村たかのさんがチョコンと総理の椅子に座った。

閣議室、総理大臣執務室は、非公開で普通の人は入室出来ないそうである。

（１８）外務大臣訪問

午後三時、外務省に三木外務大臣を訪問した。田中会長から一同を紹介された　三木外務大臣はこちらから、総領事館を通じて提出した団員名簿を見ながら、一人一人に質問されやはり

「私も、ブラジルへ行って、皆さんの御苦労をよく知っています永い問ごくろうさまでした」と丁重にねぎらいの御挨拶があり、

「外務省では、移住関係で木盃を出したことはありますが、銀盃は初めてです。特に皆さんのお名前を彫りつけさせました」

と各一人々々に銀盃を授与され、林岩松氏より御礼の言葉を述べた。

この間約一時間だった。

（１９）外務大臣招待による

歌舞伎座観劇

午後四時より外務大臣招待による歌舞伎座観劇

座席は二階正面最前列の皇室の御席でこれでは国賓待遇だと恐縮した。局長代理の山下参事官、長田事務官から夕食の御接待にあずかった。この様な豪華な歌舞伎を見るのは初めての人々で、うれしい様な落ちつかない様な有様であった。

プログラムは別掲写真の通り。

終演後ホテルに帰り、長田事務官と私の室で叙勲申請の手続を始め、午前二時までかかった。長田事務官は徹夜で完了され明日申請す

るとのことであった。

◎四月十五日（土）晴

（２０）ソニー工場見学

午前九時半品川のソニー工場を見学、庶務部長の富沢氏の御案内によって、各作業場を見せて頂いた。

小型の美しいピンク色のリボンのついたボールペンと「銀さじ」を頂いた。

（２１）モノレール

羽田空港を見学、空港の食堂で中食、焼きめしを頂いたが、久し振りの油御飯で皆大喜び。やはり馴れたものが美味しいらしい。モノレールに乗る。

（２２）三越本店見学

バスにて日本橋三越本店に行く。取締役営業部長が玄関迄出迎えに出ておられた。同氏の御案内で店内一巡店員の人達が最敬礼されるので面はゆい。フジテレビ、ＴＢＳが撮影するので、黒山の様な人だかりがする。特別室で茶菓の接待があり、花嫁衣裳の着付とディスフィーレがあった。三越特製の風呂敷を御土産に頂いて午後五時宿舎に帰った。

もうこの頃は東京の人達は、すっかりテレビで私達の顔を知って、又バスには「第一回かさと丸訪日団」と明記してあり、在伯県人会連

合会、日本海外移住家族会連合会と大書してあるので、街ゆく人達は吾々を振りかえり、わざわざ側まで来て

「ほんとうに、よく来て下さいました

皆様永い間御苦労様でした」

と挨拶して行く人が多かった。

午後八時中村たかのさんはＮＨＫのゴールデン番組「ファミリーショー」に柳家金語楼、市丸さんと共演した。林岩松さんはＮＨＫの国際放送南米向けに出演田村事務局長にも大阪ＮＨＫから出演の交渉があったが、時間がないのでお断りした。

宿舎は相変らず訪問客と電話がひっきりなし。フジテレビは宿舎までカメラを持ち込んでの撮影、ホテルの主人から、

「お蔭で有名になりました」と礼を言われた。

東京少年少女合唱団(後で聞けばこれはウィーン少年合唱団に比してもソン色のない日本では有名な合唱団)から招待があったが、東京郊外なので丁重にお断りした。

国際劇場の事業部田部誠氏か来訪され是非明日御招待したいとの申入れがあった。幸い明日午後は暇があったので藤川事務局長と相談の上、招待されることになった。

◎四月十六日（月）晴

（２３）佐藤総理大臣より正式招待による新宿御苑観桜

田中会長より首相に申出があり、特に本日新宿御苑に招待された。田中会長御夫妻、藤川事務局長夫人も同行して下さった。

八重桜がみごとに、たわわといいたい位満開、丁度見頃であった。薄紅色の花々がしたたる様な緑の芝生に映えて、コロリード写真が撮

りたかった。

余りの見事さに、中村たかのさんが

「この花一枝頂けないでしょうか」という始末、あわててこれを止めた。団員一同、故国の桜を見て涙ぐむばかりであった。田中会長夫人もあわれに思われたか、夜、わざわざ宿舎まで「桜の花の塩漬」を一人々々に贈って下さるという、心ゆかしいかぎりであった。

（２４）明治神宮昇殿参拝

さらに、それから車で明治神宮に到り会長からの特別交渉で、昇殿参拝が許された。

（２５）国立劇場招待観劇

午後十二時半、予定より三十分遅れて国立劇場につく、幹部の人達はやきもきして待っておられた。というのは、この度人間国宝（特別文化財）として国家から指定された中村雁次郎氏が、わざわざ玄関まで出迎えておられたからだ。俳優が玄関まで出迎えるという前例はないそうである。片岡仁左衛門氏も迎え出ておられたが、開幕出演のため楽屋入りされたとのことだった。

二幕目の幕合いに劇場からの申入れで仁左衛門氏の楽屋を訪問した。昔の楽屋は雑然として暗く、汚いものであったが国立劇場の楽屋は全部エレベーターで廊下もきれい、まるで高級アパートのようで、只入口に昔風の俳優の紋のついたノレンがかけてあるので、楽屋らしく見える。

楽屋といっても片岡仁左衛門氏位になると、床の間付きの立派なものだ。雁次郎氏を囲んで昼食の接待があった。田村事務局長から

「貴方はこの度人間国宝に指定されたそうで、大変おめでとう御座

います。
ここにいる「かさと丸」移民の方々はブラジルでは、人間国宝ともいうべき人達です。どうか国宝どうしで握手して下さい」
と申し述べ、また同席の国立劇場の幹事の方に招待の御礼を申上げると共に、

「今迄の歌舞伎は松竹の歌舞伎であったため、歌舞伎の海外公演は大変むずかしく、特に地球の裏側迄来て頂くことは費用の採算が採れなかったと思います。幸い国立劇場も出来ましたので国家の費用で、中村雁次郎氏を始めとして歌舞伎をサンパウロへも派遣して下さい。歌舞伎が難かしければ、せめて、文楽の人形浄瑠璃を派遣して頂きたい」
と述べたところ、幹部の人は
「それは是非実現もたいですね、国立劇場ですから、可能性はあると思います」
との御回答であった。

田中会長は多忙であっても、一日一回は必らず宿舎を訪問されて団員をねぎらわれる。その誠実さには頭の下がる思いがする。
尚会長から、昨夜かさと丸の人々は言葉も余り自由でないようだから、今後は田村事務局長が団長として挨拶する様に又日系コロニアを代表しているという意気込みで、遠慮なく発言する様にと、注文があった。
愈々明日は、皇太子殿下、同妃殿下に謁見するのだから、と大事を

とって、東京移住家族会にお願して、その御好意により、夜八時から宿舎に於て、山崎倫子医学博士に健康診断をお願して、注射を打って頂いた。中村たかのさんの血圧が高すぎるとのことで、処方箋を頂き、近所の薬局から薬を買った。一同先生から頂いたヴィタミンの丸薬を呑む。

（２６）皇居見学

◎四月十七日（月）快晴

午前九時半、皇居見学、丁度ペルーの見学団も来ていた。同じラテン系の国の日系二世だけに懐かしく挨拶した。

この皇居内には、私の職場であった、恩給局があり、知人も居るので尋ねたかったが、団体行動中なので割愛した。

（２７）大阪商船三井船舶株式会社訪問

大阪商船三井船舶株式会社の赤坂の本社を訪問、進藤会長、福田社長、伊藤船舶室長に御逢いした。

かさと丸の訪日に際し、船賃大巾割引という御厚情を謝し、次いで「ぶらじる丸乗組員が船客に対し、殊にかさと丸訪日団に対し、到れり、尽せりの接待をされた事についての感謝状を読み上げた」福田社長より

「この感謝状は、ぶらじる丸乗組員食堂に掲額致します」

と丁重な御挨拶があり、昼食や豪華なお弁当を頂いた。さらに団員一同に「金色の物差」を記念品として頂いた。

（２８）皇太子明仁親王殿下
同美智子妃殿下に謁見を賜る

午後一時半、かさと丸訪日団及び日本海外移住家族会会長田中竜夫代議士、藤川事務局長と共に、東宮御所に参上した一時四〇分、両殿下がお出ましになった。殿下は紺のダブルの洋服、妃殿下は美しい和服であった。一同起立して御迎えした。殿下の隣りが田中会長、妃殿下の隣が田村事務局長と東宮侍従長から御指示があった。

最初田中会長から団員の紹介があり、私からは付添人を紹介した。まず殿下から着席順に金城盛吉氏に対し、ものやわらかに御下問があった。

「貴方々第一回かさと丸移民の方々は大変苦労されたが、一番困ったことはなんでしたか」

と下問された。金城氏は非常に固くなって、暫く考えてから、

「言葉の解らないのが一番困りました」と答えた。

皆固くなってしまって、殿下の御下問に対して言葉少くポツンと答えるだけ、空気が凍って、これは困ったと、侍従長も私もちょっと気をもんだが、やがて紅茶と洋菓子が出たので

「頂戴致します」

と大きな声でお菓子を頂き紅茶を呑み、お煙草までもいただいてスパスパ喫煙した。妃殿下もお菓子を召上っていらっしゃったが、これで、ようやく空気もやわらかくなった。

妃殿下はブラジルの事をよく研究されていて

「島袋さんはマット・グロッソで大きなガソリン・ポストを経営しています」と申上げたら、すぐ「カンポ・グランデですか」

とおっしゃったので、
「カンポ・グランデまで御存知ですか」と思わず口に出た。
だんだん、じょうだんも出る様になり中村たかのさんと渡辺七之助さんがアニャンガバウのお茶の水橋が、高いとか、低くいとか、論争（もちろん本気でなく）した。両殿下はこれを画白そうにながめていらっしゃたので、
「両殿下もあそこをお通りになりますので、高いか低いか、ごらんになれば判りかす」
と申上げたら大笑になった。
中村たかのさんが
「アチバイアという処は、空気もきれいで、果物もおいしく、花もとてもきれいなところでございますあちらへおいでになりましたら、私はおりませんが、是非お立ち寄り下さい」
と、まるで自分の家へ御案内する様な調子でいうので、両殿下とも大へんおよろこびであった。また、
「島袋さんは、孫が二十人もおります」
と申上げたら妃殿下は目を大きくして驚かれた。
「付添の加藤栄さんの娘さん六人全部が、ブラジルの小学校の校長さんや先生をしております」と御披露した。妃殿下は、
「それは、大変結構なことです」とおっしゃった。
両殿下とも、切角ブラジルへ行くのだから、アマゾンへは是非行きたいとおっしゃっていたり、侍従長も、
「ブラジルの田付大使からも、ぜひ、アマゾンへお越し下さい」
と要請があったが、どうしてもスケジュールの関係で行けなくなった

とのこと。
「両殿下がお疲れになることを考慮されたのではないでしょうか」
と申上げたところ妃殿下はすぐ
「身体なんか、疲れてもかまいませんが……」
とおっしゃった。ほんとうに残念そうであった。
昭和四十三年の宮中歌御会に於て
東宮御歌
この水の流るる先はアマゾン河口
手を出してみるにほのひややけし
東宮妃御歌
テラロッシァつづける果てのかなしも　よアマゾンは流れはらから
の棲む
と御よみになったのを拝見し、当時を思い合わせて非常に感激した。
最後に
「ブラジル日系人六十万は、三年前から、両殿下のおいで下さるのを待ちこがれておりました。今年一月、サンパウロの邦字新聞にご訪伯が発表されてから、非常によろこんで、お待ちしております。尚サンパウロには日系人が力を合わせて建てた、文化センターがありますので、お立ち寄りくださいますなら、どんなによろこぶことでございましょう」
と申上げた。このようにして予定の一時間が更に二十分超過したので侍従長が御催促申上げてお起ちになった。吾々は起立して奥へ御入りになるのを見送った。
私達は記念のお煙草を頂いて退去した。

別室で待機中の宮内庁詰の記者団三十名位と共同会見した。

（２９）ブラジル大使館訪問

かねてより、ブラジル大使館より代理大使（大使は賜暇帰伯中）が逢いたいとのことであったので、訪問した。

久し振りにブラジル国旗を見て、懐かしかった。香り高いブラジル・カフェーを頂き、更らにブラジル語で話しの出来ることを団員一同が、非常に喜こんでいた。代理大使もざっくばらんで、民主的であり、普通の人と変らない。まだ若い人だった。マット・グロッソの館員、サンパウロの館員等と話しが、はずんで、一同仲々帰ろうとしなかった。

（３０）歓　迎　会

午後四時、赤坂のプリンス・ホテルで日本海外移住家族会連合会主催、関係諸団体共催の歓迎会があった。藤川事務局長司会のもとに、田中会長、田原副会長、近藤副会長、日伯中央協会の沢田節蔵理事長、海外日系人協会の岩重理事長、椎野ブラジル新聞社長、ブラジル代理大使から丁重な御挨拶があった。

最後に、田村事務局長が指名されたが、とつ然の事で原稿もなく、とりあえず、

「本日は、私共の為に、この様に心のこもった歓迎会をして頂きましてありがとう御座いました。私達は日本で、こんなに盛大な歓迎会を催して頂いたり、こんなに朝野を挙げての温かい御接待を受けようとは、夢にも思っておりませんでした。

これは偏えに、田中会長の誠実さと強力な政治力の賜であると心から感謝しております。尚関係各団体の方々もよくこれに御協力して下さったことについて御礼を申上げます。

またマスコミの皆様が毎日の様に報道して下さいましてこの為東京は一時笠戸丸ブームが起きた訳で、政府もかさと丸移民に対して叙勲にふみきったと聞いております。

最近の日本は、カナダ移民、東南アジア援助に全力を注ぎ兎角中南米に眼が向けられていないような感がありますが、例え一週間の短い間とはいえ、国民の皆様が、かさと丸移民歓迎の為、中南米に眼を向けて下さいましたことは、勲章を頂いたことと同様嬉しく思うのであります。

最後に出迎えて下さいました各県の方々にお願い致します。

かさと丸移民は五十九年の永きに亘って、ブラジルに居りましたので、日本語もやや不自由になり風俗、習慣についても、ブラジル式になっておりますので、さぞかし、失礼の点もあることと思いますが、どうかお許し願います。

尚長途の旅行に疲れておりますので老齢のことでもあり、何卒この点に御配慮下さいます様御願致します」

団員一同は、眼にハンカチをあてて泣いていた。湯ノ口さんが来て「よくいって下さいました。私達は心で思っても、口には出せなかったのです。永い間の外地生活のため、日本の人に失礼になる様な事をするかも知れないと心配しておりましたし疲れてもおります」と、握手した。

その夜宿舎に帰ってから、田中会長自ら録音機を操作されて、座談会

を催した。

夜半読売新聞宮内庁語の伊藤記者から

「明日、閣議後直ちに叙勲というのは、一寸考えられないが、ほんとうですか？　第一回移民生存者をブラジルで、どうやって調査しますか、ブラジル以外の第一回移民はどうなんですか」と質問があった。

「明日閣議後直ちに叙勲というのはほんとうです。かさと丸生存者についてはブラジルへ帰国後新聞広告、ラジオで調査します。ブラジル以外の第一回移民も叙勲されるらしいんですが、どうして調査するかは知りません」と、答えた。

◎四月十八日（火）快晴

（３１）叙勲伝達式

午前九時から閣議、十一時から勲章伝達式、

総理大臣官邸の大広間に金屏風が立てられ、松等の盆栽が飾られ、中央に九人分の椅子がならべられ、極めて厳粛な式場であつた。只定刻になっても山口トモさんがあらわれず、守衛の人まで気をもんでくれた。

定刻国務大臣福永官房長官から挨拶があった。止むなく山口さんの席に代理として座った。

「従来の型をやぶって、閣議後直ちに叙勲したのは皆さんが故郷へ帰る時、是非胸に勲章をさげて頂きたい。という政府の親心であります。また今までは夫婦に叙勲される例はありませんでした。夫妻両方に功績があった場合は夫が代表して叙勲されました。今回は永田さん御夫婦にも勲章をさしあげます」

と発表があり一人々々に勲記を読みあげて勲記と勲章の伝達があった。

山口さんもそのとき、ようやく間にあって、ホットした。福永官房長官も式後ぐっと、くだけて、

「やあ、皆さん、おめでとう、今日はいろんな人から、めずらしくほめられました。よく、かさと丸の人々に勲章をあげてくれたとね」

今日は都知事選に自民党が敗れた為首相のごきげんはななめだったそうだが、丁度おりよく総理も帰って来られ、

「みなさん、おめでとう」

と祝って、中村さんに向かい、

「おばあさん、日本へ帰って何が一番食べたい？」

と、笑顔で聞かれた。たかのさんは、「麦御飯が一番食べたいと思います」これには流石の総理も大笑いだった。ここで記者団から注文を受けて種々なポーズで団員と写真を撮っていたが、佐藤総理は

「ここでは、狭くて、暗くて駄目だ官邸の庭で写真をとろうや、付添の人達も一緒にどうぞ」

と気軽るに自ら先きに立って庭に案内して、まことに気嫌よくカメラにおさまった。

これで公式行事も一切終ったので団員一同ブラジルでの再会を約し、名残惜しげに、各県の出迎えの方々と一緒に別れて行った。

第五章　フジテレビ
８チャンネル

フジテレビは四月十二日から十三、十四、十五、十六、十七、十八日と連日金城盛吉氏を追って取材し、宿舎においても、くつろぐところから奥さんや、娘さん、孫等と談笑するところまで撮影した　四月二十日は、新宿の沖縄料亭、酒礼の門に於て、沖縄の人達が集まって、金城盛吉氏一家と、島袋さん一家と田村事務局長を招待して歓迎会があったが、これはフジテレビの招待で「酒礼の門」の中にも、テレビカメラと録音機を持ちこんでの撮影であった。

沖縄料理、沖縄の踊りを楽しんで皆上気嫌であった。

やがて、踊りが始まったが驚いたことには、雰囲気が盛り上ってくると、金城さんの奥さん、島袋さんが思わず、舞台に上って、踊り出した。その手ぶり、足どりの上手なこと、いかにも、嬉しそうに、楽しそうに踊っていた。

四月二十八日には連日の録画と酒礼の門の録画を合わせて、午後七時からの一時間放送に、沖縄の本土復帰運動にからめて、全国中継で放映し、聴取者から絶賛を浴びた。これを十六ミリ映画におさめて、在伯県人会連合会に寄贈された。

プロデューサーの荒瀬光夫、山上晃、高木氏らも、非常に親しみ深い人達で、しかも礼儀正しく、他社のＴＢＳの沖縄行にも、羽田迄見送り、出迎えをされ、七月二日横浜出港で帰伯の際も、横浜まで見送って下さった。

金城さんも、その後も大変お世話になったそうである。

第六章　ＴＢＳ放送

６チャンネル

ＴＢＳ放送は、四月十二日より十三、十四、十五、十六、十七、十八日と連日金城盛吉さんを追って撮影していた。プロデューサー並木章氏に

「フジテレビもお宅も、どうして、金城さんばかり追うんですか」

と、質問したところ

「金城さんの顔には、永年の苦労が、にじみ出ているし、話し方もボクトツで、如何にも移民の先駆者らしいからです」

と回答があったが、後で判ったところはフジテレビ同様四月二十八日の沖縄の本土復帰運動にからめて、ブラジル移民を通じて、沖縄問題を取り扱っているのだった。なる程両放送局とも、ねらいは同じだと思った。但し金城さんには、

「決して政治的な発言はしないように」

と釘をさしておいた。

ＴＢＳから

「金城さんをジェット機で二十二日沖縄に送り、二十七日に一端日本に帰って午前八時の放送をして貰らい再び二十九日沖縄に帰ってもらいたい。然しあの人はなかなか私達の思うように動いてくれないから田村さんもすみませんが沖縄まで来て頂けませんか」

と申入れがあった。

「金城さん一家だけ、ジェット機で帰り、島袋さん一家が船で帰るのでは沖縄の歓迎にも困るでしょうし、同じ船で日本へ来て、ここで別々になるのは面白くない」

と、一応おことわりした。その後ＴＢＳの並木プロデューサーは上司

の許可を受けて島袋さん一家もジェット機で送るからとのことで、承諾し総勢七人をジェット機で送り、金城さんはさらに娘さん孫さんを二度往復させるので、ＴＢＳの出費も大変なものだと思った。

この放送は「おはよう日本」という、ゴールデン放送であった。

沖縄行きの手続は、なかなか面倒で、東京都に申請し、内閣総理大臣発行の証明書と琉球政府の許可ならびに米軍の了解を得なければならず非常に日時を要するが、流石に一流の放送局で、わずか二日間で総理大臣その他の許可証明が下りた。

◎四月二十二日　快晴

（２２）沖縄訪問

午前九時ＴＢＳの出迎えを受けて金城一家、島袋一家と私八人の一行はジャット機で沖縄に飛んだ。日本へ来てまた富士山を見ることが出来なかったが、辛い機上からその雄姿を見ることが出来た。

途中大阪により、福岡で、沖縄行の税関検査と、日本円を米ドルに換えた。

四時間で那覇空港に着陸した。

空港では、島袋一家、金城一家の出迎えの旗が、へんぽんとひるがえり、出迎えの人　々で、ごったがえしていた。この日の状況は、全国中継されるというので大変な混雑であった。琉球政府主席は日本へ出張中のため小波蔵副主席が、わざわざ出迎えて下さった。

ＴＢＳは里見利夫アナウンサーを派遣して琉球放送とコンビで毎日金城さんを迫っていた。

◎四月二十四日　月

島袋さん一家と健児の塔、姫百合の塔、琉球大学を訪問、沖縄二世の留学を依頼して快諾を得た。

◎四月二十五日

島袋、金城氏と共に琉球政府を公式訪問した。その後琉球新報、沖縄タイムス琉球放送の社長にお逢いしてお礼を述べた。更にオキナワ・グラフを訪問、夜は料亭へ金城夫妻、島袋親子と共に、ＴＢＳ、琉球放送のスタッフを招待して御礼のパーティをした。

◎四月二十六日　水　快晴

島袋氏と共に那覇のロータリークラブに出席、島袋ジョゼー氏はブラジル語で挨拶し、田村事務局長は日本語で挨拶した

◎四月二十七日　晴

（３３）沖縄から本土へ

午後二時金城盛吉氏と共に那覇空港に行く。

琉球放送その他多勢の見送りを受けて出発

午後三時四十分頃、再び富士山を見た午後四時に羽田着、丁度二時間であったＴＢＳ差回しの車で、赤坂ホテル・ニュージャパンに投宿した。金城一家は、旅館「天城」に投宿以上の費用一切はＴＢＳ負担であった。

◎四月二十八日

（３４）「おはようにっぽん」放送

午前七時金城さんの宿まで行き、一緒に、ＴＢＳのスタジオに入った。解説者は東宝映画俳優の小泉博氏、西村アナウンサー、東京混成合唱団の合唱に始まり

①那覇空港で妹たちと再会
②自宅、墓参り
③黎明の塔
が映し出され、スタジオに移って金城盛吉氏娘の夏江さん、孫のロゼリちゃんとの対話
④海上に於て、沖縄復帰運動のため、本土からの船と、沖縄からの船が本土復帰のシュプレヒコールをする
⑤大分から、大野基尚氏夫妻（かさと丸移民、フロレスタ耕地通訳だった人）と金城さんとの対話二元放送
⑥東京、沖縄に於ける沖縄復帰に関するアンケート

この企画は「六十年ぶりの故郷」というのをテーマにしたもので、金城氏が、沖縄の基地を通る時車中で

「沖縄は早く、日本に復帰せんといけませんナア、私ら切角沖縄に帰っても、まるで外国に居る様です」と、ボクトツに語った、これがこの放送のねらいで、あったのだが、金城氏が、誰からも教えられることなく、つぶやくようにいった言葉だけに真に迫っていた

この放送も非常に好評であった。後にＴＢＳはこれを十六ミリのフイルムに収めて、在伯県人会連合会に寄贈された。

放送が終って、下の食堂で食事を頂いたが、このスタッフでも約三十名の人が働いていた。

日本のテレビというのは、ほんとに、大きな企画と、費用を投じるものだと感激した。

プロデューサー、スタッフの人々にくれぐれもお礼を申上げてお別れした。

並木プロデューサーから、
「ブラジルへお帰りになるときもう一度皆さんに集まって頂いて放送座談会をしたいと思います」
と申入れがあった。然し帰る時は各々バラバラであったのでこれは実現しなかった。尚四月二十九日はＴＢＳの費用で金城さん一家は再び沖縄へ午後二時羽田発で出発した。この時もフジテレビの荒瀬高木氏等ほ空港まで見送りに来ておられた。その誠実さには頭が下がった。

第七章　海外日系人大会

日本海外移住家族会総会及
社団法人設立総会

海外日系人協会、主催の第八回海外日系人大会は参加国十五カ国三三一名出席のもとに盛大に開かれた。

◎五月十六日（第一日）火　快晴

かさと丸訪日団からは、林岩松氏夫妻
渡辺七之助氏、加藤栄氏及田村事務局長出席。

（３５）会　議

産経会館五階国際会議場、正面に世界各国の国旗が飾られていた。正面壇上には、日本海外移住家族会連合会の田中会長が議長として着席、午前九時開会が宣言された。

総理大臣、外務大臣の祝辞の後、会議が始まった。ブラジル代表として田村事務局長を指名されたが、何の用意もなく先輩の方々も多勢出席されていたので固辞して受けなかった。

（３６）総理大臣邸に於けるパーティ

午後六時より、首相官邸にて歓迎パーティがあった。
三木外務大臣、福永国務大臣出席
三木外務大臣は
「皆さんは、海外に於て、非常に苦労され、活躍されており、心から敬意を表します。
今、日本の経済力は西ドイツとその三位を競っております。日本はあくまでも平和を守り、国力を充実して、平和へのイニシアチーブをとりたいと思います。どうかみなさん御安心下さい」と、いう意味の挨拶があった。ぶらじる丸同船者も多数参加していた。
◎五月十七日（第二日）水、晴
（３７）会議　経団連本部十四階
田中代議士がやはり議長席に在って開会を宣言された。
海外日系人脇会々長、全国知事会々長桑原愛知県知事の挨拶の後、三笠宮殿下から約三十分に亘り御講演があった。
キューバ代表、カナダの女性の代表の発言が印象に残った。
ブラジルからは、日本移民援護協会の松本竜一氏が、援協の活動状況を詳しく説明された。
その他コチア産組代表、サンパウロ水道局技師の発言があった。
（３８）万国博主催の歓迎パーティ
午後四時から万国博招待のパーティが経団連に於て行なわれ、
石坂泰三氏から懇篤な挨拶があり、アメリカ代表から答礼があった。
（３９）ＮＨＫ「歌のグランド・ショウ」に招待
午後五時より、ＮＨＫ霞ヶ関放送会館に於て

「歌のグランドショウ、リハーサル」を見学した。美空ひばり、都はるみ、由美かおる等超一流の歌と踊りだった。

◎五月十八日（第三日）木、晴

今日は日本海外移住家族会連合会の総会のため、日系人大会は欠席した。

（４０）日本海外移住家族会連合会

通常総会・社団法人設立総会

五月十八日午前十時より、午後五時三十分迄衆院第二議員会館第一会議室において開催された。

外務省長田事務官、移住事業団広岡理事長、大阪商船三井船舶伊藤船客室長、在伯県人会連合会田村事務局長の祝辞があって、議事に入った。祝辞後、田中会長から在伯県連及訪日団員に対してブラジル第一回かさと丸移民歓迎記念アルバムを田村団長に手渡した。

第一号議案　昭和四十一年度事業報告

第二号議案　昭和四十一年度収支決算報告及監査報告

第三号議案　昭和四十二年度事業計画

第四号議案　昭和四十二年度収支予算

第五号議案　都道府県家族会の会名統一と他団体との合併打被について承認を求める

いずれも満場一致可決

社団法人設立総会

第一号議案　議長の選任、田中会長を選任

第二号議案　議事録署名人選任、田原副会長、竹田監事を選任

第三号議案　社団法人日本海外移住家族会連合会設立について承認を

求める
第四号議案　定款について　可決
第五号議案　寄付財産　可決
第六号議案　昭和四十二年度事業計画同収支予算及昭和四十三年度事業計画同収支予算　可決
第七号議案　役員　可決
第八号議案　設立代表者選任　会長田中竜夫氏を選任
◎五月十九日　第四日　金　快晴
（４１）自衛艦練習の見学
皇太子御成婚記念噴水に十二時十分に集合、バスにて晴海埠頭に行き自衛艦４隻に分乗した。私達は「あかつき」に乗った。
午後一時から、四時まで、東京湾内で練習を見学した。
快晴に恵まれ、波もおだやかで非常に快適であった。
四時再び晴海埠頭に戻った時は、自衛艦隊、軍楽隊が吹奏して吾々を迎えて下さった。戦争前には考えられないことだった。
この練習見学は二年前自衛艦が、中南米を訪問した時、海外の日系人が心から歓待して以来の企画の由。
（４２）美濃部東京都知事招待による歓迎パーティ
午後六時半より、椿山荘に於て、美濃部都知事の歓迎パーティがあった、岩重理事長が探している、というので理事長に逢ったら
「今日こそは代表挨拶をやってくれ」
といくら辞退しても聞き入れてもらえなかった。
美濃部都知事は
「みなさんよくいらっしゃいました。

私も曾てブラジルへ行ったこともあり、海外の皆さんの御苦労をよく知っておるつもりです。私が都知事になった時、友人の横浜市長から

「東京都知事は世界で一番忙しい仕事だ、君の仕事が成功するかしないかは、便所に入っている時間が長いか短いかに依って極まるのだ…」

例の美濃部スマイルをたたえながら挨拶された。

指名されたので止むを得ず壇上に立ち、

「甚だ潜越でありますが、御指名を受けましたので、参加国十五ヶ国三三一名を代表して御挨拶致します。只今は美濃部都知事さんは世界で一番忙しい仕事だとお仰いましたが、この一番忙しい知事さんから、日本で一番美しい庭があるという椿山荘にお招き下さいまして、この様な御歓待を受けますことを心から感謝致します。

従来吾々はとかく、棄民といわれて、心中甚だ面白くなかったのでありますが、こうして日本へやって来ますと、日本朝野の大歓迎を受けました。やはり吾々は棄民ではなかった、日本の人々はこんなに吾々を心配して心にかけていて下さったのだと、つくづく思った訳であります。今日はほんとうに心のこもったおもてなしを感謝致します尚この席をお借りして、海外日系人協会の方々に、あらためて御礼を申し上げます。連続四日間に亘り、一分のすきもなく、吾々三三一名という多勢の者を御歓待して下さいました御苦労は　大変なことだったと思います。尚聞くところによりますと、海外日系人協会では、私達日系人のために、日系人センターを建設して下さるため大変な御苦

労されておるとのことであります。私は甚だ潜越でありますが在外同胞百二十万人を代表して厚く御礼を申上げます。

桑原会長、岩重理事長他幹部の方々職員の皆様、アルバイトの学生の皆様どうも永い間本当にありがとう御座いました」

という意味の挨拶をした。

おでん、おすし、その他食べきれない種々の御馳走であった。

尚この大会には、佐藤新吉氏が非常に活躍され、隠岐金蔵氏にも逢うことが出来た。

第八章　岐阜県移住家族会大会に出席

◎六月十五日

岐阜県では、かさと丸訪日に関し別に出身県ではなかったのにもかかわらず、岐阜県下の一二〇市町村にかさと丸来伯の通達をされた。

この為山下太郎と称する人から、金八万円を、かさと丸訪日団の家族の方々に贈呈された。

県庁では、この山下太郎氏という人を探したところ、三人の山下太郎氏があったが、何れも自分ではないと否定された

このお金は、移住家族会連合会を通じて、確かに頂き、かさと丸団員の人々におわけした。団員は見知らぬ人からの御好意を衷心より感謝し、こうした民間人から、この様な御好意を頂くことは、ある意味において勲章を頂くよりもありがたい、と述べた。

この事が、岐阜日々新聞、毎日新聞の岐阜版に、

「田村団長は、御本人に逢って、御礼を申上げなければ、ブラジル

へ帰れない」
と話した、と掲載され、岐阜の放送もその旨を再三放送された由である。偶々岐阜県庁に於て、家族会の大会が開催されることになり、藤川事務局長から誘われて、岐阜の方々に御礼を申上げる好機であるので出張した。
駅頭には岐阜県移住係長の長島真澄氏の御出迎えを受け、車で県庁に向った。
会議は県の会議室で開かれ、ブラジルから帰日された、安田庄吉氏御夫妻（岐阜県人会副会長）溝口一夫氏御夫妻も出席された。
会議は極めて熱意のあるもので、留守家族の人々が如何に海外にある吾が子、吾が子弟を心配されているかが伺われた
安田、溝口氏と共に会員からの質疑応答に応えた。
午後三時終了後、長島氏の御案内で市内見学、大仏様に参詣した。その後、岐阜名物の鵜飼に案内された。
長良川の清い流れに、美しい提灯がゆれている。昏れ残った金華山上の岐阜城が、夕陽に照り映えて美しかった。
見物人を退屈させない為、美しく飾った屋形船に、素人の美しいお嬢さんたちが、揃いの浴衣で踊っていた。
私共も屋形船の中で美味しい夕食を頂いた。
すっかり暗くなって、屋形船の提灯が水の流れに、ゆらゆら、ゆれてこよなく美しかった。
やがて、川上の方から一そう、二そう三そうと、かがり火を焚きながら、頭に烏帽子を頂き、腰みのをつけた鵜匠の人々が、へさきに立って、手さばきもあざやかに、次から次へと鵜をへさきに上げて、

鮎を吐かして、流れに追いやる何本もの手綱が、もつれることなく、さばかれてゆく。

これが太古から伝わった鵜飼である。

なるほど現実のウサを忘れた、楽しい絵巻物であった。これは政府から指定された文化財で、年に一回在日の大公使を招待するという。まことに純日本風の美しきがあった。

藤川氏と共に、県庁で用意された福祉協会経営のホテルに投宿した。このホテルは、護国神社の境内にあり、長良川の清い流れと、新緑したたる若葉に囲まれた、静寂なホテルであった。

再び長島さんに見送られて岐阜駅から藤川氏は東京へ、私は名古屋の郷里に帰った。

長島さんには、ほんとうにお世話になった。氏は移住事業に極めて熱心で、移住者の送り出し、そのアフタケーアに献身的に奉仕され、移住者から感謝されている。

第九章　送　別

◎六月二十一日　水　晴

（43）厚生者に対する謝恩並びに田村事務局長送別の晩餐会

午後七時より、赤坂のプリス・ホテル　シルバールームに於て、厚生省援護局長実本氏、援護係長三浦氏、課長補佐大橋氏、給付係長宮崎氏、滋野事務官、総理府の山口氏及私もお招きに預った。主催者側は田中会長、田原近藤副会長、藤川事務局長であった。

田中会長から援護局に対し、海外引揚給付金について、厚生省が特別措置をとられた事について丁重な感謝の言葉があり、次いで、私に

対し過分なお別れの言葉を頂いた。
私からも、援護局長に対し、
日本海外移住家族会々長田中先生の御斡旋により、時効によって一端打ち切られた、海外引揚給付金を復活して頂いた御礼を述べ、このためブラジルに居る該当者は非常にこの措置に深く感謝している旨を述べた。
田中会長から、
「この度、旧金鵄勲章年金請求も本連合会で取り扱うこととなったそのため厚生省から、山口事務官が総理府に出向された」
と発表があった。在伯県人会連合会としても、是非該当者を探して、種々御世話になるからよろしく御願申上げる旨を田中会長、山口事務官に伝えた。
東京滞在中、田中会長、藤川事務局長は何回となく私を招待され、引き立てて下さった事はまことに感謝に堪えない。
◎六月二十三日　金　晴
永田一氏とブラジル大使館、コーヒー院を訪問した。
◎六月二十四日　土　晴
外務省へ旅券手続に行く。
◎六月二十八日　水　小雨後雨
藤川事務局長と佐々木敬介氏のお姉さん宅を訪問
（４４）在伯県人会主催謝恩会
本会が主催して、上野忍ばず池畔中華料亭「東天紅」に於て謝恩会を催した。
田中会長、藤川事務局長、掛川氏、藤森氏。ＮＨＫ、ＴＢＳ、フジテ

レビ、毎日放送の各プロデューサーを御招待した。
ＮＨＫは欠席された。
「日本海外移住家族会連合会には、かさと丸訪日団派遣を本連合会で企画してから訪日するまで、あらゆる面に於て御厄介になり、今日の成功は、家族会連合会の強力な推進があったからこそである。
また、新聞、テレビ等報道関係の御協力はまことに予想外であって、かさと丸訪日団が叙勲された大きな原因は、マスコミが毎日の様に大きく報道されたお蔭だと思う。まことに、マスコミのお蔭でかさと丸ブームが起きたと申しても過言ではない。
吾々ブラジルに在る、移住者は今回の成功に対して日本海外移住家族会連合会とＮＨＫ、ＴＢＳ、フジテレビ、毎日放送、その他のマスコミに心から感謝している。
旨の挨拶した。
忍ばずの池の見える五階の部屋で心おきなく歓談することが出来た。
フジテレビのプロデューサーの話では、マスコミには大臣候補のリスタがあるそうだが、次期には必らず田中竜夫先生が大臣に就任されると予言していた。
この日午前中御礼のため藤川事務局長とヤークルト本社を訪問した。

第十章　帰　伯

あるぜんちな丸にで帰伯

◎七月二日　月　雨

雨にもかかわらず、横浜港は見送り人でゴッタがえした。
田原副会長がわざわざ船室まで来て贈り物を下さった。
藤川事務局長掛川氏、宮下衛氏、佐藤新吉氏を始め見送り人多数だった。
毎日、読売、共同通信、ＮＨＫの共同記者会見があった。
フジテレビのプロデューサー、カメラマンがわざわざ見送りに来て下さった。
ＮＨＫはその夜テレビで放送したとのことであった。
雨が降って来たので見送りの方が御気の毒であった。午後四時出航
かさと丸団員としては、永田夫妻、中村たかの、東野君江、湯ノ口
畝市と田村事務局長である。満席であった。
最初の三、四日間は、ぐったり疲れ切って、何もせず、寝てばかり居た。
ぶらじる丸では、船客代表の様な形に祭り上げられて、困ったが、その点今度は気楽であった。
◎七月九日　晴
今日は誕生日だったので、船側はボーロを作って贈って下さった。
◎七月十日　月　晴　ハワイ着
着岸がおそかったので、下船せず。
◎七月十一日　火　晴
（４５）永田一氏病む
ハワイ観光、午後は一人で外出し二世の運転手がワイキキのローヤルハワイアン・ホテル（皇太子の泊られたホテル）に案内してくれた。
永田一氏が突然発病した。右足が原因不明で痛み出して歩くことが

出来なくなった。医師の診断を受けたが、病名不明との事。

◎七月十二日　水　晴

永田氏の右足だんだん痛くなるばかり歩行困難のため、船側に依頼して、松薬杖を作ってもらった。

尚食堂のボーイに依頼して、永田氏夫妻の食事を部屋へ運んでもらう。

疲れが、はげしいので船医の診断を受けた。血圧が少し高いとのこと、又心電図で計ったら心臓も少し悪いと注意された。

◎七月十七日　ロサンゼルス着

永田一氏の足が依然として悪い。ロスで下船させることになるかも知れないと船医が云ったので、困ったと思った。

◎七月十八日　火　晴

ぶらじる丸で同船だった台湾人の呉さんが船まで迎えに来てロスの街々を案内してくれた。サシ・セット大通りで本物のヒッピー族を見た。

◎七月二十四日　月

正午デッキ・ランチ、夜、盆踊り、ぶらじる丸の時は、あらゆる会合に出席させられたが、今度は、余り責任もないので気楽である。

盆踊り、ダンスパーティ、船の催事一切に顔を出さない。

船室で、日記の整理に追われた。それでも、また船客名簿を頼まれて作った。

◎七月二十五日　火

船客名簿が刷り上ったので配本した。

船長、機関長、事務長、首席事務員、司厨長と、かさと丸団員は勲六等瑞宝章をつけて記念撮影、幸いに永田一氏の足も、大分よくなった。

湯ノ口畩市氏は船に弱く、ぶらじる丸の時は船酔の為元気がなかった。食事もほとんど喉に通らなかったが、あるぜんちな丸では同室だったが食堂へもかかさず出て、すこぶる元気でブラジルへ帰るのが嬉しくて仕様がなく指折り数えている。

中村たかのさんはあいわからず元気で船中での人気者である。

◎七月二十七日　木　パナマ運河

午前三時よりパナマ運河を通過、正午にクリストバル着、午後はずっと雨。

◎七月三十日　ラグワイラ着

昨夜ヴエネズエラに地震があった。

テレビは何も映らず葬送行進曲をやっている。

地震の為大分死傷者があったとのこと日曜日のため上陸しても仕様がないので終日船中に居た。

◎七月三十一日　晴

ラグワイラ、カラカスは全部国旗半旗だった。地震のため死者があったので国家としても喪に服したのであろう。

午前五時出港キュラソー島に向う。

◎八日一日　火　キュラソー島

正午入港、ここはオランダ領で建物ががコヂンマリして居るがオランダ風の美しい建物だった。
ラテン諸国の中で、此処だけが、オランダ風で変っている。日系人も一家族だけ居るとの事。
ここは自由港で、輸入品や金製品が安い。
愈々これから南米に入る。この次の入港はベレンである。
◎八月二日　水
永田ノキさんが発病して大部苦しんでいる。心臓も悪く顔にむくみが出て来た。

第十一章　永田ノキさん病臥

（46）会　議

◎八月三日　木
午後三時頃、お茶の稽古を見ていたら船長から面談したいとの事、一等のロンジへ行った。
船長、事務長、船医、日本移民援護協会理事の松本竜一氏も同席、
船長より
「船医からの報告によれば、永田ノキさんの病状が悪化し、殊に心臓の衰弱が甚だしく、憂慮している。このまゝ船中で治療することは不可能と判断されるので、ベレンへ寄港の際上陸して病院で加療の上、体力が快復してから飛行機でサンパウロ迄送られたらどうか
まだサントス迄十日間もあり次の寄港地リオ・デ・ジヤネイロまで寄港する処もないので、危険である。ベレンで上陸することをお勧めする」

とのことだった。私から船医に対し、
「ベレンは着岸せず、はしけも不便であり、ベレンから永田夫妻の家までは遠い。なんとか、せめてリオまでもたせることが出来ないか」と質問した。
船医は、
「なんとも云えない。注射でもつか、もたぬか、はっきり云えないし自信もない。寧ろ危険である。それよりもベレンで上陸して専門医に診せて、設備のよく整った病院で治療させることを医師の立場としてお勧めする」
永田一氏を呼び右の旨を伝え、結局医師の判断にまかせる他方法のないことを永田氏に話した。ベレンまで、まだ日もあることゝて、病状をよく診て結論を出すこととし、尚この件については本人に伝えないことを約して散会した。
船側の好意により四人部屋の二人を他室に移し、永田夫妻だけの室とした。永田ノキさんは苦しくても、同室者が居るため遠慮しなければならなかったが、これで遠慮しなくても済むようになりましたと感謝していた。
◎八月四日　金　晴
昨夜からずっと昼夜二時間おきにノキさんの病状を見舞っているが、病状はよくない。呼吸も困難で、横臥することが出来ず、ベットによりかかって全身で呼吸している。手足もむくんで、流動物も受け付けない。
中村たかのさん湯ノ口さん達は切角ここまで一緒に来たのだから、なんとかしてリオまで一緒に行きたいと私にせがむので医師に依頼し

たが、
「心臓が衰弱して、血行が悪く、肺迄血液が廻らないため、呼吸が困難である。肝臓、腎臓も悪くなっているのでリオ迄はもたないと思う」と診断書を提出して説明した。
◎八月五日　土　晴
早朝病状がやゝ好転したので愁眉を開いたが午後再び呼吸困難となった。永田一氏より、
「ベレンで死なせるなら、いっそ水の上で死なせたい。本人は水葬してもかまわないと云う遺言状を書くからリオ迄つれて行って欲しいと望んでいます。
私もベレンの墓場までおまいりすることは不可能だから水葬を望みます」と泣きながら云う。
「どうか田村さんから、もう一度船長にお願いして下さい」
松本竜一氏と共に事務長を訪問、
「永田一氏の言葉も一応家長として尊重すべきで要は家長と医師とゆっくり相談して欲しい。
但し、吾々は、あくまでも最後は医師の判断にまかせる。但しベレンに着いたら心臓専門の医師を船に招いて、診察して頂き、その医師の意見に従うならば、永田夫妻も納得することと思う」と申述べた。
事務長もこの申入れを快諾した。夜ＯＳＫベレン出張所より電報が入った。
1、心臓専門医を乗船させて診察する
2、総領事館、移住事業団、移民援護協会からも係員を派遣する
3、救急車の手配をした

◎八月六日　日　晴

（４７）見　舞　金

永田ノキさんの病篤しと聞き、松本竜一氏が音頭をとって船客有志が集まって見舞金を贈呈することになり拠金したところ、米ドル一三〇ドル、日本金九、八〇〇円、伯貨三五コント

合計伯貨にして四八一コント

松本竜一氏と移住監督の筒井氏が永田一氏夫妻を訪れ、贈呈した。永田氏は感泣していた。

ノキさんの病状は悪く、ベレン迄もつかと思われた。船医は毎日数回往診して看護に万全を期して居た。

◎八月七日　月　晴

昨夜半ベレンの河口についた。午前二時に乗船して来る筈の医師が来ない。

ノキさんは苦しんでいたが昨夜来小便が三回出たので少し楽になった。午前八時在ベレン総領事館福田総領事他領事一名移住事業団、移民援護協会山内事務局長、心臓専門医オタビオ氏は携行の機械を以て心電図をとった。氏は米国にも留学したベレン随一の名医との事で、診察の結果、Ｄｒの処方箋の薬を使うならば、サントス迄大丈夫である。然し一応船の医療設備を見、船医と相談して結論を出すこととなった。

（４８）下船会議

午前九時、福田総領事、移住事業団、移民援護協会山内事務局長、船長、事務長、船医、松本、田村、永田の諸氏とＤｒオタビオ合計十一名が参集した。Ｄｒは、

「下船して、病院に入院加療すれば二、三日で快方に向い、やがては近いうちに飛行機でサンパウロに帰れるようになると思う」と発言した。これに対し永田氏より

「家内はすでに死ぬことを覚悟している家内は水葬になってもいいからサントスへこのまま帰りたい。船側には決して落度はない自分の希望でこのまま帰りたい。船側に迷惑のかからぬよう遺言状も書き夫永田一が署名するから。どうかこのままにして欲しい」と発言した。船長は、

「船側としては最善をつくしたい。ベレンへ寄港しベレンに病院のあるものを入院させず、このままにして若し水葬と云うことになれば、何故ベレンで入院させなかったと責任を問われる。人命は飽くまで尊重しなければならない。助かる可能性のあるものを、このままに出来ない。どうか納得して入院させて欲しい」と希望した。吾々ほ家長としての永田氏の発言、船長の発言の両方を尊重して意見の出つくすまで約一時間半に亘って会議をつゞけた。出港の時間の関係もあり船側にもややあせりがみえて来たので、私から永田氏に対し、

「人命はあくまでも尊うばねばならない。やれるだけの最善の努力をするのが人道である。上陸して入院すれば助かるとＤｒも云っている。このまま航行を続けては死ぬ可能性が強い。私からもよくノキさんを説得するから貴男も了解して欲しい」。

と説き永田氏もそれならばと云うので会議を打ち切ってノキさんに逢い、

「ノキさんのが貴女が入院すればきっと病気を治してサンパウロへ送ると云っている。若しこのまま船に乗って行ったら危ないかも知れ

ない、どうか上陸して入院しなさい。子供さんに逢いたければ同じブラジル国内だから、いつでも飛行機で呼んであげます。早くよくなって、もう一度サンパウロで逢いましょう」
と説得した。ノキさんは苦しい息の中から、
「田村さんが一緒に来て下さるならば降りましょう」
と云う。早速下船の準備をして、ボーイさん六人が担架をかつぎ、はしけに乗せた。途中ノキさんは手をあわせ、苦しい息の中から「サンタ・マリヤ……」とお祈りをあげて居た。
あゝ、このまま二度と逢えないのではないかと思ったが顔には出さず、元気でしっかりしなさい、と力づけた。
総領事の乗用車に乗せて静かに病院に運んだ。福田総領事、山内移民援護協会事務局長にも呉々も頼んだ。入院費、飛行賃は必らず送金するから、立替て支払って下さる様申し添えた。
永田一氏はベレンの川岸から、こちらの方に向って、最敬礼していた。
サンパウロ新聞社の水本社長に逢った水本社長が『永田夫妻の件については、文協の藤井君に電話しておくから』と云われた。
◎八月八日
アルバムの整理をした。ベレンに八十人の移住者が下船したので、船中はひっそりした。永田氏発病から、船中はとかく、ふさぎ勝ちになった様だ。
◎八月九日　水
一等船客のアルゼンチン人トビアス氏が肺炎で危篤状態だと云う噂がひろがった。

氏は暑い時、日光浴して、プールで泳ぎ、そのまま船室へ入る。船室の冷房がよくきいているので、風邪をひいて、肺炎になったとの事、レシーフエで下船させることになったが、波が高くて、下船不能になるではないかと、医師が心配していた。

昔の移民船と違い今は、船側は水葬を出来るだけ避けたい、と事務長が

「水葬があると、船客がシュンとしてしまって、切角将来への希望に満ちて、外地の希望の土地へ行こうと云う人達の夢がしぼんでしまう」と、語っていた。

午後七時、故カステロ・ブランコ大統領の故郷、ホルタ・レーザ沖を過ぎたので午後七時、シェード・デッキで有志の者達が集まって、一分間黙禱した。これをロスから乗ったブラジル人女性ラジオ・ツピーの記者が聞いて、日本人がブラジル大統領のために黙祷をささげてくれて、ありがとう。すぐＲＡＤＩＯで発表したいからその人達の姓名を教えてくれと松本竜一氏に申込んだ由。

◎八月十日　木　晴

（４９）重なる不幸

（イ）トビアス氏死去

午前七時、パジャマにアイロンをかけていたら、湯ノ口氏が来て、昨夜半トビアス氏は遂に死亡したとのこと。船は予定を変更して、レシーフエの沖合に碇舶してボートで亡きがらを上陸させると云う。

永田ノキさんをベレンで下ろしてよかったと思う。

（ロ）　飛び込み自殺

午後二時十分頃、突然船がとまった。

甲板に出てみたら、多勢の人が右往左往している。
ベレンから国援法で帰る女性(二十五才位)が子供二人を甲板のベンチに腰かけさせ、長男に財布をしっかり持たせて日章旗の旗竿をかかげるところから海に飛びこんだ、という。偶々それを見ていた女性船客が甲板から電話で事務室に連絡した。船員がすぐ赤い浮袋を二つ投げた。潮流を知るためで、この処置が非常によかったと船長は云っていた。
船員さんに聞くと
「このあたりの海を見てごらんなさい
まるでヒスイの様にきれいでしょう
だから思わず、海へ飛込んで自殺する人が多いんですよ」
と話していた。
船客一同も甲板から、探した。はるかの彼方に茶色っポイ服を来た人が浮いている。
「あそこだ！」
と見付けてもすぐ見えなくなってしまう
船は二回程大きく旋回している。船長は船橋に立って望遠鏡をのぞきながら刻々に命令をしている。
三時半頃、鯨があらわれ、その為にその人の姿がわかった。ボートを下ろし、三十分位かかってようやく、ボートに引き上げた。すぐ、ボートの上で人工呼吸を始めた。
午後四時三十分本船に帰ったが、その女性富田敏子さんは、ことき れていた。
敏子さんは、ベレンで夫に先だゝれて極度のノイローゼになり、国援

法で帰る途中であった。裕三と云う五才の男の子と礼子と云う二年八カ月の女の子、生後九ケ月の女の子を残して…

船はレシーフエに向った。明早朝レシフェーに着く予定。有志の女性の方々が集まって経カタビラを縫う。子供部屋に遺骸を棺に納め、皆でお通夜をした。

中村たかのさんが、徹夜すると云うのを無理にとめて、半通夜をする様にと忠告した。

◎八月十一日　金　晴

予定より二時間おくれて、午前四時に沖合に入り、岸壁に近づいたのは午前七時、着岸はしない。

午前十時半に棺をボートでおろすことになった。

トビアス氏の弟が飛行幾でアルゼンチンからレシーフェに来ていた。船側では十字架のついた棺を用意したが、トビアス氏はカトリックではなく、ユダヤ教のため、弟から抗議があって、また新らしくユダヤ教の棺をレシーフエで購入するため、時間が大分おくれたらしい。一同シェード・デッキに上る。小雨が降り出した。

（八）沖合へ退去

処が生憎この日は、コスタ・エ・シルバ大統領を、州知事が、軍艦に招待して午餐会があるとのことで、あるぜんちな丸は一端沖合へ退去を命ぜられた。止むを得ず沖合へ退去した。

午後二時三十分再び港に入り、迎えに来たランチにおろそうとしたが波が高くておろせない。遂に本船のボートでおろした。富田敏子さんは英人墓地に葬るとのこと。トビアス氏の遺骸は、ミイラにしてア

ルゼンチンに送るとのことだった一日に二回の葬式だった。甲板で風に吹かれたせいか、風邪を引いた。丁度二十四時間遅れたことになる。船客一同ひっそりとして声なし。

◎八月十二日　土

団員の人達は永田ノキさんのその後の経過はどうかと心配しているのでベレンのＯＳＫに

「ナガタノキサン・ヨウタイ・イカガ・ヘンマツ・アルゼンチナマル」タムラ

と電報を打った。船長は

「私も永い間、船の生活をして来たがこんなに不幸の重なった航海は始めてだ。今日は皆さんに、ごちそうして気分を転換しましょう」

と夜はお赤飯、ぞうに、鯛の塩焼だった。

残された子供達は、女性船員さん達に抱かれて無心であった、が流石に五才の男の子裕三君を見ると涙なしには見られなかった。

◎八月十四日　月

午後五時半リオ・デ・ジヤネイロ着岸

移民援護協会事務局長小幡氏の奥さんの姉さんが乗って来られた。その方の話によれば、永田ノキさんの経過は良好だと云う。団員一同よろこんだ。

「若しものことがあれば、中尾会長始め皆さんに申し訳がない」

と、それのみ心配していたがようやく愁眉を開くことができた。

◎八月十六日　水　晴

（５０）サントス着

午前七時サントスに着岸した。永田ノキさんの娘さんが岸壁から大

きな声で
「お母さんは、よくなって昨日ベレンから飛行機で帰りました」
と、聞いた時の嬉しさ、早速団員の人達にも知らせ、松本竜一氏その他、船長、事務長、船医にも報告した。皆さん、とてもよろこんで下さった。これでやっと肩の荷がおりた。
◎八月十八日　金
永田一さんが来て「家内はおかげで元気になりました」。とよろこんで居た。
援協の小幡事務局長に逢い、お礼を云った。小幡氏は、
「アルゼンチナ丸がベレンに着いた時、中尾さんから、電話があって、費用はいくらかかってもいいからノキさんの病気を直し、飛行機でサンパウロへ連れてくる様にお願する」
と連絡があった旨を話され、永田氏はそれを聞いて感涙にむせんで居た。午後二時半、湯ノ口、中村、東野、永田氏と共に中尾会長邸へ帰伯の挨拶に行った。

第十二章　かさと丸及かさと丸以前渡伯生存者調査と叙勲申請

四月十四日、首相官邸において、福永官房長官より、
「かさと丸生存者全員を叙勲するから生存者の調査をする様に」
との発表があった。在伯県人会連合会はこの生存者調査を行なう為、サンパウロ総領事館の近藤総領事、広岡首席領事、官房の浅山領事とも御相談の上新聞広告を出した。
◎十一月三日　金　曇

かさと丸及かさと丸以前渡伯生存者名簿中間報告をサンパウロ日本総領事館に提出

◎十二月二十三日　かさと丸及かさと丸以前渡伯生存者名簿並びに経歴書叙勲申請書を提出。

第十三章　かさと丸及かさと丸以前渡伯生存者叙勲の表発

◎一九六八年六月十八日　午前八時よりカテドラルに於て「先駆者慰霊」ミサ、午前九時よりシネ日本にて先駆者招待シネマ会「春日和」かさと丸の人々も多勢来ていた。

正午より仏教連合会主催の先駆者慰霊法要が文化センターに於て行なわれた。

午後三時より叙勲伝達式及叙勲の発表。

外務大臣マガリヤンエス・ピント、州知事アブレウ・ソドレー氏も来所。

外務大臣より宮坂国人氏に対し、南十字星章を授与された。

サンパウロ日本国総領事近藤四郎氏より「かさと丸移住者及かさと丸以前渡伯生存者」に対する叙勲の発表があり、その氏名を読みあげた。

次いで記念品の贈皇式があり、

在伯県人会連合会記念品（花瓶）

サンパウロ州知事より

「かさと丸以前渡伯生存者全員並にかさと丸渡伯最年長者に対する記念品」（銀製トロフィー）

ゼネラルモータ株式会社より、全員に、金メダルの授与があり夜は

キンクラブ主催の晩餐会があって、終日華やかな記念祭典であった。

第十四章　叙動伝達式及祝賀会

◎七月二十六日　金　晴

（５１）伝　達　式

午前十時より、総領事公邸に於て

「かさと丸及かさと丸以前渡伯生存者勲章伝達式」

が行なわれた。高令のため出席出来ない人も居た。在伯県人会連合会副会長上野米蔵氏、同小笠原喜一氏日本海外移住家族会連合会佐々木氏も出席、付添も多勢いて公邸はゴッタがえしである。

食堂の正面に金屏風が置かれ、総領事近藤四郎氏より代表の芳賀トミさん（最高令者八十一才）に対し勲記を読みあげ勲六等瑞宝章を授けられた。

それより一人々々に勲記並に勲章が授与された。本人は勿論付添の人選の顔がうれしさに高潮して居た。

終って皆で日本酒で祝盃をあげた。

（５２）祝　賀　会

正午より文化センターに於て、サンパウロ日本文化協会、日本移民援護協会、在伯県人会連合会共催の祝賀会が催された。正面両側にサンパウロ日本文化協会在伯県人会連合会より贈られた大きな花環があった。参会者二〇〇名まことに盛大であった。司会は在伯県人会連合会田村事務局長。

一、勲章伝達式

サンパウロ日本文化協会の宮坂国人会長に対し、サンパウロ大学よ

り、オールデン・アカデミカ・デ・サンフランシスコ最高勲章を、プレジデンテDr・ウイルソン・フエレイラ・ロッペス・デ・アルメイダ氏より授与され、近藤総領事がその勲記をポ語で読み上げた。

宮坂氏はポ語で御礼の言葉を述べた。

二、叙勲祝賀会

サンパウロ日本文化協会

主催　日本移民援護協会

在伯県人会連合会

①移民六十年を期して叙勲された方々を司会者が紹介した。

『永年の間、日本移民の導入、日伯文化の交流、日伯親善に尽された功績に』より、宮坂国人氏に対しブラジル国政府よりオールデン・クルゼイロ・ド・スール勲章が授与された。

②『永年の間、日系コロニアの発展につくされた』方々に日本政府より勲五等瑞宝章が授与された（順不同）

小笠原尚衛、松隈万太郎、羽瀬作良、渡辺マルガリーダ、馬見塚竹蔵、粟津金六、村井利三郎、矢原幸一郎、宮崎八郎、原田敬太、菅山鷲造、上利新吉、石原桂造。（敬称略）三、今から六十年前第一回移民として移住した、かさと丸及かさと丸以前渡伯生存者七十四名に叙勲された。これは日本政府始まって以来始めての例である。訪日された九名の方々は、昨年四月十八日閣議終了後直ちに叙勲と云う

前例のないものであり、又夫妻で叙勲されると云うことも今までなかったことである。この方々に対して先駆者として勲六等瑞宝章が本

日総領事公邸に於て伝達があった。
と司会者より披露してその氏名を呼び上げた。次いで、祝辞

サンパウロ日本国総領事館　近藤　総領事
サンパウロ日本文化協会　延満　副会長
在伯県人会連合会　上野　副会長
乾　盃　後藤　武夫
受章者挨拶　宮坂　国人
勲五等受章者代表　羽瀬　作良
勲六等瑞宝章代表　金城　山戸

午後三時終了一同文化センター正面玄関に勢揃して新聞写真班の記念撮影があった。

かさと丸の人達かさと丸以前渡伯生存者はこれまでの永年の苦労に報われたと満面に笑みとたゝえ「皆様どうも、ありがとうございました」と丁寧に挨拶しながら帰って行った。これで「かさと丸」に関する、すべての行事は無事完了した。

第十五章　結　語

かえりみれば、一九六六年四月十二日
在伯県人会連合会の創立総会に於て、中尾会長から
「第一回かさと丸移民訪日派遣」を提唱されてから、この大量叙勲

と云う、史上空前の行事が行なわれるまでには、丸二年三ケ月半を要している。

郵便事情の悪いブラジルにあっては訪日団の募集、生存者の調査に予想外の時日を要し、又締切後に追加があったり、すでに死亡した者が生存していることになっていたり、で大変苦労もし、総領事館広岡首席領事、浅山領事、赤尾館員等にも御手数をかけた。

然しながら、この大事業が成功裡に終ることが出来て、関係者一同は深い喜びであった。

この事業が成功した大きな原因は

一、中尾会長の先駆者を敬愛する誠実さと、企画と指導が適切であり、然かも実行力のあったこと。

二、日本海外移住家族会連合会々長田中竜夫衆議員の海外移住者に対する深い愛情と強力な政治力。

三、日本政府と三井大阪商船株式会社の深い理解と協力。

四、日本海外移住家族会連合会常任理事藤川事務局長のマスコミ対策のよかったこと。

五、ブラジルと日本のマスコミが、かさと丸訪日派遣と云う事業に賛同してよく報道してくれたこと。

六、そのため、ブラジルに於てはコロニアを挙げての壮挙となり、日本に於ては「かさと丸」ブームのおきたこと。

以上の点が挙げられると思う。在伯県人会連合会はこの第一期事業の成功に鑑み、今後も益々移住者援護のために力を尽したいと思う。

（かさと丸訪日団引卒者
県連事務局長　田村　徹記）

編集後記

本会が、第一回かさと丸訪日団を派遣してから、すでに二年になる。

その後、かさと丸及かさと丸以前渡伯生存者の調査と云う、極めて困難な仕事にとり組み、更らに叙勲申請を行ない、歴史的な七十四名の大量叙勲と云う結果を生むことができた。

その間、海外引揚給付金の受付及支給、海外引揚交付金の受付と云う膨大な事業を行ない、その他訪伯者の接待等種々の事情から発刊が延びた事を、祝辞を頂いた皆様、執筆して下さった方々、広告を好意的に掲載して下さった方々に、くれぐれも御詫び申上げる。

凡そ、会の存在と云うものは、立派な仕事をすることによって、その存在価値を生ずる。

中尾会長は、かねてから県人会連合会の仕事と云うものは、人の真心に訴え、後世の人々が、一世の人達はよくやってくれたと感謝するような仕事を残すべきだ、固い信念をもっている。

本会はこの意味において、これからも尚一層移住者の権益擁護、移作者の援護と云う大きな使命か果すべく努力して、なるほど、在伯県人余連合会は存在価値がある、と云われるようにしたい。

やはり、これには、在伯の各県人会の団結と、日本海外移住家族会連合会とのより一層緊密な結束を固めて行かなければならない。

日本よりの移住者が激減して来たことは、甚だ心さびしいものがあ

るが、こうした時、本会は移住者のアフターケーアに力をそそぎ、ブラジルは住みよい所、将来性のある国であることを、母国の人々によく認識させれば、必らず移住者もふえてくるものと思う。

日本朝野の方々、ブラジル日系コロニアの皆様が、本会発展のために、さらに御支援あらんことを御願いする。

在伯県人会連合会

事務局長　田　村　徹

「かさと丸より六十年」

非売品

一九六九年五月十　日　印刷
一九六九年六月十八日　発行

発行所　在伯県人会連合会
後援　ブラジル日本文化協会
ブラジル国サンパウロ市サン・ジョアキン街三八一番地

印刷所　パウリスタ美術印刷株式会社
サンパウロ市オスカル・シントラ・ゴルジンニョ街四六番地
電話　三六・七九六七